

# 憎悪の瞳, 渴望する愛

伊佐那岐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——少年の話をしよう

少年は生まれた時から、愛に包まれていた。

母に愛され、父に愛され、周囲に愛された。

多くの愛を与えられ、少年は育つ。

少年の家庭には愛があふれていた。

しかし愛とは、表裏一体

愛が強ければ強いほど、その愛が奪われた少年は

どう変わるのだろうか

# 目次

第0話 愛と喪失 喜びと絶望

1

第1話 悪魔との開墾

24

第2話 堕天使の断末魔

53

第3話 予想外の接触

103

第4話 復活のミラーモンスター

142

第5話 奪還シスター、暴力の祭

195

第6話 動き出す闇 渴望する愛

267

第7話 動き出す闇・忠実なる最強のし

もべ

第8話 現れたフェニックス

322

番外編①【佐野君の冥界調査】

355

第9話【守るべきもの】

384

第10話【朱乃の想い】

442

第11話 守る者の為に

491

第12話 ナイトの怒り

541

## 第0話 愛と喪失 喜びと絶望

俺は…いや…あの頃の僕は何も知らなかった。

目が覚めると…外の木々が涼しげな風に揺られ“かさかさ”と葉が揺れる音が耳に鼻には苦々しい、しかし香しい、コーヒーの香りがドアの隙間から漂う。

目をこすり合わせ、大きく欠伸をしながらその小さな体を“トントン”というリズムカルな音を響かせる方へと歩みを進ませた。

何時か、幼いながらも一生懸命に階段を昇り降りする愛らしい姿に周りにはほほを緩ませた。

階段を上ると一つの扉が見える。小さなガラスから、カンカンと射す日の光に目を閉じながらも扉を押し一步を踏み出す。

「あら…蓮ちゃん？もうおつきしたの？」

「ママ〜」

台所から優しい顔を覗かせる母親に“ととと”と小さな足をバタつかせ近づく。

母親もいつもの事からか、“仕方ないな〜”と嫌がるそぶりどころか笑みを浮かべ、近づいてきた少年をその豊満な胸で抱きしめる。

少年は程よい弾力と柔らかい胸に顔を埋め、のぞき込むように笑みを浮かべている母親を見上げるようにして笑みを浮かべる。

「起きたのか蓮？」

「パパ〜」

台所からは今まで調理をしていたのか、エプロンをつけた父親が母親と同じく笑みを浮かべ、小さな頭にぽんと大きい掌を置く。

何時もの毎日だと思った。

母の胸に顔を埋め、父の手の平が頭を包む

何より両親の屈託ない、愛を感じられる笑みをその瞳に写すこと

「ママ〜。パパ〜。おあよう」

「おはよう！蓮（ちゃん）」

それこそが僕……相川 蓮（あいかわ れん）の幼いころの……何時もの日常だった。

西暦0000年 相川蓮は周りがかごく普通と呼ぶ家庭に生まれた。

当時小さくもあふれんばかりの鳴き声を上げ泣いていた僕は常に母の柔らかい胸に包まれていた。



母親の名前は相川 天音（あいかわ あまね）

母は甘えん坊な僕をいつも暖かく抱きしめ愛してくれた。

僕が泣いているときには真つ先に駆けつけ、僕が笑えば一緒に笑ってくれた。

そして、そんな優しい母のそばには常に父親である一人の男が寄り添っていた。

父親の名前は……相川 始（あいかわ はじめ）

小さな喫茶店バカラランダを切り盛りしている一家の店主として母と一緒に僕を愛してくれた。

休みの日には母と大きくなった僕とを連れて山や海、色んな所に連れては、母と僕の映った写真を撮ってくれる。

毎日が笑顔であふれ、大きくなった僕は少しずつだがお店の手伝いをする様になる。

小さな喫茶店だ。そこまでお客さんが入るわけではないが、お昼時などは少しずつだがお客さんが増えてくる。

父や母だけでは手が回らないことも多く、小さい僕は食事がすんだ物や飲み終えた食器を小さい手で父の所へ運ぶ

そうすると父はにつこりと笑い「ありがとう」と優しい笑みを浮かべる。

僕には気づかないようにしているが父は本来はあまり笑みを見せない人だ

だが僕と母がいる時だけはその笑みを浮かべる

僕はそんな父が母と同じく大好きだった。

あの日……までは

僕たち家族の運命を根底から覆したあの休日。

僕と母は父と一緒に遠くの川へとバーベキューに行こうと朝から準備を進めていた。

この日は僕たち家族のほかにも母のおじさんにあたる男の人や父と長い付き合いが長い知人を含め行く予定だった。

父にある一本の電話がかかり、受話器に耳を付け相手の声を聴いた瞬間、父の表情が変わる。

僕と母から離れながら会話している父は相手の話に頷き、僕たちの下へ厳しい表情を浮かべながら

「天音……蓮、今日のバーベキューは中止だ…悪いけど、このまま家で過ごしてもらえないかい」

「えーパパやだよーぼく川でみずあびしたいよ」

父は突然バーベキューは中止という。突然の事に楽しみにしていた川遊びができな  
いと当時、この時、初めて駄々をこねたものだ。

「始…さん？何か」

「天音ちゃん…悪いんだけど、俺はこれから橘たちと合流する。良いかい、絶対に外に出てはいけない。」

「でもっ！……わかりました。この家でこの子と一緒にあなたの帰りを待ちます」

「ありがとう……蓮、ごめんな……川遊びはまた来週に連れてってやるから」

そういうながら何時もの優しい笑みを浮かべると、飛び出すようにして家を出ていった。

母もその背が遠ざかって行くに連れ、はっとして歩み寄ろうとするが、すぐにその手がまだ幼い小さな息子のてを握っているのに気付き、歩みを止める。

父が家を出て行った後は、僕は母と二人つきりで過ごしていた。

と言つても父には家から出てはいけなと言われていたため、近場の公園や原っぱなんかには行けず、当時遊び盛りの子供だった俺には少しだけ苦痛であった。

おもちゃで遊んでてもつまらなく、外にも行けないため駆け出すこともできない

そんな時だ。母が扉の隙間から顔を覗かせたのは。

「蓮ちゃん、今日はお外にも行けないから蓮ちゃんの大好きなスイートポテトパイでも一緒に作ろうか♪」

「うんっ！わーい♪ママ大好き！」

母が今日には川に行けなかったからと、僕の大好きなスイートポテトパイを作ってくれ

ると言い出したのだ。

自分の好物を作ってくれと聞いて僕は母に抱き付き、一緒にキッチンまで行く

小さいながらも良くお店のお手伝いをしていたことから母の隣で今や今やと好物を待ちつつ料理のお手伝いをしていた。

そう、あの時だった

ガチャリン♪

店の扉が開き店内に“コツコツ”と足音が響く。

店は今日のは出かける予定でいたために休みのはずだ。

不思議に思った僕と母は、もしかしたら今日一緒にバーベキューをやる予定だった母のおじさんかもしれない

そう思いつつ、母の手をぎゅつと握りしめ厨房から店内へと体を向かわせる。

店内には知らない男が立っていた。

年は若く20代、黒いライダースーツに身を包んだ男が店内を見回していた。

ドクンっ！

その時、僕は感じたことのない、今思えば背筋がぞつとするような感触が子供の小さな体を駆け巡った。



僕は母に抱き付き、母も落ち着かせようと自分の胸に頭が乗るように、僕をだっこし背筋をさする。

「あのー申し訳ないのですが……今日はお休みなのですが」

母は突然のお客に不信感を抱きつつも近づき、声をかける。

男は母の声に驚きもせず薄く閉じられた瞳で、母と抱いている僕を交互に眺め、薄ら笑いを浮かべ

「お尋ねしますが……相川<sup>あいかわ</sup> 始<sup>はじめ</sup>さんはいらっしゃいますか？」

「主人なら今朝出かけてしまいました……主人に何か御用だったでしょうか？」

男は母の言葉に一瞬、ふむと考え込むような表情を浮かべ

不気味なほどに口元を吊り上げこう言った。

「いや……」  
「ジョーカー」が居ないのは此方としても好都合……それに、我らが血を半分も受け継いだものがある。人間とアンデッドの混合種……実に面白い」

母は男の不気味な言葉が何を言っているのかなんて解りもしなかっただろう

だが男が明らかに異質なものであることは、肌で感じたのだろう。

ボタンツ！と厨房へと続く扉を開け、その奥にある非常出口に駆け出す。

男は追いかけるつもりもないのか、それともどう抗つても逃げられないだろうと高をくくっているのか

恐らくは後者であろう

しかし、幼いわが子を守らなくてはと、僕を抱きしめ母は走り続ける。

母は無我夢中で走り、いつも3人で遊ぶ原っぱを通り、始に連絡を取ろうと携帯を取り出そうとした時だった。

「キヤアアアア！」

母の大きな叫びに顔を向ける

黄緑色の原っぱに白い怪人が現れ、母と自分を囲むようにして徐々に近づいてくる。

退路を断たれ、もう動けないと地面にへたり込み、母はこの子だけでもと、僕を力一杯抱きしめる。

母に抱きしめられながらかすかに見える隙間から、あの黒いライダースーツの男が見える。

男は白い怪物の中を悠々と歩みよる。

「お願いです！この子は！この子だけはどうかっ！私はどうなつてもいいから！」この子だけは」

幼い自分を必死に抱きしめその瞳に涙を浮かべ必死に訴える母に男はにやりと笑う

その瞬間、男の体から水がはじけるように飛沫が上がる

同時に先ほどまで笑っていた男は、周りに沸く異形の怪物と同じ化け物へと変貌する

その姿に目を奪われ恐怖する母

自分を抱きしめていた腕の力が一瞬弱まった瞬間、その体から離れ、母と異形の怪物、アルビノジョーカーの間に立つ

「ほう」「蓮ちゃん!？」

母の叫びが背中越しに響く。

手が震え、目の前の怪物に恐怖し、手や体が震える

ジョーカーは目の前の幼子にほんのわずか、吹けば消えてしまいそうな存在に目を向ける

自らの姿に怯えている目の前の小さな、それこそ腕を軽く振れば死んでしまうだろう程の存在

それが、見つともなく無様な表情を浮かべこちらをにらみつけ、母親を守ろうとしている。

無駄なあがきだと思った。

いくら“同胞”の血を半分継いでいるとは言えまだ小さい幼子だ。

母親は既に全身を恐怖で包まれたか、先ほどから声だけ上げ動けない

それが人間の愚かしさだ。

しかし、この幼子は自分のこの姿を見ても、なお母親を守ろうとする

いつの時代も子供はただ泣き出すだけというのに

アルビノジョーカーは面白いと考えた。

当初の目的ではこの子供は消すつもりだったが

(この子供を生贄にすれば太古の力はより強きものとなる！)

そう考えていた。

「まっママをいじめるな！……」

僕は自分でも何をしているのかわからなかった。

後ろでは母が“逃げて”と涸れた声で叫び続けている。

何時も笑っていた母をこんなにもいじめるのは誰だ！



目の前の変な奴だ！

そう意識した時には僕の口は震えながらも目の前の怪物に叫んでいた。

幼い子供の：恐怖や憎悪と言った負の感情を知らずに育ってきた幼い子供の精いっぱいばいの抵抗だった。

だが、そんな叫びは目の前の化け物には何にも意味をなさない。

怪物の手は僕を掴もうと伸び、その鋭利な爪で殺されると察し、顔を腕で覆い尽くす

だが

“ズシヤツ！”

「あつ……あ……れ……ん」

鋭利な爪の代わりに、再び、毎日感じている暖かなぬくもりに一瞬包まれた瞬間、何かを貫く生々しい音と同時に、母の霞むような声が聞こえる。

恐る恐る目を開けた僕の目に映ったのは、普段の母の優しい笑みと

その母から生えている怪物の鋭利な爪だった。

# 第1話 悪魔との開墾

日本最北端、北海道札幌の外れにある古びた洋館

その洋館はもう何年も前から、元々の持ち主が事故死して以降、入居者が次々と消える現象が後を絶たなかった。

だからなのか、建物自体は古び、遠目から見てもボロボロで今にも崩れ去りそうである。

そんな誰も近づこうとしない洋館に一人の男が歩みを進めていた。

男は真っ黒のロングコートに身を包み、顔にはサングラスを掛けている

誰か見れば怪しいと警察に通報しそうな格好だが、生憎不気味な噂が立っている為、子供でも気味悪がって近づかない

ではなぜ……そんなところにこの男は近づくのか

“ガコンツ！”

男は扉の目の前に立つと、木製の扉を蹴り飛ばし、堂々と中に侵入する。

見れば見るほど怪しいうえに、粗暴と勘違いされる行動を気にせず、男は洋館内を土足で歩く。

「……ん、あつちか……」

男は何かを探るように洋館の奥へと歩を進める。

実はこの洋館、広さは一種の境界並みだった。

ある報告書では、夜な夜な怪しげな黒魔術的なことを趣味として開いていたとか

「(一) (一) だな……」

男は奥まで来ると、他の部屋に比べ、一回り大きい扉の前に立つと、入り口同様に扉を蹴り壊し中に侵入する

その瞬間、男は顔をしかめる。

部屋から漂う独特な臭い。破壊されている家具にこびり付くような跡

そして、頭上をカサカサと蠢く何かに

「キシヤアアアアアアア!!!」

“ サツ ”

上から奇声とも聞こえる声とともに降ってきた物をに男は余裕でよける。

まだ原型があるテーブルを破壊したそいつは仕留め損ねた男に向き直る。

「シトメソコナツタ。ナマイキナ、ニンゲン」

男の目の前に振ってきたそれは、上半身が美しいポテンシャルを描く半裸の女性だ

しかし、下半身がタランチュラの10倍以上の蜘蛛の化け物であるが

さらに女の口元は腐臭とともに汚れていた。

真つ赤な血だまりに

「はぐれ悪魔、ランクS　女郎蜘蛛のエルティスだな」

「ナニ!? ナゼ! ワタシノナヲ」

「答える必要はない……なぜなら」

男はサングラスを外し、コートの内ポケットにしまうと同時に四角い箱を取り出す。

カードデッキと呼ばれる四角く、ケースの真ん中に特徴的なレリーフが彫つてある箱を

男は前にそのカードデッキを翳す。

するとどうだろうか、男の腰にベルトがどことなく現れる。



「キサマ！オツテノアクマドモカ！！オロカ！ジツニオロカダ！ワタシハ、オツテキタモノヲナンニンモ」

「食い殺したんだろ……だから俺が呼ばれたんだよ」

「ナンドト？ハツハツハツハ！！キサマノヨウナ、ガキガ！ミノホドヲシレ！」

男の挑発に激昂したエルティスは男が何か行動を起こす前に仕留めようと、猛スピードで突っ込んでくる。

しかし男は、その口元に笑みを浮かべ、掲げたカードデッキを腰のベルトのバックルに装填する。

「……………  
变身」

「……………よう、…ああ、終わった。…ん？怪我？この程度の相手にしていたら俺は3年前に死んでるよ」

俺は今回の依頼人に電話していた。正直依頼に文句の一つも言いたくなる

えり好みをするつもりはないが、どいつもこいつも話にならない。

「殺した？ああ…とりあえずあんたの…要望通り死ぬ直前で一応生かしているよ」

俺はちらりと目を向ける。

そこには血だまりの中で辛うじて呼吸しているであろう先ほどの化け物、エルティスのみじめな姿があった。

だが、そこにあるのは上半身である女の部分だけである。

では下半身は？と言うとその周りに大小の肉片が細かく刻まれ腐臭を放っていた。

「ほら……今回の依頼人がお前のみじめな声を聴きたいとよ」

エルティスの残骸に向け、俺は自前の携帯を向ける。エルティスは当初の余裕などみじんも感じられず、おびえた表情でこちらをにらみ

「コロセ……化け物」

「化け物に化け物呼ばわりされるのは心外だな……まあいい、ならてめえは食われろ……」  
「ムニ」

“キイイイイイイイ!!!”

冷徹な処刑宣告とともに現れたそれは、直径4mにもなる通常ではありえない大きさの蝙蝠、それが一瞬にしてエルティスの残骸を飲み込む。

「キイイイ！キイ」

「あん？まずいだと。文句を言うな…つち、ああ、悪いこつちの話だ。…ああ依頼は終了だ。俺はこのまま帰る。北海道くんだりまで寄越したんだ。報酬はそれ相応のものを寄越せ。以上だ」

“カチャ”

折り畳み式の携帯を懐にしまうと、イラついているのか男はそばにあった椅子の残骸を蹴り飛ばす。

正直今回は本当につまらなかった。ただ変身した後に、奴の突撃に合わせてカウンターで奴を刻んだだけだ。

まずは動けなくするために6本の足、そして痛みを絶叫を上げる前に残った下半身と上半身を切り裂き、下半身は4分割に刻んだ。

そして最後に両手と、そのあと首を刎ねようと思ったが、倒したことを依頼者に証明しなくてはいけないのと

ダークウイングのご飯にしようと考え付いたから。

だけど、不完全燃焼だ。ランクSと言うのだけあって、そこそこ遊べると思ったんだが……解体するのに1分もかからなかった。

「明日……は学校……は、サボると煩いのが出てくるから……適当に出れば問題ないか」

そして次の日、俺こと相川蓮（あいかわれん）は自身の通っている駒王学園（くおうがくえん）の新校舎、生徒会室にいた。

「と、まあ家の事情で北海道まで行って、帰りにラーメン食べて、そのままこつちに来たというわけです。……これで宜しいでしょうか蒼那（そうな）生徒会長」

「ええ、前半はお家の事情と言う事で問題はないです。ええ問題ないですよ。ですが、行き成りバイクで登校は校則違反です。相川君」

理由は聞かずともわかるだろうが、家に戻らず直接バイクで学園に突撃をかましたからである。

「幸い、というか、今頃体育館で始業式が始まって誰もいないだろう時間を狙ったのだが」

（なんでいるんだよこの女マジで）

「何か…言いたそうな笑みがあるようですね、ねえ椿（笑）」

「そうですね会長」



登校してバイクを誰にも見つからないように旧校舎の茂みに隠そうとした所をこの面倒な2人に見つかったのだ。

俺の目の前でこめかみを若干引き攣らしているメガネ十平（貧乳）な女がこの生徒会室の主である支取 蒼那（しとり そうな）

そして、何故か手に持つ書類で顔を隠し、チラチラとこちらを見てくる、これまた口ングの黒髪＋メガネ＋ボン（巨乳）の女が副会長の真羅 椿姫（しんら つばき）

椿の方は、少し押し込めば見逃せてもらえそうだが、蒼那に見つかったのが痛かった。

「まったく……あなたは、毎度毎度バイクでの通学は学生は禁止だと何回言えば聞くんではないか？ ええ、それに、毎回毎回の遅刻、酷い時は無断欠席。もう何回でしょう。それに最近は聞きませんが、郊外での暴力沙汰、先生たちはあなたの成績を考慮してある程度、見逃しているようですが、これ以上は」

「会長！ 落ち着いてください！ 落ち着いて」

肩で息するほど、怒んなよ…と正直うんざりしている。という表情は一切出さずにとりあえず申し訳なさそうな表情をし

「申し訳ありません……今後は気を付けるので」

「あなたはっ！……っ……わかりました。しかし、今度何か違反を起こせば流石に親御さんの」

「俺に（・・・）……親はいない（・・・）」



“ゾクリッ”という擬音とともに背筋が凍る

相川蓮……目の前の少年から瞬間的に発せられた威圧感に私と椿は体が硬直する。

「では……失礼します」

相川君が後ろの自分たちを顧みず生徒会室から退席する。

それと同時に自分たちは謎の威圧感から何とか解放される。

全身から汗が吹き出し、止まっていた心臓が落ち着きを取り戻し始める。

(今の威圧感は一切何！……本当に彼から発せられたの！)

「椿……どう思った？」

「っー…はあはあ…動けませんでした。それどころか、生きた心地がしませんでした」

自分も椿と同意見だった。あれは17の少年から発せられる物ではない。いや、むしろ悪魔である自分たちを威圧だけでここまで

「少し…調べてみる必要があるようね」

「会長…笑って…」

蒼那は自分でも気づかないうちに笑っていた。

自分でもわからない、今下手したら殺されていたかもしれない

人間であるはずの、たった17歳の少年に

(彼をものによければ…もしかして眷属に)

「って思われているんじゃないか、本日遅刻して、さらに生徒会長様のお叱りを受けてき

「我が親友、蓮」

「前置きは余計だ剣……しかし、不覚だった」

「ハハハ！レン！確かに、彼女は君の事を調べると思うが、調べても大したことは出ない  
だろ」

「確かにお前の言うとおりだレオ……しかし、万が一があるからな」

俺は生徒会室を後にしたのち、屋上にやってきた。

今日は始業式とのことで生徒は誰もいない

いや……正確には2人ここにいるが

「でどうするんだお仕置き蓮」

「今度変なあだ名で呼んだら迷うことなく殺す」

壁に寄り掛かりニヤニヤしてこちらを見ている男

名前は神代剣（かみしろつるぎ）、自称神に代わって件をふるう男

そしてもう一人、朝黒にΨのマークが描かれたTシャツを中に着込んでいる

名前はレオ・花園、当初は日本語が全く駄目だったらしいが今ではペラペラだ

神代剣（かみしろ つるぎ）とレオ・花園、この二人は俺と同じく、だが違う力を持っている

複数で行う依頼なんかもレオか剣と一緒に行う

「支取 蒼那…いや、本名はソーナ・シトリーだったか…奴にはモンスターをつけてあ  
る」



瞬間、二人の表情がふざけたものから険しい表情になる

「レン…それは会長さんを…消すと言う事か」

「最悪の話だレオ、サイガフォンの先をこちらに向けるな」

「……信用しろと」

「安心しろ、仕事の標的でもない限り殺しはしない…付けてあるのも」エビルダイバー  
「だ」

エビルダイバー…そのモンスターの名前はこの3人の間ではよく出る。

俺が特に信用しているモンスターの1体だからだ

ただでさえ余計なことに、戦力を裂くんだ。しかも、信用があるやつを

「そうだ！蓮、お前今日は時間とれるか…」

「唐突になんだ…正直今日は早い所かえってシャワーを」

「よし！暇だな！実は…」

「話聞けよ…」

それから1時間後、蓮は小さくグチグチ文句を言いながら旧校舎の方へ歩んでいた。

茂みの方にバイクを隠したままだったのを思い出し取りに行く途中

しかし、それだけでグチグチ文句を呟くような男ではない

原因は剣の最後のお願

『悪いんだけど、今日新入部員向けの相談を主将から相談されてさ……2年全員で午後いっぱい集まるんだわ、だからお店の手伝い変わってくれ!』

そう頼まれたのだ。正直嫌だったが、剣には貸がある為、断りずらかった。

それに剣が言っている店、それはとある喫茶店の事を示している。

剣、レオ、そして蓮の3人はその喫茶店、バカラランダの裏にある家の一室に住んで、い

わば共同生活を行っている。

しかもこの店の店主は蓮の父親だと言う事から、蓮は余計に店を手伝いたくはなかった。

父親とは……いや、あいつは父親ではない！

あいつは、母さんを……守れなかったんだから

「あの？どうかしましたか？」

突然、背後から声がかけられる。

同時にコートの懐に手を伸ばしいつでもカードデッキを取り出せるようにし振り向く。

そこにいたのは1人の女性

先ほど生徒会室にいた副会長の椿にも劣らず、美しい黒髪を後ろで纏めてポニーテールにしている。

何よりその顔つきに俺は驚きを禁じ得なかった。

その顔は……幼い自分の目の前で殺された母、天音の姿とよく似ていたから……そして負けず劣らず大きい

「あ……ま……」

「? 本当に大丈夫ですか?」

彼女は恥ずかしがらずこちらの顔を覗き込んでくる。行き成りの事に思わず息をのんでしまうも、すぐに後ろに下がり、赤面する顔を背け

「ごっごめんなさい……ポーっとしていたから……あの……本当に何も無いんで！」

それだけ言うと振り返らず一目散に蓮は駆け出す。

その瞳には、一滴の涙が流れていたことは……誰も知らない

1人を除いて

私は思わず佇んでしまった。

部室に向かう途中で茂みの中にたたずんでいる一人の男性に声をかけた。

本来なら無視しても良かったんだけど、その子が駒王学園《くおうがくえん》の制服を着ていた事、そして俯き、ただ黙って佇んでいる姿に何かあったのかと気になってしまった。

背後から近づき、声をかけると、男性は此方を警戒したのか、後ろに飛びのきそのコートに手を入れる。

その姿はテレビドラマの刑事が懐から拳銃を取り出す姿に見えなくもない。

だが男性は私の姿を目にすると、目を開き驚きのあまり硬直してしまい、そのあと声をかけると、表情を赤面させ、自分から逃げるように茂みにかけていった

私は思わず「待つて」と声を掛けようとするが、男性はその前に茂みの奥に消えてしまふ。

そのあとでバイクのエンジンの音が響くが、私は別の事が気になってしまふ。

男性が私の顔を見た瞬間、一瞬だが確かに

(泣いていましたわ)

「朱乃? どうしたの…そんなところで立ち尽くして」

「えっ…ああ…ごめんなさい、何でもないわ…行きましようかりアス」



## 第2話 墮天使の断末魔

あの女性は誰だったんだろうか

母である天音の面影と彼女が一瞬だが重なってしまった

だが彼女は母ではない

だって母は

「つー…はあ…なんて夢だ…」

夢から覚めた俺は思わず悪態を吐かずには居られなかった。

数日前に旧校舎裏の茂みで出会った女性

母によく似ていた女性の事を今になって思い返すとは

気になって調べてみたら彼女の名前は姫島 朱乃（ひめじま あけの）

どうやらオカルト研究部と呼ばれる部活の副部長をしているとか

そして彼女を調べていくうちにもう一人、リアス・グレモリーと呼ばれる女性に繋がりがあった。

珍しい、紅の美しい髪＋大きいと言う事で学園では姫島 朱乃と合わせて2代お姉さまとも呼ばれていた。

そして最も重要な情報……リアス・グレモリーは現魔王サーゼクス・ルシファアの実の妹であり、姫島 朱乃はそのリアス・グレモリーの女王

故にむやみに近づくのは、藪蛇をつつくと同義だと結論した。

だからあまり考えないようにはしていたんだが

「よう！蓮起きてるか!!朝食の「だから人の部屋に入る前にはノックをしろって言ってるだろうが!!」ぐおおお！」

人が必死で頭抱えて悩んでいるときに……と目の前の剣《バカ》を見下ろす。

悪気はないんだろうが朝っぱらからのこのテンションは頭が痛い

俺は部屋で悶えている剣《バカ》を放置して店の方に顔を出す。

店内は6つのテーブルと7つのカウンター席で、カウンターの後ろにはコーヒーマーカなどが立ち並びさらに奥には厨房が覗きこめる

店内を見渡せばテーブル席に1人の青年が本を片手にコーヒーを飲んでいた。

青年は店内に入ってきた蓮に気づくとこちらに手を挙げる

「やあ・・おはよう蓮君」

「今日は朝早いですね木場さん」

俺は挨拶を交わしたのちに木場（勇）と呼ばれた青年の目の前に座り朝食を取り始める。

木場勇治（きばゆうじ）：駒王学園の大学部に通う大学4年生で教育学部に在籍している。

4年と言う事で研究室に通いながら、近々教育実習で自分たちの駒王学園に先生としてやってくる予定だ

「そういえば剣くんが君を起こしに行ったと思っただが」

「ああ…あの剣でしたら、今頃部屋で「ひどいぞ親友!!何故俺を置いて」今来ました」

「あつあはは……」

「でだ……我が親友蓮よ…何か悩み事があるような顔をしていたが」

“ ギクツ ”

何でだろうか…何故空気が読めない奴ほどに、妙に勘が働くのと思ってしまう

「何だい？何か悩みがあるならば僕も相談に乗ろう」

も悩み事と聞いて読んでいた本にしおりを挟み、こちらに笑みを向けてくる

正直如何話すべきか悩む

しかし、蓮が口を開きかけた時、カウンターのそばにある厨房の扉が開き、中から2人の男が出てきた。

その男の姿を見た瞬間、蓮は険しい表情を浮かべ、同時に空気が変わる。

木場（勇）も剣も蓮の表情にはっ！として気まずい空気になり出していた体を引き戻す。

蓮は黙ってキッチンから出てくる男から目を逸らし



「先行ってる」

それだけ小声でつぶやくと逃げるように店を離れ

「あつ……おい連！……えつと……行ってきます」

「あつ！剣君待って！これ今日のお弁当」

「ありがとうございます総司さん……では」

男は正直うなだれていた。

妻は亡くなり……唯一残った希望は幼かった蓮のみ

しかし現実残酷で……蓮は父親である自分を次第に嫌悪するようになった。

「あつ……あの、始さん……大丈夫ですか？」

隣から弱弱しい声が此方に向けられる。

恐る恐るこちらを眺めてくる男、天道総司（てんどうそうじ）

性格はこの通りだが、料理のセンスは群を抜いている。その為、この店の厨房を任せ  
ている。

今朝は彼に頼まれて新作のメニューをいくつか試していたところだった。

本来であれば自分は朝、総司との店の準備を行うため、朝は蓮たちが学校に行った後、  
店が開く前に軽く食べる感じであった。

ゆえに普段はあまり顔を合わせずにいるのだ。

「ああ…大丈夫だ…大丈夫」

「大丈夫じゃないですよ…：始さん…その手」

始の手からは血が流れていた。強く握りしめたゆえ、爪が掌に食い込んでしまったのだろう

慌てて厨房から包帯を取りに行く総司、木場（勇）は今のよう悲痛な表情を浮かべる始を見ているのが辛かった。

俺は…あの人が嫌いだった

あの人は俺からすべてを奪った。

いや…正確にはあの人、相川 始自身が奪ったわけではない

だが、肝心な時に家族の下を離れ、結果、母はあいつに殺された。

あの人が離れなければ、母はあんなことにはならなかったのかもしれない

だけどそれは……短絡的、希望的観測で…

俺だってもう子供ではない、だからわかっている！あの状況ではしようがなかったと  
だけど、あれからあの人は俺と顔を合わせることを避けた。

俺が言った一言が俺と…あの人の仲を引き裂いたんだ。

「だからって、今更どうしろっていうんだよ…」

俺は教室で現在進行中で行われている授業には一切耳を傾けず、自分の中で葛藤とぶ  
つかっていた。

だからか、俺に向かって教師が怒鳴り散らしているのに気付かなかった。

「たく、あの教師耳元で怒鳴りやがって」

「フフフン：それは、お前が教師立花の話を全く聞かなかったからだろう我が親友にして要注意人物の蓮」

「ふあゝだからって僕まで巻き込まないでほしかったなレン」

蓮、剣、そしていつの間にか学校に来ていたレオの3人は屋上へ向かう廊下を歩いていた。

そんな時だった、ふと廊下の外を眺めていた剣が指で外を見てみると示したのは

剣の親指が示す方角、そこには数名の女子生徒に囲まれたリアス・グレモリーと

“ドクンッ”

姫島 朱乃の姿だった。

「あの紅い髪の女性だろ…確か魔王の妹の」

「ああ…僕も一度だけお付き合いを申し込んだけど、丁重に断られたんだよ…初めての敗北」

「レオ…確かに彼女らは美しい女性、俺も一度アタックしたが残念ながらお断りされてしまったのだ…そうだ、蓮お前もって、居な…い！何処に行ったのだ！我が親友は」



何故だ……何故俺は逃げた。

剣たちのバカな会話に呆れたからか？

それとも……俺は

「あの……大丈夫ですか？」

その時だったのか。運命の歯車とは別の、もう一つの歯車が回りだしたのは

「ん？……ああ大丈夫だ……心配してくれて済まない」

「いや、ずいぶん肩で息をしていたから喘息かなにかと思って、あつ、よかつたらこれ、

まだ空けてないからさ」

そういつて手に持っていた水のペットボトルを差し出してくる。

「ありがとう……あっお金」

「良いつて良いつて、実は俺今スッゲー気分が良いからさ、それやるよ、俺は兵藤 一誠  
(ひょうどう いっせい)、2年だ。よろしくな」

茶髪で髪をツンツンにした、これから物語の中心となるはずの男と初めて相對したのは。

あれから数日後

久々の日曜、しかも依頼は無い状態で相川蓮は

「3番卓のランチセットBです。」

「4番お水出して！」

「いらつしやいませ！ ああ！ 亜美ちゃん来てくれたんだ…え。今日はマスターのコーヒーを飲み？」

喫茶店 ハカランダでフロアチーフ（臨時）として執事服を着てセツセコツセツセコと働いていた。

正直遊びに行く友達もない、剣は剣道の大会でいない、レオは週に一回は手伝う約束で手伝っている。

このハカランダ、実はそこそこ有名である

理由はコーヒーがとてつもなく美味しい事、出てくる料理が一流レストランと同等なくらい美味しい事

そして、居れているマスター、調理人、接客の人間などが一様に“イケメン”である為、比較的女性のお客様が多い

その為、土曜や日曜など、一般的な休日であける場合は、必然的に長蛇の列になり、人が足りなくなる為、下宿している人間などの多くは手伝いに駆り立てる。

対応しても、対応しても止まないお客に、内心殺意を覚えるくらい

そして、対応すること5時間

外に並んでいた長蛇の列は消えて、店に静寂が訪れる中、蓮の姿は外にあるスーパーからの帰路にあった。

「蓮……このメモに書かれている、材料を買ってきてくれるか」

素材はそこまで大荷物でもなかったために1人でも行けたそのスーパーの帰り、公園の前を横切った時だった。

（ん？……これは……結界か）

公園全体が不可視の、それも認識障害の力が働いている。

特にこういうものが張られる原因は今月のはぐれ悪魔みたいに殲滅戦になる為、周りに人が寄り付かないようにすることが多いが

(気になるわな……こんなものを見ちゃあ、とりあえず連絡だけは送っておくか)

ならばと蓮は懐からカードデッキを取り出し中から一枚のカードを取り出し近くの鏡に映し出す

“キイイイイン・キイイイイン”

金属音が辺りに響き渡り、しばらくすると鏡から何かが飛び出してくる

「メガゼール、この買い物袋と、この紙をあの人……いや、カリスに渡せ」

「グルウウ！」

メガゼールと呼ばれたレイヨウ型モンスターは買物袋とメモを手に再び鏡に飛び込み消える。

同時に蓮もカードデッキを手に持ち、公園の中を歩いていく

先ほどまで赤々とした夕日空だったが、公園に入った瞬間、絵の具がぐちゃぐちゃに入り混じった均分の悪いものへと変化した。

走る事数秒、ちょうど公園の中心、噴水が流れ出ている場所にソイツはいた。

黒い羽根を背中から生やした美女

そして、その女にやられたんだろう……口から血を吐き倒れこむ若い少年の姿が

蓮にはその姿に見覚えがあった。数日前に水のペットボトルを譲ってくれた。

「兵藤 一誠……………」

「ん？…誰…人間ですつて…ここには結界が張っていたはず…あなた一体」

墮天使は赤々と怪しく輝く光を槍状にしたものを素早く投擲する。

光の速度とまではいかないが、それでも人を1人殺すには十分の速度が出ているそれを蓮は首を軽く傾げ、最小限の動きでかわす。

その行動に信じられないといった表情で女の墮天使は蓮を睨み付ける

だが、光の槍を顔面に投げつけられた蓮は、逆に冷めた目で目の前の女墮天使を見つめる。

「……………つまらないな……………」



「何ですって?」

「つまらないと云った。その程度の実力でよくこの街にやってきたものだ」

「なっ!…人間風情が!至高の墮天使であるこのレイナーレに向かつて!」

「至高の墮天使?笑わせる…その程度で?はっ思い上がりも甚だしいな…どの道お前は  
ここで終わらせる」

カードデツキを前にかざし、突然出現したVバックルにレイナーレは驚き

「お前もセイクリッドギアを!」

「お前には関係ないよ…『変身』」

Vバックルが輝き、フィルムが重なるようにして蓮の姿が、変わる。

全身が黒と銀に輝く鎧に、中世ヨーロッパの騎士のようなフェイス、そして左手に蝙蝠が羽を畳んだ様な鏢の細長い長剣を手にしている。

そして姿が変わると同時に、蓮が押さえ込んでいたであろう威圧感の一部が解放され、レイナーレに重圧として襲い掛かる。

この時、レイナーレは本能的に感じていた。こいつは危険だと、今の自分が敵う相手ではないと

「お前は…お前は一体…何者なのよ!？」

レイナーレはあまりの威圧感と恐怖を紛らわせようと、先ほどの光槍を幾重にも生み出し、先ほどとは違い全力で投擲する

それは光の洪水とも感じられる槍の本流を避ける素振りもせず、ただ左手に添えてあった剣を右手に移し、右手で持った剣でただ振り払う

ただ横に振り払っただけでその全ては…硝子のように光の破片となってすべて砕け散る。

「う……嘘よ……こんなの……なんで……なんでただの人間が……」

突然現れた一人の人間、姿が変わり、ただのセイクリッドギアを宿した人間、最初は余裕で殺せると思った。だけど槍は避けられ、恐怖しながら全力で放った槍の郡も今度は避けられるのではなく、ただ剣を一振りされただけ

たったそれだけですべて砕かれた。それだけで体が恐怖で動かなくなり、しまいには地面にへたり込む

“コツ……コツ……”

一歩一歩と蓮はレイナーレに向かって近づいていく

レイナーレは思わず周りを見渡すが、自分が張った結界のせいで誰もいない、あるの

は自分が殺し、既に死に体の男の遺体だけ。

「ヒイ!!あ……あなた……何もの……何者なのよ!?!」

もはやひどい顔のレイナーレに蓮は笑い首筋に切っ先を添えてこう呟いた

「仮面ライダー……ナイト……最後に一つ聞いておく……何故あいつを殺した?」

あいつは一般人だ。悪魔やこいつのような墮天使に関わるようなやつではない。なのになぜ狙われた。

いや……待てよ、確かレイナーレは変身した時の俺にこう言った。

『お前も神器を』と

「お前は兵藤を…神器が宿っているから殺したのか」

剣に力がこもる。そんな物の為にこいつは殺されたのかと。人の命を奪ったのかと  
「もういい黙って死ね」

レイナーレと呼ばれた墮天使の首を刎ねようと剣を振り上げるが、即座に横に跳ぶ。  
瞬間、先ほどまでナイトが立っていた位置に光の槍が刺さる。

「レイナーレ様!!」

「…仲間が言ったのか」

あと一歩のところまで頭上から現れた2体の墮天使に邪魔をされる。

「レイナーレ様！ 奴は一体何者ですか…見たところセイクリッドギアの様ですが」

「わからないわ…私の全力を剣の一振りですりつぶしたわ」

「…なっ!? レイナーレ様の全力を!」

後から来た墮天使は相手が自分たちの想像を超えるであろう存在であることに信じえない

「ならばなおさら! あなたには生きてさらなる力を得て貰わなくてはいけません! 行ってください!」

「私も残ります! どの位時間が稼げるかわかりませんが…行ってください」

「…わかったわ…お願い」

「逃がすと思っているのか？」

「!!?」

3体の墮天使はその声を耳にし新たに恐怖し、そして理解する目の前にいるのは明らかに各上の化け物だと

「レイナーレ様!!早く!オオオオオオオオ!!」

男の墮天使が両腕に光の槍を作り、勇敢と羽を広げまっすぐに突っ込んでその槍を突き刺そうと

“ズシヤツ”

だがその光の槍がナイトに届くよりも先に、その姿が残像を残して消えたと認識した瞬間、男の墮天使の胸から細長い刃が突き出される

だがその信念は死んではいなかった。

「ゴフツ…：レイナー様…お早く…おは」

“グシヤツ”

だが、そんな小さな信念すら、強大な力の差にはすべてが無意味、そう誇示するかのようには数秒もしない内に、肉が引き裂かれる音とともに男の墮天使は肉塊へと変わる。

「レイナー様!!早く!行ってください!!」

「カラワーナ…っ!」



る  
レイナーレは憎しみの瞳をナイトに向けると残った仲間を背に空へと羽ばたき逃げ

「逃がすと「お前の相手はわたしだああああ!!」「面倒だな」

ナイトに変身した蓮は思う。

雑魚がいくら集まっても雑魚にしかない

しかしそれでも、自らを犠牲に何かを守ろうとする者は人間であろうと何であろうと  
関係ない

そのこと蓮自身が…一番よく知っている。

「オオオオオオオオ!!!」

カラワーナと呼ばれる墮天使が自らの全力の限界を超えるほどの槍を生み出し、次々にナイトに投擲してくる。

10や20ではない50や60を超える光の槍がランダムに、しかしナイトに向かって襲い掛かる

一瞬ではあるがカラワーナの攻撃はレイナーレのそれを軽くではあるが超えている  
正直いつて見事ではあるが

しかし、それでも……結果は変わらない

ナイトの剣、翼召剣、ダークバイザーが襲い掛かる槍の内、正確に一つ一つを切り落とす  
していく

それも全てではなく、自分にあたるものだけを正確に

カラワーナはその姿を見て背筋がさらにゾツとした

音速に近い槍の投擲を自分にあたるものだけを選別したものをより正確に打ち落とすその技量に

だがレイナーレは離脱し、見た限り奴には飛翔できる物はない

カラワーナは羽を広げ全力で空中へと上昇する

「いくらお前が化け物並の強さでも……上空までは手出しできない……か？」そっそうだ！  
違うのか!!」

カラワーナをあざ笑うようにナイトの手の剣、翼召剣ダークバイザーの蝙蝠の鏢の部分が羽を開くかのように開き、腰のカードデッキから一枚のカードを取り出し翼召剣ダークバイザーにベントインする。

【アドベント】

「グオオオオオオオオオ  
!!!!!!」

野太い雄叫びとともに噴水が裂け、水飛沫とともに黒い影が現れる。それはカラワーナにとって最後の希望である空中戦の優位を、碎かれることになる。

現れたのは全身を黒いメタリックボディに輝かせた東洋の龍

「な……ドラゴンだ?!?何故こんな?!?お前が操っているとでもいうのか!!」

「叩き落とせ……ドラグブラッカー」

「う……うわああああ!!」

最後の望み、空中からなら手出しができないという淡い希望を打ち碎かれたカラワーナがドラグブラッカーに向かって光の槍を放つが、ドラグブラッカーには痛くもかゆく

もない

「グルオオオオ!!」

ドラグブラッカーはその巨体を使い、上空に浮かんでいるそいつを地面にたたきつける。

急激な荷重により叩きつけられたカラワーナは地面にめり込み、全身がぼろぼろの状態でも立ち上がる

「そろそろ……終わらせてやるよ……それと、安心しろ」

先ほどと同様に腰から一枚のカードを取り出し、翼召剣ダークバイザーにそれを再びベントインする。

【ファイナルベント】

「レイナーレも必ずお前の下へ送ってやる」

電子音声が鳴り響くと同時に、空中に待機していたドラグブラツカーがナイトの全身を浮かばせる

そしてその全身に黒い炎が生き物のように纏わりつき

「ハアアアアア!!!」

カラワーナに向かって黒焔をまとったナイトの蹴りが放たれ、逃げるすべもないカラワーナはその蹴りに貫かれ、黒焔の業火の中

「レイ………ナーレ」

最後にレイナーレの名前を呟き黒い羽根へと却って行った。

終わった…か

レイナーレと呼ばれた主犯格を逃したが……まあ仕方ないだろう

それよりも…問題は

「あ……俺……」

既に血だまりが広がりつつある一誠

だが辛うじて息があるのか、目がうつろな状態で何かつぶやいているのがわかる。

正直、もう助けようがなかった。いや助かりようがなかった。

この少年はここで死ぬ。

あと少し早く駆けつけられれば助けられたかもしれない

「兵藤…わかるか…」

「…あ…あ……」

「今………楽にしてやる」

そう、せめて直ぐに楽にしてやることでしか、俺はこいつを救えないんだ



そう考え、翼召剣ダークバイザーで一誠の心臓を一突きにしようとした時だった。

一誠の懐から一枚の紙が空中を舞い、そのまま、魔法陣が描かれたことに警戒し、一誠から飛び退く

その魔方陣から現れたのは紅の髪を靡かせた駒王学園（くおうがくえん）の制服をした女

リアス・グレモリー

魔王の妹にしてこの街の主

そんな女がなぜここにいます？

「あら…あなた何もの…もしかしてこの子をこんな目に合わせたのは…あなた？」

リアスは現れてそうそう、目の前に魔法陣を展開し魔力を練り上げる

彼女の持つ『滅びの力』をこちらに向けて

「待て…盛大に勘違いしているようだから云うが、そいつを殺したのは墮天使だ。俺はたまたまこの場に居合わせたただけだ」

「ならば、その墮天使は何処にいるのかしら？姿が見えないんだけど？わかりやすいウソね」

「本当だ…1人はそこで2つになっているはずだし、1人はほら……これだよ」

俺は先ほど倒した女墮天使カラワナーナの残骸を彼女にぶちまける

リアスはその羽のうち1枚を取り、品定めするように眺めたのち

「どうやら本当の様ね…でも、だからこそ、あなたはどうかやって墮天使を倒したのかしら？」

「こつちこそ聞きたい、何故お前がここにいるリアス・グレモリー」

今更何をしに来たと、軽く殺気をぶつけて見ると、その体が震え、表情にも余裕がなくなる。

「わ…私はこの子を…助けに来たのよ…」

「何？助けに…来ただと？…お前はこの状況で良くそんな事が」

いや待て…確か聞いたことがある

悪魔の社会ではその数が激減し、悪魔の駒（イービル・ピース）と呼ばれるもので他の種族を悪魔に転生させることができる

「お前…まさか悪魔の駒を使うつもりか？」

「!?悪魔の駒のことまで知っているなんて…あなた本当に」

「良いから答えろ…使うつもりなのか!!」

「そつそうよ…出なければ…彼を助けることはできないわ」

「ふざけるな!?キサマは自分の行いがこいつを地獄に導こうとしているのがわかっているのか!!」

どうということという顔をしているな、どうやらわからないと見える

「もし仮に悪魔としてこいつをよみがえらせたとしても、だがその後こいつはお前の眷属として、悪魔として生きていくことになる。中には戦いも起こるだろう。それを覚悟もしていないただの一般人に、背負わせるつもりなのかと聞いているんだ!!」

蓮の怒りの指摘は確実に、リアスは青ざめた表情を浮かべる。どうやら、自分のやろうとしていたことが理解できたようだな

「確かに…確かに私は、自分の都合で…この子を蘇らせようとしている。でも…私は、例えこの子が悪魔であることを重みに背負うというなら…私は、いや」

「私たちが…一緒に背負いますわ…ねえ、リアス」

リアスの周りに現れる3つの魔法陣から新たに3人の悪魔が現れる、特にナイトはそ  
の中の一人に動揺を隠しきれないでいた

「朱乃!? 祐斗に小猫も…どうして」

「貴方からの連絡が無かったものですから…：…それにしても、随分変わった格好をなさ  
っている方ですね」

うふふと妖艶な笑みを浮かべている朱乃、それに後ろに控える2人も既にこちらを敵  
とみなしているのか、それとも見逃すまいと思っているのか

どちらにせよこれ以上ここにいるのも限界か

「もう一度警告する、良く考えるがいいリアス・グレモリー、自らの行いが果たして」

「私は……例えこの子が悪魔であることを否定していたとしても、何があっても守り抜くわ!!」

リアスは涙を浮かべるもしつかりとした表情と目つきでこちらを射抜く

どうやら自分で考えての事らしい

「ならば勝手にしろ、後はお前らの責任だ：俺はそろそろここから退散させてもらおうとしよう」

「逃がすと思っっているのかい!!」

こちらを逃がすまいと、リアスの傍にいた剣士が目を見張る速度でナイトに迫り、剣

を振り下ろす。

【クリアーベント】

「なに!?!消えた」

電子音とともにナイトの姿が透明になり、姿が見えなくなってしまう、朱乃たちも全力で周りを探すが反応どころか、痕跡すら見つからない

「完全に逃げられたわね…何者かしら」

「わかりません…墮天使を2体、見たところ無傷で倒したところを見ると相当な実力者かと」

傷と言った傷は見つからず、ましてや披露した様子も見られなかった。下級とは言え墮天使2体を相手に

く  
だがリアスに至ってはその存在よりもナイトが吐き捨てた言葉が脳内で繰り返し響く

『覚悟もしていないただの一般人に、背負わせるつもりなのかと聞いているんだ!!』

(見捨てない…絶対に…だってこの子は私の眷属なんですもの)

手に持つ悪魔の駒《イービル・ピース》を握りしめ、リアスは改めて目の前で死に絶える少年を守ることを決意するのであった。



一方、ミラーワールドに逃げることでグレモリー眷属を余裕で撒いたナイトこと相川蓮は何事もなかったかのように黙って、店の前まで戻ってきていた。

店の手前で黒い人影が見え、一瞬警戒するが、その姿が月明りで明らかになると、警戒心を霧散させる。

「やあ蓮…あまりにも遅かったから僕が迎えに行くところだったよ」

「レオ…冗談はやめろ…あの程度の連中に手こずるほど弱くなった覚えはない」

「そうかい…でも何があったかは…聞かせてもらおうよ…とりあえず現状報告だって」

レオのその言葉に思わずため息が出てしまう。

大した相手でもないのに一々報告しなければいけないのは面倒だが、この街で何か起こっているのならば報告しなければ次の一手に対処できない時があるかもしれない

小さな綻びは次第に大きな穴へと広がっていくのは別段珍しい話ではないのだから

## 第3話 予想外の接触

何故こうなった。

何かミスを犯したのか。それともどこからかのタレこみか

いや今になってそんなものどうでも良い

問題は俺が今、何故？

「こちらですわ……どうぞ」

姫島 朱乃に連れられて、旧校舎にある、オカルト研究部なる部室に居るのかだ。

兵藤 一誠が墮天使に殺されてから2日ほどたった。

どうやら彼はリアス・グレモリーによつて悪魔の駒を与えられ今も学園に通つてい  
らしい

周りに天野夕麻（あまの ゆうま）、もといレイナーレの事を聞きまわっている

実際に俺も聞かれたが、元々天野夕麻なんて女自体知らないし、正直知らないと答え  
ておいた。

実際に周り、特に兵藤と何時もつるんでいた松田と元浜といった連中の記憶にもないとすれば消されたとみて間違えないだろう

俺の変身もレイナーレ以外では意識が朦朧としていた兵藤では覚えてすらいないだろうし。

そう……接点をはたから見れば何も無い

ナイトにはあつても蓮にはなかった……はずだった

それは今日の午後起こった。今日は偶々、剣やレオが部活や女の様で帰りを一緒にできないことから荷物を纏めようとして早くに帰ろうとした時だった。

妙に周りの生徒たちがそわそわし出したのだ。

何事かと目をこすりつけながら、教室の扉に目を向けると……そこには、3年であるは

ずの姫島 朱乃が扉の前にいた。

(何故……あんたが此処にいるんだ！姫島 朱乃！)

彼女は扉の目の前で誰かを探すように教室の周りをキョロキョロし

「あの……相川蓮君は……今いらっしやるかしら」

瞬間、教室内のすべての生徒の視線がこの俺に向く。女子は好奇心に、男子は嫉妬や妬みの視線を蓮に贈るが当の本人は、そんなこと気にも留めずポカーンと固まっていた。

またこの時、同時に蓮の中では彼女に対する警戒レベルが一気に限界近くまで跳ね上がった。

(何故俺を探している！あの公園での戦闘ではナイトに変身した姿は見せたが、俺だと分かるようなものは何も置いていない、なら別の事か、しかし違反なんかの注意なら生

徒会が来るはず。では)

最悪の場合、俺の正体がと考える蓮を他所に朱乃は悠々とこちらに歩み寄り、その顔を覗き込むと小さくあつと口にする。

「あら……あなたは、あの時の」

“ドクン”と心臓の鼓動が鳴り、一瞬彼女が自分にとって一番恋しい人の笑いと重なる

「えっ！あの、どこかでお会いになりましたか」

「あら……新学期が始まった午後旧校舎の裏の茂みで……一瞬でしたから覚えていらっしやらないのも無理ないですわね」

「どうやら、覚えていたらしい……少しうれいではなくて！そんなことはこの際どうでもいい

「あの……何か御用でしたか？」

「あら……すみません、どうにも要件の事を聞き忘れてしまいましたわ。……では、この後何かご予定でもありますか？」

“ドクン！ドクン”

「いえ……この後は特には……家に帰るだけです何か？」

「あら！なら丁度良かったですわ。実はこの後、私とある場所へ一緒に行ってもらいたいのですけれど……よろしいかしら」

朱乃の唐突な申し出に蓮は、付いて行くべきか悩む、最悪正体を見破られても対処はできる。逆にここで断ればただでさえわからない状況で、さらに相手に不信感を与えることになってしまう。ならば



「わかりました……一緒に緒致します」

「ありがとうございます。では、早速ですが、こちらですわ」

そうして連れてこられたのは旧校舎の奥にあるオカルト研究部の部室

「では……中へどうぞ」

朱乃に扉を引いてもらい、その中を覗き込んだ瞬間思わず一步引いてしまった。

室内にはいたるところに文字が描かれ、それが床だけでなく壁や天井まで広がって

る。マニアが見ればここでは本格的な黒魔術が行われているとも考えられる。

極めつけは、真ん中に描かれた特大の魔法陣。依頼でいくつか見たことあるが、おそらくは転移または、召喚の類に使用されるものと見える。

「どございちらへ」

「えっ…ええ失礼します」

案内されたのはその奥にあるソファー

よく見れば、白髪の小柄な女の子がそこに座っていた。その子は此方に気づくと小さくお辞儀をし、手に持っていたようかんを黙々と食べ始める。

「紹介しますわ…こちら1年の塔城 小猫（とうじょう こねこ）ちゃん、小猫ちゃんこちらは」

「知っています。2年の相川蓮先輩ですよ、喫茶店ハカランダで時々お見かけします」

「……ああ！確か良く、15時頃にうちのパフェ食べにくる……」

そう言えば良く、小柄で白髪の女の子がよく一人で食べに来ていた。確か、週2で必ず決まった時間で来ていたからよく覚えていたが……なるほど悪魔だったのか

「あら？バカランダというところの有名な……私も行ってみたいと思うんですけど未だに時間が取れなくて」

（いや……あんたが来たならあの人気になって仕事にならないと思う）

それほどそっくりなのだ。正直、こんな状況じゃなければ……泣いているところだ。

とそこで更に2人の男子生徒が部室の中に入ってくる。さらに付け加えれば、その2人には見覚えがあった。

「失礼します。ああ…：副部長、先にいらしていたんですね」

「ええ祐斗くん、こちら2年の相川蓮君、蓮君、こちら2年の木場祐斗（きばゆうと）君です」

よろしくと爽やかな笑みを浮かべてくる。こいつの事は知っている。女子がよくキヤーキヤー言っているのを遠目で見ていたりしているから

時々、変なのが「木場君×相川君」とかやってくるから正直怖気が走るが

そしてもう一人の少年には俺は同情を禁じ得なかった

「お…：お前、っていうかあんたは確か…：あの時、階段際で」

「そうですね、あの時はありがとうございました。おかげで少し楽になりましたよ、兵藤一誠君」

兵藤 一誠…悪魔として転生してから少し気になってはいたのだが、まさかこんな所で再開するとは

「一誠君なんて他人行儀な呼び方はいいぜ、同学年らしいし、俺の事は一誠で構わないぜ」

「そうか…ならば一誠、君はなぜここに呼ばれたのか知っている？」

「いや…俺はただ、リアス・グレモリー先輩に呼ばれて」

一誠の言葉に確信が持てた、やはり、リアス・グレモリーが朱乃に命じてここに呼んだことは確かだ。しかし問題はなぜここに俺を呼び込んだかだ

「ごめんなさい、お待たせしちゃったわね」

そして、ようやく俺らを呼び出した張本人が奥から現れる。

「粗茶ですがどうぞ」

リアスとは反対のソファアに座らされた、俺と一誠は朱乃の入れたお茶を飲んでいた

「うまいです」

「あらあら。ありがとうございます……相川君はどうかしら？」

「ええ……とてもおいしいですよ。家はあるの……父がコーヒーを入れるのはおいしいのですが、お茶はあまりなので」

「そうですか？では後学の為にも早くお邪魔したいですね」

うふふ、ろ嬉しそうに笑う朱乃に俺は作り笑いを上げるしかなかった。

そしてテーブルを挟み、リアス側に移動する朱乃、全員の視線が俺や一誠に集まる。

一誠は緊張しているからカラワーナ萎縮しているが蓮は内心違った。

最悪の場合を想定し、あらゆる予測を考えている。

そして、遂にリアスが口を開いた。

「単刀直入に言うわ2人とも。私たちは悪魔なの」

リアスはまずは一誠の事に関して語り始めた。

どうやら先日も、奴らの仲間。女の墮天使のようだがそいつに襲われたらしい。

そのことを耳にしたときはもう正直呆れた。あれほど注意しても今回のような結果になってしまったことだ

だが正直それはいい、続けよう

事態を見越したリアスは急遽、一誠に悪魔の事、堕天使の事、レイナーレのことを話し、最後に神器について語った。

「セイクリッド・ギア神器とは、特定の人間の身に宿る力。例えば、歴史上に残る人物の多くがそのセイクリッド・ギア神器の所有者と言われているわ。」

そして、トリアスは話を一瞬止め。一誠ではなく今度は此方を見てこういった。

「セイクリッド・ギアその神器はあなたにも宿っているわ。相川蓮君」

「んなバカな!!」



蓮は思わず大声をあげてしまう。自分の中に、セイクリッド・ギア 神 器が存在する？

(ありえない…俺の中に神セイクリッド・ギア 器が存在する!?ではなぜ、今まで気づかなかった!そんな感覚は何処にも)

「落ち着いてください相川君…信じられない気持ちはわかりますが今は」

「あ…ああ…すみません姫島先輩…少し状況が状況で」

蓮は黙って座るがこれで今までの最大の疑問が解消された。

リアスたちは自分の正体を知ったとかそんなことで連れてきたのではない。むしろ、自分の中に神セイクリッド・ギア 器なる物が存在していたからこそ声をかけたのだ

「続けるわね…今回の一誠への2度の襲撃を受けて、私たちもあなたの事をこのまま放置しておくのは危険と判断したの」

「そ…そうですか…そうですね」

冗談ではなかった。正体がばれていないことはまあいい、しかし、それよりも俺に  
セイクリッド・ギア神 器が宿っていることが問題だ。そもそもこの世界に生まれてもいない俺に何故宿  
 る。…一度死んで、この世界で蘇った？嫌、そんなはずは…と言うよりも神 器が俺の  
 中にあるなら、あいつが、解らない訳がない

「信じられないようななら確かめましょう…イツセー、蓮、目を閉じてあなたが心の中で一  
 番強いと感じる何かを心の中で想像してみても頂戴、そしてその場でその人物の一番強く  
 見える姿をまねるの…強くよ？軽くじゃダメ」

「い、一番強い存在…ええい！こうなったらやけだ！」

一誠は恥ずかしそうに立ち上がると、開いた両手を上下に合わせて前に突き出す格好  
 のまま

「ドラゴン波！」

正直恥ずいわ…と冷めた目で一誠を半目で見つめるが、次の瞬間、一誠の左腕が赤く光り出す。突然の事に目をくらませられる蓮だが、閃光は収まっていくに連れて、徐々に左腕を覆い尽くすように形作られる。

そして、閃光が収まったその左腕には赤色の籠手が現れる。籠手はごつごつした何か龍の鱗鱗の様にも見え、その手のひらには丸い緑色の宝玉がおさめられている。

「な、なんじゃ、こりゃあああー！」

一誠はあまりの衝撃思わず叫び声をあげてしまう。一方、リアスは無事に神器（セイクリッド・ギア）を発現させることができた事に頷いて、次に俺の番だと視線を向けるが

（一番強い存在……一番強い存在なんて急に言われても）

どうしても浮かばない蓮にリアスは少し困った表情を浮かべ

「急には浮かばないかしら…一番強い存在じゃなくても、想像したものに対して強い思いがあればいいのだけれど」

「一番強い……思い…ですか」

「ええ…喜びや、悲しみ、考えられないけど、強い恨みなんかも」

“ドクン”

強い…恨み？

“ドクンツ…ドクンツ！”

心臓の鼓動が徐々に早まり、目の前が黒く染まる。

だが幾年の年月が過ぎようとも

幾重の思いが重なり合い、交わりあおうとも

俺の瞼の裏に、奴は存在する。

その全身を白く硬質で禍々しい皮膚で覆い、こちらを見下し、その鋭利な爪と刃を用いて俺のすべてを奪った存在

ああ…久しく忘れていた…本当に忘れていた。

最近では依頼ではぐれ悪魔などばかりで歯ごたえが無く、学園と言う日常で、光ある道を歩んできた故に忘れてしまった。

だからこそ…今ここで思い出そう…俺は何者だと…そして、俺は何のために今までを生きてきたと！決まっている…ああ決まっている!!。俺は求めたんだ…多くの犠牲を強いてまで“力”を！、奴を、俺からすべてを奪った彼奴を!!探し当て!今度こそ!絶対に

コロスタメニ!!

蓮が立ち尽くしてからおよそ数分、何の反応もなくただ立ち尽くす。あまりの不自然さに近くにいた一誠がその肩を叩こうとした時

「「ッ!!」」

一誠だけではない、この部屋にいる全員がその空気を肌で感じ取る。祐斗や小猫、朱乃に至ってはリアスを守ろうと各々の武器を構える。

理由は自分たちの目の前にいる蓮から放たれる禍々しい波動を、瞬間的に放たれる殺気を感じ取ったから。

同時にレンの右腕にもある変化が生まれ始める

それは先ほどの一誠と同様の、しかし邪気に包まれた黒く重々しい閃光が部屋を充満させ、一誠の時よりも広く右腕を肩から腕まで黒の閃光が広がる。

そして閃光が止んだ瞬間、この場にいた全ての者の目が見開かれる。

蓮の右腕は肩から指の先まで一誠とは比較にならないような、そうあえて言うなら

“呪い”

右腕を漆黒と鮮血色の線が覆い尽くし、肩からは突起の様なものが3つ飛び出ている。

しかし、それだけならばリアスたちは、ここまで驚愕しなかつた。何よりそれを呪いと判断したものは、肩から這い出るもう一本の腕、いや腕と言うよりは先端は掌などではなく鋭い円月状の刃

そして、手の甲には一誠の様な窪みがあり、そこに取り付いていたのものにこの場の全員は思わず目をそむけたくなつた。

それは“目”だつた。周りを見渡し、リアスたちを窘めるように全体を見渡している。目自体に意識があるのか、それは現段階では分からない。しかし蓮は静かに目を開き、あまりの変貌を遂げた自身の腕に驚きを隠せなかつた。



「これは……何だ……俺の腕。いや、これは俺の神セイクリッド・ギア 器なのか」

それはあまりに醜悪であった。周りの特に女性陣はあまりの醜悪さに目を閉じるか逸らしてしまっている。

一誠や木場も苦笑いを隠せない。

「これが……俺の力」

そう小声で口にし、ただ何も口にせず心の中で、“戻れ”と強く念じる。

強く念じた結果出てきた神セイクリッド・ギア 器だ、戻れと念じれば戻るだろうと考えた結果、右腕は再び人のものへと戻る。

周りを見渡すが全員が全員声を失っていた。と言うよりは自分に向かって堂声を掛けたらよいかわからないでいた。

思わず苦笑いを浮かべるしかなかった。

それから数分後、一旦変わってしまった空気を入れ替えるためにしばらく休憩をとつ

たりアスたちは再びオカルト研究部の部室に集まっていた。

「それじゃあ…最後に本題に入りましょう。改めて…私たちオカルト研究部はイツセー、あなたをオカルト研究部部長として、悪魔として歓迎するわ」

リアスがそういうと、俺を除く全員の背中からバサツと蝙蝠のような翼が出現する。

「そしてレン…あなたには悪魔に転生して私たちの仲間になって欲しいのよ」

再び全員の視線が蓮へと集まる。蓮も先のリアスの申し出に再び目を閉じる。

予想はしていたのだ。セイクリッド・ギア神 器のような危険なシロモノを見に宿した人間は勧誘さ

れるか、監視下に置かれるか、始末されるかの3つしかないと

そしてリアスは必ず最後の選択肢、始末するという選択肢はしないだろうと予想できる。

次に一般的に正体がばれた場合は記憶を消去するなどの方法が取られるが、現状この街で起こっていることを考えればそれはできない。つまり、勧誘するか、監視下に置くの2つしかない

しかし、悪魔に転生となれば必然的に俺の事は知られる。そもそも、悪魔に転生する気もない

リアスは悪魔になればと言う事で様々な例えを例に出し説明するが蓮は首を横に振った。

「申し訳ありませんが…悪魔への転生はお断りします」

「「「「「?」」」」」

俺の答えに全員が驚愕する。一誠に至っては何か言いたそうな感じだが

「急過ぎたかも知れないわね…ごめんなさい。でもあなたが神セイクリッド・ギア器を宿している以上、

こうして私たちの事を知ってしまった以上、あなたに対して何もしい訳にはいかないのよ」

「ならばどうでしょう。悪魔にはなれませんがオカルト研究部には所属すると言う事では」

そうすれば俺は現状維持のままリアスの懐に警戒されずに入り、情報もそれなりに入る。そしてリアスも、部長と言う名目で俺と行動を共にし、狙ってくる輩に対処しやすくなる。

「そうですわね。無理に記憶を消さず、自ら行動を共にしてくれるのならば、部長…よろしいと思いますわ」

「そうね…確かに協力的であれば、私たちもあなたを守るし…そうしましょう」

朱乃の後押しもあり、リアスもうまく納得することとなった。

「蓮はこれからできるだけオカルト研究部の活動には参加してもらい、今後の事は、また別に考えましょう」

だったら

「改めて紹介するわね。祐斗」

「僕は木場 祐斗。兵藤 一誠君と同じ2年生で悪魔です」

「1年生……塔城 小猫です。よろしくお願いします。……悪魔です。」

「3年生、姫島 朱乃ですわ。一応、研究部の副部長も兼任しております。今後ともよろしくおねがいします。これでも悪魔ですわ。」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。よろしくね、イツセー、蓮」

「はい！よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします。」

こうして俺はオカルト研究部の一員として新たな一步を踏み出すこととなった。

その後、店の用事があると嘘をつき、オカルト研究部の部室を後にした蓮は店とは反対の方向へと歩みを進め、とある大きな一軒家の前にたどり着くと懐から鍵を出し扉を開ける。

中は簡単な家具があるリビングとベッドルーム、そしてもう一つの部屋があり、蓮はリビングを素通りし、もう一つの部屋へと扉に手をかける。

その部屋には大小さまざまな機械設備と、それとは別に床一面にオカルト研究部でみ



たものとは別の文様が描かれた魔法陣が描いてあった。

その上に立ち小さく言葉を紡ぐ。するとどうだろうか、何もなかった魔法陣が青い光で発行し、その光が立体映像の様に浮かび上がり、こことは別の空間を映し出す。

そこはまるで研究室の様に、壁際にはカプセルが、ピーカーが、謎の液体などが見え、ちようど画面の目の前、拡大されたテーブルには2人の男が映し出されていた。

「おや？珍しいね。君が此処に直接連絡してくるなんて…ああ、残念だが私はこう見えてもとても忙しくてね、この後、新型のロックシードを調整して明日の昼までには装着実験を行わなければ…いや待て…丁度いい!!今回は君に装着をお願いしようか!どうだろうかアジユカ」

「そうだな凌馬…我々の開発したこの新型ロックシード、相川蓮が持ってきたカードデッキをもとに私が理論構築し、新たに鏡の世界、ミラーワールドへの進出が敵うかどうかの」

こちらを無視して、互いに研究成果を早く試したいかのように目を輝かせる男たちに思わず眉間に皺が寄る。

最初に話を勝手に作り、勝手に話し出した、白衣をだらしなく着込み、長い髪は後ろで纏めてポニーテイルにし、自分の研究にしか目がいかないこの男は戦極 凌馬（せんごく りょうま）

冥界にいる俺の協力者の一人だ。そして今回は、その隣で戦極 凌馬（せんごく りょうま）の実験に賛同している緑色の髪をした妖艶な青年に用があるのだ。

アジユカ・ベルゼブブ

冥界を滑る4人の魔王に1人、ベルゼブブを関する魔王の一人であり、マッドで変態な男

故にだろうか、アジユカに接触した際に戦極 凌馬を連れて、アジユカに接触した時

に、この2人は出会った瞬間に意気投合。そして、戦極 凌馬に至っては人間を辞めてアジユカの眷属として互いに興味の尽きない研究を行っている。

そして、冥界とのつながりを持った蓮は、主に様々な契約を彼と交わした。中でも蓮の依頼は主にアジユカを通して行っており、現在は戦極 凌馬(せんごく りょうま)から別世界のライダーシステム、ヘルヘイムの果実と呼ばれる禁断の身を独自の生成方法で成功させ、この果実から作られしロックシードでの変身実験を極秘に行っている。

正直あまり関わり合いになるのは御免であり、こちらからの連絡は滅多にしないのだが、今回は事情が違う

“発動しろ”

そう強く念じた瞬間、俺の右腕が変化する。今度は禍々しいオーラをまとうたらず、ただ右腕が赤黒い化け物の腕と変化する。その腕を目にした瞬間、アジユカと凌馬は白熱していた議論をぴたりと止め、興味深そうに腕を眺める。

「答えろアジユカ…お前は俺の中にこいつの存在があることを知っていたな」

“ギロリ”とした瞳でアジユカを睨み付ける。

しかし、奴はただ興味深そうにこの腕を眺め

「実に興味深いな…私でもそこまで醜悪かつ禍々しいセイクリッド・ギア神器を見るのは初めてだ…能力はわかったのかい？」

「知らん…今日初めて発現した。…それよりも！」

「セイクリッド・ギア神器に関しては確かに君の中に眠っているのを知っていた。いずれ覚醒するかはともかくだが」

そう淡々とこいつは告げる。

「何故……黙っていた」

そう聞けば

「聞かれなかったし必要ないだろ相川蓮（あいかわれん）」

そう返される。こいつはいつもそうだ、自分に興味がない事や他人の事に関しての関心が少なすぎる。

戦極 凌馬もしかり、アジユカもしかり、科学者とは皆そうなのかと疑いたくなる。

「しかしだ相川蓮、私も神セイクリッド・ギア器に関しては多少の興味があるが、君のそれは初めて見る。実際に直接見てはいないため、確実なことは言えんが……いや、確実なことが解るまでは此方で調べておこう」

ではとアジユカの視線が急に真剣みを帯びる。

思わず何かの依頼かと、こちらも頭を切り替え、その声に耳を傾ける。

「早速だが、今すぐ冥界に来て、私と凌馬のこの新作ロックシードの……」

“ブツリ”

蓮は黙って魔法陣の魔力を止め、通信を強制的に切る。

これ以上マッドな連中に構っている暇はないのだ。と言うより関わりたくない  
関わればどんな目にあわされるか

“ゾクゾク”

思わず想像して背筋が寒くなったじゃねえか!!!

「はあ………寝よ」

そう思うや、小さなベッドが簡易的に置いてある仮眠室へと向かう連だった。

「まったく…私たちの研究に貢献する偉大さがまだ彼には伝わって…ん？どうしたア  
ジュカ？」



「ん？いや…何でもないよ凌馬。」

アジユカはこの時考えていた。

相川蓮（あいかわれん）に宿った神セイクリッド・ギアの正体を

（まさか……失われた……いや、考え過ぎか）

## 第4話 復活のミラーモンスター

ある男の過去の話をしよう。

その男は母を失いすべてを変えられる。

優しかったその笑顔と、与えられていた愛情は一転し、少年はただひたすら力を求める。

金、権力、そして、他社を圧倒する暴力的な力を求め続ける少年は2年前にある男と出会う。

男の名前は神崎 士郎（かんざき しろう）

神崎はただ力を求める少年に悪魔の囁きの様な一言でこう囁く

「お前の願いは何だ」

少年は答える。“願いは何だ？”

神崎はふとした笑みを浮かべこう答える。

「お前の望むものすべて」だと

他者を圧倒する暴力的な力、全てを飲み込む権力、そして男は少年にとって最も欲する答えを囁く

“愛する者の生命”と

しかし、神崎は同時にそれを叶えるための代償を語ると同時にある物を少年に渡す。

黒く四角いカードデッキを

「それを持つすべてのライダーを倒せ…そうすれば貴様の願いは叶うだろう」

だがこの時、神崎は予想もしていなかった。この様な年端もいかぬ子供が戦いを勝ち残れるわけがないと

云わば少年は数合わせのつもりだったのだろう

しかし神崎は気づかなかつたのだ。少年の願いに対する“執念”、そして戦いにおける“センス”に

俺は戦った。神崎 士郎と言う男の舞台で：仮面ライダーナイトとして

まずは、ナイトの力を体に慣らすため、幾度となく現れるミラーモンスターとの闘いに俺は明け暮れ、同時に他のライダーの情報を集めた。株で稼いだ金を使えるだけ使い、しかし水面下で着々と情報を集めた。

最初に出会ったのは赤い龍のモンスターと契約していたライダー、龍騎と俺は出会った。その男、城戸 真司（きど しんじ）はとある雑誌の記者をやっていた男で性格は兎も角、御人好し、自らがライダーであることを周りには隠しつつ、ミラーモンスターから人々を守るために闘っていた。

俺は真つ先に城戸を消そうと考えるが、逆に城戸を隠れ蓑にすることを思いつく。表では協力して周りの人間をミラーモンスターの脅威から守ろうと：あえて近づいた。

そうすることで、龍騎を狙うライダーを消していこうとした。

そして、その作戦は概ね成功した。

俺は次々と現れるライダーを倒していった。

時には正面から、時にはライダー同士で戦い合い疲弊したところを、時には小さな子供を装つての暗殺も行った。

しかしそれでも…2人…俺には結局殺せなかつたライダーがいた。

手塚 海之（てづか みゆき）またの名を仮面ライダーライア

奴は占い師。特に奴の占いはほぼ外れたことがないとも言われている。現に手塚は最初、俺が仮面ライダーナイトと見抜いて接触してきた。普通なら中学生がこんな殺し合いのゲームに参加しているとは予想すらないはずなのに

「もうやめるんだ。このままでは…君は望むものを手に入れること処か…人としての人生をすべて失うぞ！」

奴はナイトと戦闘になる度に何度も、何度も、同じことを言い続けた。正直家にまで来て説得されるとは思っていなかったが

だが次第に俺は手塚に会うたびに、だんだんと心を許し始めていた。

当時の俺は、何も語ろうとしない父親に反抗し離れて暮らしていた。つまり一人だ。

手塚はそんな俺を見かね、城戸と一緒に良く食事に連れて行った。当初は断っていた俺だが何度も何度も来る手塚に最後には折れた。

男3人の：しかし、親と離れていた俺にとつては正直かけがえない時間であったかも知れない

だがそんな時間も長くは続かなかつた。

手塚：仮面ライダーライアは、当時、凶悪犯罪者として周りを賑わしていた男、浅倉威（あさくら たけし）が変身する仮面ライダー王蛇の「ファイナルベント」から俺を庇い重傷を負って静かに息を引き取った。

手塚の死を目の当たりにし俺は思った。

ああ……結局、俺には幸せなんて無い、幸せを掴むには……結局、闘いしかないんだと

それから俺は変わった。いや、元に戻ったと言った方が正しいか。

俺は来る日も来る日も戦いに明け暮れた。敵のカード能力を研究し、殺したライダーから奪ったカードを使い合わせながら闘った。

そして残りのライダーが半分を切ったある日、俺にとって殺せなかったもう一人のライダーが消えた。

城戸 真司：城戸は最近ライダーの一人霧島美穂（きりしま みほ）またの名を仮面ライダーファムと恋に落ちる。それと同時に城戸の周りではおかしな現象が起こるようになった。

あるライダーは龍騎によって瀕死の重傷を負わされるまで叩き潰され、あるライダーは変身する前に首を絞められ殺されかけたという

もちろん城戸には記憶はなく、何かの間違えだと主張した。だがそれは、もう一人の



城戸、残る14のライダーの最後の1人として現れた刺客、リュウガの起こしたことだった。

辛うじてリュウガとの激闘に勝利した龍騎だったがそこへ起こる悲劇が再び俺を奈落へと落とす。

突如現れたミラーモンスター、レイドラグーンの大群が現実世界を襲い始めたのだ。

そこへ神崎から“レイドラグーンを倒せ、それまでライダーバトルは中止とする”との通達があつたのだ

残ったライダーは4人、ナイト、龍騎、ファム、そして神崎の人形であり最強のライダーとして現れるオーディンがそれぞれレイドラグーンの大群にあたる。

1体1体は大したこともない相手でもその時は数が多すぎた。体は疲弊し、焦り出す俺に死角から1体のレイドラグーンが襲い掛かる

油断していた俺に避けるすべもなく。今度こそ死を訪れた俺だったが

「危ない!! 蓮!」

“ズシヤツ!!”

俺は自分の目が映し出す光景を否定した。自分を守り、狂爪が龍騎の胸を貫通する。

それはまるで…あの時の再現ではないか、そう考える前に俺の理性は既に消えていた。

使えるカードは全てだし! 考えうる戦略をぶつけ! 暴力の限り、目の前の羽虫を刈り取っていった。

そして、次に意識が戻った時には全てが終わっていた。

レイドラグーンはそのかけらも残さずに消え、辺りは爆発炎上した車や、死体が路上に転がっているだけ。

そして…戦いの中、俺を庇い、その胸に狂爪を受けた城戸も……もはやその目に光は  
燈ってはいなかった。

“それが……あなたの強さの秘密なのですか？”

「ッ!? 誰だ……俺に語り掛けてくるのは」

突然の声に、この夢の主、蓮は思わず驚愕してしまう。

俺の記憶、過去に犯してしまった罪や絶望を忘れないために流れ出す夢の空間に突如、声が響いたのだ。

こんなことは生まれてこの方、ありはしない。ましてここは蓮自身の夢であり、蓮以外の意識が介入することはあり得ないのだ。

“ 私の声が届きますか…やはり発現したことで声が届いたのでしょうね”

声の主は此方の驚きと戸惑いを面白おかしく笑いながら語り続けてくる。もはやこれは幻聴ではない

蓮の中に、蓮とは別の意識が存在すると言う事だ。

「お前は何者だ！何故俺の夢に現れた！何が目的だ」

この声は敵なのか。敵であれば何が目的なのか。夢の世界ではカードデッキは存在せず、ただこの声の主に警戒をするだけしかできない。

“ ふふふ…安心しなさい相川蓮、我が800年ぶりの主よ。私は別にあなたを如何こうしようとは思っていないわ”

「そんな言葉は信じられない！姿すら見せられないような奴を如何信用する」

言葉だけでは人は信用できない。姿を現せと叫ぼうとする蓮だが急劇に意識が遠く

忘れてはいないがここは夢の中である。夢はいずれ覚める

蓮の意識は既にだんだんと意識に霞がかかるように、現実を意識が引き寄せられる。ただ最後、蓮は意識を失う前に謎の声の最後の言葉を霞んでいく意識の中で聞く。

“私はトリシューラ……………生と死を司りし、開闢（かいびやく）と終焉（しゆう

えん) をもたらす深淵の龍”

俺はその後思わず遅刻しそうになるもバイクを走らせ学校に到着、生徒会長を出し抜き何とか遅刻を免れるが、どうにも今朝の夢が気になり授業は頭に入らなかつた。

そしてそのまま放課後になり、蓮は旧校舎への道のりをぼーっとしながら歩いていった。森の中、旧校舎のボロい外見を気にせずに奥へ進み、オカルト研究部と書かれた部屋のドアをたたいた。

“ トン、トン ”

「……………失礼します。つて誰もいないのか」

オカルト研究部の不気味な部室に入るが見渡しても誰もいない。どうやら早く来すぎてしまったようだ。

（仕方ない…座っているか）

蓮は奥にあるソファアームにドスンと深々と座り込み今朝の事を考え始める。

（考えても解らない俺の夢に出てきたあの声は…一体）



変わったことと言えば、そう考え蓮は自分の右腕を掲げ

“発動”

念を込めると腕が徐々に黒い瘴気に覆われ肩から指先までその形状が変化する。

見れば見るほど不気味だが、一番不気味な部分である目はじつとこちらの顔を直視し  
たまま動かない

まるで俺を見定めているように

「…………ふあ〜…そういえば…あの夢のせいで全然寝ていなかった…な」

今日は今朝の夢のせいで頭を使いすぎたからか眠気が全然晴れない。偶然か必然か、  
今この部屋には俺一人

ちょうど誰もいないし誰かが来れば起こしてくれるだろ。そう思い蓮はソファアの

クッションを枕にし横になると

「……………Z z z……………z z z……………」

誘われるように軽い眠りにつく。

それから20分位、蓮は完全に眠りの世界に堕ちたころ

部室の扉が開き、部屋に1人の女性が入る。

「あら？部室に明かりが…誰かいるのかしら？」

その女性、姫島 朱乃はそつと明かりが燈っているソファアのあたりに顔を覗かせるとソファアの上で“スー”と寝息を立てている蓮を見つけ思わず微笑んでしまう。

「あらあら、こんな所で何もかけずに寝てしまつては風邪を引いてしまいますわ」

そう呟くと、奥から毛布を取り出して、そつと横たわる体の上にかける。ふとその視線が、蓮の青白い右腕に注がれる

ついこの間の事だ。蓮を目の当たりにした時に蓮から立ち上った静かな殺気に呼応するように現れた異形の腕

その時は余りの醜悪さに思わず自分も含めた部員全員が顔を背けてしまつたが、後々

によく観察した所

『わからないわ…私でも知らない神セイクリッド・ギア器、お兄様ならわかるかも』

—神器《セイクリッド・ギア》

そうリアスは言っていたが、果たしてこれは神セイクリッド・ギア器なのだろうか

まして、こんなかわいい寝顔をする子供に宿るなんて。

うふふ…それにしても本当にかわいいですわね。

“ ちよん ”

「うにゃ…zzzz」

“ ちよん、ちよん ”

その頬をつつくと、くすぐったいのか、幼子の様な顔つきの蓮

朱乃も朱乃でつつくたびにむにやむにやと表情を変える蓮に頬を赤らめ

「あらあらどうしましょう！本当にかわいい！思わずお持ち帰りしたいくらい♪」

自身も蕩ける様な表情でずっとその寝顔を堪能しようとした時だった。幼子の微笑みが一転して苦しそうな表情に

更には

「うっ！…ま…マ、行かないで」

苦しそうに母親を求めているのか、蓮はその細く引き締まった腕を高く、高く伸ばす。

「大丈夫ですよ。蓮君。私が此処にいますからね」

朱乃は高く伸ばされた手を自分の胸元まで引き寄せぎゅつとその手を握る。蓮もその温かみを感じたのか次第に落ち着いた表情へと戻っていく

もう大丈夫だろうと、手を放そうとした朱乃だが蓮が呟いた言葉に驚きの表情を浮かべ動きを止めてしまった。

「何で…何でお母さんを助けてくれなかったんだよ……父さん」

んっ！とボーっとした頭と体を伸ばし、横になっている体を伸ばす。

「あら……おはようございますわ」

「ん……おはよう……お母さんごはん……」

「あらあら……ご飯はありませんが紅茶とおかしならすぐに用意いたしますわ」

お茶……んっ欲しい……って

「ああそうか……俺眠くて……部室で……って今の声は」

首を勢いよく声が下方向へと向ける、そこにいたのは

「おはようございます。蓮君。かわいい寝顔でしたよ」

若干頬を赤らめた朱乃が“うふふ”と満足そうな笑みを浮かべその手に紅茶のカップを持って微笑んでいた。

「……もしかして、見てました？」



「ええ たつぷり♡、もう抱きしめたくなる位可愛い寝顔でしたわ」

ハイ……見られてた。寝顔を……見られてた。

超絶恥ずかしい、かなり！いやよりによつて、この人に見られた

顔が熱くなっていくのを感じる。今俺の表情は熟れたトマトより真っ赤だろう

凄く……恥ずかしいです。ハイ

「……蓮君……一つお聞きしてもいいかしら」

「なんあんでしょうか！あついや……何ですか」

いやね、もう呂律が回らない。もう何でもいいから話題を逸らさなくては

そう！人焦る、蓮とは反対に少し表情が暗い朱乃は、言いくそうに

「その…あまり聞くことでは無いんですけど、蓮君のご両親は…その、お母様は」

……そうか…多分寝言だろうが…聞いてしまったか。言いたくはなかった、寧ろ彼女以外だったら察してくれと言って終りだったが

「ええ……ご推察の通り…母は、俺が幼い時に死にました」

「そう……ですか。ごめんなさい。思い出したくもないことを」

「いいえ……大丈夫です。昔の…事ですから」

その後は何も…お互いに気まずい空気で会話と言う会話もできず、途中、リアスと一誠が来るまでこの空気は続いた。

「それで、今日はどうします？・ピラ配りなら手伝いますけど」

そうね…とリアスは何をするか考え始めた時にそれは起こった。床に描かれた魔法陣が深紅に輝いたと思ったら中から一通の手紙が現れる。

それを受取、その場で読み始めたリアスの表情が真剣みを帯びたものへと変わる。

同時にその身にまとう魔力の質が変化した。

これは…何かあったか…それとも

「リアス？手紙はどなたから？」

「大公よ…この街ではぐれ悪魔が見つかったわ」

その後、リアスに今日は部活はこれでおしまいと言われた蓮だが大人しく帰る訳なく。寧ろ、リアスが部室で話していた一つの単語

“はぐれ悪魔”

主を裏切りまた最悪殺して解き放たれた獣の名称

つい先日モランクの高い、対処が困難な“はぐれ悪魔”を殺した蓮だ。その蓮ではなく、リアスに回って来たことを見ると大した相手ではないのだろうか

しかし、それは蓮やリアスの様に力を使いこなしている場合に限る。力を持たない人間、また力に目覚めたばかりで制御ができずにいる者

つまり、力に覚醒したばかりの兵藤一誠には厳しい相手だ

リアスもそれはわかっていると思うが

「用心のために一応来たが……これは必要なかったかな」

蓮は現在、仮面ライダーナイトに変身し、ミラーワールドからリアスたちに気づかれないように見守っていた

しかし今夜の相手、女性の上半身と化け物の下半身を持った化け物、名前をバイザー5mを超える巨大な体に、蛇の尻尾、まるでキメラだがその実力は、先日俺が倒した

悪魔“エルティス”の方が実力的に上だった。

それに加えて、リアスたちは一誠を除いた眷属の全員、木場は騎士（ナイト）としてのスピードを生かし、小猫は強靱な力と耐久性でバイザーを追い込んでいたが、女王（クイーン）である朱乃の動きが悪い

いや、傍から見れば彼女の発する魔力の雷はバイザーの肉を焦がし、断末魔の叫びをあげさせているが力が出せていない。何か別の事に意識を向けている。

原因は…心当たりは…ないわけでもないが

雷撃が尽き、朱乃が一息ついたところでリアスもはや区別がつかないほど黒く焦げ、肉が焼ける臭いを発するバイザーの下へリアスが近づくと

もはや意識が残っているかもわからないが

これで終わり、大した番狂わせも起こらなかった。何も心配することが無くてほっとする。一方で暴れられなかったこともあつて欲求不満だが仕方ない

帰ろうと傍に控えてあつたライドシユーターの操縦席に手をかけた、その時だった。

“キイイイイイイイン！キイイイイイイイイン！”

ツ！・・・おいおい！マジか！！

久々の感覚に思わず背筋が震える。2年前以降、無意識の内で感じたことは無かつた。

だがこの金属んのような耳鳴りが響くつてことは

まさか！

「キヤツ！ なっなんなの！ この化け物は」

リアスの悲鳴が鏡の向こうから響く。俺の予想は最悪な方向での中していた。



それは、バイザーを完全に消し去ろうとした時に突然それは現れた。

「部長！危ない！」

一誠はリアスを庇うように突然現れたそれからリアスを守るように立ちふさがる。

それは蜘蛛だった。しかし、生物の様な生々しさは感じられず、体はまるで機械の様な鈍い光を放っている。

さらに異常なのはその大きさに似合わない素早さだった。

“ キシャア!! ”

「なっなんだこいつは!?! うつつ来るなあ! クルナアアアアアアアア・・・アア」

リアスの前からカサカサと移動したそいつは、いつの間にか自分たちが殺そうとした動けないバイザーに向かうと、その鋭い牙で

“ゴギヤツ! グチャツ! ゴキツ!”

「うつ……おええええー!」

一誠は我慢できずに吐き出してしまう。無理もない、目の前に突然現れたそれは自分たちの目の前でバイザーを生きたまま捕食し始めたのだ。

正直リアスも小猫も朱乃も木場も吐いてはいないものの青ざめた表情で口を押えている。

しかしリアスたちの事など眼中にないのか、夢中で食事を行っていたそれ

だが現れたそれ、食事を終えるのはあつという間だった。5mもの巨体を誇ったバイザーの巨体は全て食い尽くされた。

そして、バイザーほどの巨体を食い尽くしたそれはまた新たなごちそうにありつこうとする。

極上のうら若き肉体を狙って

“キシヤアアアア!!”

「部長！来ます！ハアアアアア!!」

木場はリアスに狙いを定めたそれに自身の手にある魔剣をそのスピードで加速した剣先を突き刺すが

“ガキン”という鈍い音を発てるだけ。

“ キシャアアアア!! ”

「クツ！なんて強度なんだ！刃が通らない！」

「でもその装甲ごと！叩き潰す！」

剣が突き刺さらないと分かるや、木場と入れ替えに小猫が、木場が突き刺した剣の傷を正確に殴りつける。その威力はそれの巨体を軽々と建物のコンクリートで作られた壁に叩きつける。

「やった？」

「どうかな…これで倒せたと」

“ ギシャアアアア  
!!!!!! ”

「思ってはいなかつたけど．．．ツ！副部長！」

カツ！という閃光とともに朱乃の放った雷撃がモンスターの装甲を黒焦げにしようと降り注がれる。

しかし、それでも彼らは届かない。あと一歩、いやそれ以上に

“キシヤア！キシヤアア”

それは狙いを一人に絞ったのか木場を無視して、狙いをつけた獲物へと疾走する。

誰が狙われたか。その正面から剣を構えていた木場でも拳を構えていた小猫でも  
無い

はっ！と誰が狙われているのかすぐに気付いた木場と小猫

しかし彼らは動けなかった。

「糸！何時の間に!?!」

体を拘束するようにいつの間にか巻かれていた白い糸、木場は剣で、小猫は力で無理やり引き千切ろうとするが切れない。何か特別な素材なのか切るのには時間がかかってしまう

「！副部長！逃げてください！」

木場は責めて声をと叫ぶが、その時にはそれは既に朱乃を捕食する為に、今現在木場達を苦しめている糸で朱乃の体を捕らえる

「朱乃！私の仲間を離しなさい！」

一誠を解放していたリアスもさすがに無視できないのか練りこんでいた“滅びの魔

力”をそれに向けて放とうとするが

“ キツシヤシヤシヤ!”

あざ笑っている。そいつは捕らえた朱乃を射線上に盾として置く。リアスも自分の魔力では、撃てば朱乃ごと存在を消してしまう

故に撃てない

カツ！ドドドドドドド!!!

雷撃の雨がそれに降り注がれるが、あまり大したダメージにはならない。

「朱乃！逃げて！逃げなさい!!」

そして徐々に引き寄せられ、捕食されると覚悟を決めた時

【ナスティベント】

《キキイイイ!!!》

“ キシャツ!? キシャアアアアア!!!? ”

何処からか現れた黒い影から発せられる特殊な音波が、その神経を直接揺らす。と同時に余りの苦しみに思わず捕らえていた朱乃を糸ごと放り出してしまふ

「ツ!.....? あら? えっ!」

地面にたたきつけられる衝撃に覚悟し、目をつぶっているが何時まで経っても衝撃が



来ないことに、恐る恐る目を開ける。

自分の体は宙に浮いていた。いや浮いていたというより誰かに抱きかかえられていた。

漆黒のライダースーツに身を包んだ銀色のプロテクターを纏った西洋の騎士に

「まったく……だが今回は敬意を表そう。まさかライダーでもないものが”ミラーモンスター”をあそこまで追い詰めるのだから」

蝙蝠型ミラーモンスター”ダークウイング”を従えし、漆黒の仮面ライダー【ナイト】が朱乃を抱きかかえ、同時に守ったのだ

「貴方は一誠君の時の……何故？」

「私を助けたか？…自惚れるな、別にお前を助けたわけではない」

ナイトは朱乃をゆっくりと下ろし彼女を庇うように前にたたずむ。

“ キシヤアアアアアアア!!! ”

「全く……。あの日以来存在が消えたミラーモンスターが何故こんな所に現れたかは不明だが、それにしても《デイスパイダー》か」

ミラーモンスターの中では中型の大きさのモンスター、前に1度倒したはずだが

「同型種のモンスターか…それとも何者かに復活させられたかは解らんが」

ナイトはカードデッキから一枚カードを取り出し、右手に添えてあつた長剣、翼召剣、  
ダークバイザーにベントインする。

【ソードベント】

先ほど同様、無機質な機械認証と共に虚空から一つの武器がナイトの手に現れる。  
ダークウイングの尾を横した大型ランス、ウイングランサーを構え、怒り狂ったデイス  
パイダーに切りかかる。

“デイスパイダー”も負けじと自身の手足である鋭い爪でウイングランサーを受け  
ようとす

ガン！デイン！デイン！

前の2本の爪をうまく使う”デイスパイダー”だが、ナイトはその爪をうまく受け流し、同時に受け流した勢いのまま斬り付け、突き刺す。

逃げようにもナイトの斬撃は吸い込まれるようにデイスパイダーの装甲を肉を削っていく

“キシャアアアアアア!!”

ブシャアアア!

デイスパイダーも負けまいと、朱乃や木場の動きを封じたその糸を口から吐き出し、ナイトの動きを止めようとする。

しかし蓮もとい、ナイトにとって唯でさえ動きが遅く見える為、軽々と糸を回避すると、その隙について懐に潜り込み”デイスパイダー”の鋭利な爪を

「ハアアアアアアア! セイハアアア!」

ダイヤモンドにも匹敵する高度を持つ、太い腕ごとその爪を砕く

“キツキシヤ!?キシヤアアア!!!”

最早、勝ち目を無いことを悟った“デイスパイダー”は命可愛さで目の前の敵に後ろを見せ、元来たミラーワールドへと逃げようとするが、それを逃がすほど甘くはない

【ファイナルベント】

「来い!ダークウイング!!」

《キキイイイイ!!!》

ダークウイングがナイトの背に取り付き、マント状に変化し、ウイングランサーの先端を中心にナイトの体を覆い尽くす。ドリル状になったナイトの体全てが1つの砲弾の様に高速回転した状態で逃げようと必死になっている“デイスパイダー”を貫く



「！！！！」

男の上空を旋回している蝙蝠。それは通常の何十倍もの大きさの異常な大きさ  
そして目の前の存在はそれを何の代償もなく操っている。

「何か聞きたそうだな…え？リアス・グレモリー」

「ええ…だけどまず聞かせて…あなた何もの？どうして私の管理するこの街にいるのかしら？」

正直言うともんどくさかった。助けなくてもいいが、それはそれで後で冥界のアジユカから何を言わせられるかわからなかった。

しかし、何者か……そういえば名乗っておくのを忘れていたな

「俺はナイト……仮面ライダーナイト」



「ナイト？それがあなたの名前なの？仮面ライダーとは何かしら？」

「仮面ライダーは総称だ。俺はさっきのミラーモンスターを追ってここに来た」

正直言ううと嘘だが。この方が疑われずに済む。

「ミラーモンスター？ミラー…鏡、鏡の化け物？」

「そうだ。奴らは鏡の中に潜み隙あれば人間を襲い捕食していた。昔全国で失踪者が続出しただろう。あれのほとんどが奴らに捕食された人間だ。」

「失踪者の続出!?!あの人間界で起こった怪事件の原因がまさか…そんな!?!」

驚くのも無理はない。しかしミラーモンスターの存在は公になっていないし、そもそも、2年まえのある日を境に、消えてしまったのだから。

「そして俺が言ったことは冥界、特にお前の兄、魔王サーゼクス・ルシファーには伝えておけ。そして何らかの対策を取らなければ今度は人間だけじゃない…お前から悪魔なんかの種族も犠牲になるぞ」

「どういう事かしら？それになんで私の兄が魔王であることまで」

「まず今回の奴らの行動。恐らくは“この”はぐれ悪魔”を狙ったものか、または、お前を狙ったかわからないが、悪魔を狙った。奴らは鏡の世界、ミラーワールドを自由に移動できることから考えると」

「ここまで言えばあとは聡明なリアスの事だわかるだろう」

「冥界にも…：現れるというの？あの化け物が…」

リアスだけではない、朱乃も木場も小猫も全員が理解した。1体のモンスターに上級悪魔とその眷属が束になっても、ナイトが来なければ一人二人は死んでいたのだ

「これがもし、中級悪魔や下級悪魔に魔の手が及んだら

「伝えたぞ…じゃあ「待ちなさい!!」…何だ」

「このまま逃がすと思っっているの！あなたの話が本当なら、余計にあなたをこのまま帰すわけには」

「お前ら……………何勘違いしているんだ？」

「キヤツ!?!」「クツ!?!」「うっ!?!」

周りの空気が変わる。冷たく、まるで自分の首筋に刃を突き立てられ、心臓を鷲掴みされたような感覚で体全身が恐怖に包まれる

一誠は余りの殺気の濃度に膝を尽き果て、木場や小猫は余りに強い殺気に武器が構えられない

リアスも気丈に振舞おうとしているが瞳の焦点が合わず、既に飲み込まれている。

「この程度の殺気にも耐えられない奴が…俺を逃がさない?…拾った命を簡単に捨てるなよ」

それだけ言うとナイトは近くに落ちていたガラスの破片からミラーワールドに消えていった。

ナイトが消えて直ぐには誰も動くことができずにその場に立ち尽くしてしまった。

「何なの…あの暴力的までの殺気は」

リアスは悔しくて、そして恐ろしくて声が未だに震えてしまっている。ほかの眷属も各々それぞれの思いがあるがただ一つ、この場の全員が学んだ。

自分たちはまだまだ弱いと言う事を。

## 第5話 奪還シスター、暴力の祭

辺りを見渡せばひどい状況だった。

ビルからは硝子の破片が飛び散り、車は無残にも破壊され、ガソリンに引火した炎で黒い煙が辺りを包んでいる。

だが中でも酷いのは路上や車、道路際に寄り掛かって死んでいる人の死体

大人から子供、男から女まで多くの死体が数えきれないほどに広がっている。

そんな中、破壊された一角、炎上する車の目の前で立ち尽くす。当時の俺は目の前、胸に受けた致命傷ともいえる傷からどことなく流れ出している男を唾然として表情で見つめた。

男な体からは絶え間なく血が流れ出て、だがそいつは口から吐血しながらも蓮を見上

げる形げで…ただ…笑っていた。

「は…はは…蓮、大丈夫か？どっか怪我は無いかよ」

“ どうして ” と当時の俺は思った。何故赤の他人を自分の命を犠牲にしてまで助ける？

必要以上に干渉し、利用されていることにも気づいていたはずだ。なのに

「なんで……なんで、あんたは……そうまで俺を助けるんだ…城戸」

「城戸さん……だろ。全く……目上の人に対する。言葉使いだけは結局治せなかったな」

「そんな事聞いている！「蓮…お前は生きろ」えっ!？」

城戸は蓮の頭にそつと手をのせ“ わしやわしや ” と髪を撫で、慈しむ様な瞳で蓮を見つめ



「お前は生きて……これからなんだからさ、俺なんかより……もつと……たのし……  
い」

だが城戸の命のタイムリミットはここまでだった。最後に俺に笑みを向けたまま必死の力で開いていた瞼は閉じ、頭にのせていた手は静かに地面へと落ちた。

こと切れた人形の様だった。そして、当時の蓮はこのような人間を何度も見てきた。故に信じたくなかった。

自分の目の前で、糸の切れた人形のように動かない城戸を

「城戸……ねえ、城戸！城戸……城戸！城戸！！城戸！！……もう俺を……一人にしないでよ……」

必死にその体を揺らす。目には大粒の涙を浮かべ、その動かない体を大きく揺さぶ

り。きっと寝ているだけだと、これは何時ものこいつの俺を笑わせたりするためのジョークだと。

必死に、必死に自分に訴えるように、言い聞かせるように

だけどこの時の俺は気づいていた。もうこの体に魂は、城戸はもう生きていないと

だけど…それでもこの時の俺は

「もういいだろ……いることはわかっているんだ。姿を見せろよ……  
トリシューラ」

蓮の感情のない声を静かに発する。その瞬間、目の前で移されていた悲劇の空間が暗転する。映画の映写機のように、光が一瞬でブラックアウトする。そして、遂にそいつは現れた。

全身が漆黒の鎧で覆われていた巨体と深紅の瞳、全身の至る所には赤く輝く宝石の様な物が埋め込まれている。

そしてその姿に値する、絶対的な覇者の、破壊のオーラを身にまといている。

思わず後ずさりしてしまう

「ふっふっふ！楽しんで頂きましたよ。あなたの力の根底、復讐だけではない。ただ自分の大切なものを守りたいと願う純粋な思い」

お前は何者で何故こんな所、俺の夢に現れる！何者なんだ

「私はあなたの力の一部。既にあなたも気づいているのでしよう？私が今どこにいるのかを」

.....ある程度の予測は立てた。と言うより“これ”以外に

理由は考えられなかった。

俺の体内に宿る神 器セイクリッド・ギア

「そうだ…私は大昔、この世界に絶望した私は『聖書の神』に自らの肉体と魂を封印させ、セイクリッド・ギア神 器として今を存在してきた。この神 セイクリッド・ギア器の名は『深淵と永劫の鍵（アビシヤルエタニティー）』」

やはりと納得できた。こいつが俺の夢に現れるのも納得できる。なぜならこいつは俺の中にいたのだから

「私は私を宿した人間、またはその他の者を多く見てきたが…ククク…実に面白い、ここまで複雑な肉体をした主に宿つたのは初めてだ。ああ悪い意味ではないよ、私の力、もセイクリッド・ギアとい神 器の力は特殊だね。どんなに力があるうと、誰も使いこなすことは無理だったんだ。それ故にこの神 セイクリッド・ギア器は誰も知らない。失われた神 セイクリッド・ギア器として誰の記憶にも残っていないんだ」

嘲笑を浮かべるトリシューラ。そして蓮はそんなトリシューラを見ていてどこか自分の姿を重ねる。似ているのだ

方や人ではない異形にして大切なものを失い、復讐のため、常に孤独を纏いを生きてきた男

方やその強い力が原因で誰も使い手がおらず、常に孤独を貫いてきたドラゴン

しかし、とドラゴンの瞳に力がこもる

「しかしあなたは使いこなせそうだ。私に宿りし永劫の力を。故に教えて差し上げましょう、この神セイクリッド・ギア器の使い方」

その日、蓮は夢から目覚めた。そして目覚めた瞬間、声を抑えきれずに笑ってしまっ  
た。

「フフハハハハハハ!!!なんだよ…これ、もう一人の人間、いや一人の存在が持てる力を超  
えている!」

トリシューラが話した神セイクリッド・ギア器の力は異常だった。俺の周りの世は何処かぶっ飛んで  
いると思っていたが、まさかここまでぶっ飛んでいるとは思っていなかった。

俺はその日は始終笑みを絶やすことを辞められなかった。周りからは何時もぶつき

い  
らばうな俺が不気味な笑みを始終浮かべていると言う事で若干引かれていたが関係な

力なものだったのだ。  
トリシューラの、この神器はそれほどまでに恐ろしく、そして神をも恐れぬほど強

トリシューラは語ったのだ。この神セイクリッド・ギアの力を

『セイクリッド・ギア神 器 深淵と永劫の鍵（アビシヤルエタニティー）…その能力の一つは一言でいえば  
“死者蘇生”』



“死者蘇生” それはどんなに力を求めても手に入れられない力の1つ

『しかし、この力には避けようもない“制約”と、何よりも強大な代償が求められる。まずは“制約”だが

- ① 蘇生者の強い思念（この世に残した強い未練など）が染みついていて必要
- ② ①同様に術者側も蘇生させる者に強い印象を抱いていなくてはいけない
- ③ 蘇生者と直に対面したことがある事（写真などで見ただけではダメ）』

そして次に代償を話すトリシューラだが、その代償は自分が想像しているよりも遙かに大きかった。

『代償はただ一つ、術者の生命力。蘇らせる者にも由るが、通常の間一人の寿命、100年分の生命力』

馬鹿げていた。正直甘く見ていたかもしれない。死者蘇生なんて荒唐無稽、神をも恐れる行為だ。その程度の代償と言うやつはいるかもしれない、だがこれでは自分の命をそのまま他人に分け与えるものだ。

『そして同時に、術者が死ねば、蘇った死者は砂へと変える。つまり自らの命を犠牲にしても結局は無意味なんだ』

実際に過去の宿主は、言っているにもかかわらず自分の愛する人を、自分の命を犠牲にして復活させたものもいると聞く。しかし再会できたのは一瞬、出会った二人は物の数秒で砂に還ったと聞く

だが俺は違う。俺は普通の人間ではない化け物である。それに俺はトリシューラからもう一つ、方法を聞いていた。

自らの命を代償とせず、"死者蘇生"を行える方法を。

それは"外道"の手法。

だがだからどうした？俺には関係ない。既にこの手は血で汚れている。今更全身が染まろうと関係ない。

俺は俺の目的の為ならどんな汚い事にも手を染めてやる。

そしてその日の放課後、少々だるそうに蓮は旧校舎の部室に足を運ぶ。

「どうも失礼しま「バン！」す？」

蓮は部屋に入る。部室に入ると同時に乾いたいい平手打ちの音がこだました。

一誠がリアスに平手打ちでたたかれたのだ。

「あの…何かあつたんですか？」

「それがですね」

俺は近くに困った表情を浮かべた朱乃に訳を聞く。どうやらレイナーレの奴がアーシアという名前のシスターの神セイクリッド・ギア器を狙い拉致、更に今夜あたりにも神セイクリッド・ギア器をアーシアから抜き取ろうとしていると

聞けば聞くほど3流の屑野郎だな。しかし、この街に蓮ナイトが居る事を理解したまままだそんなことを行おうとしていたとは

やはり殺さないと分からないようだな

「あつあの、蓮君」

「何で…ああ、すみません。なんか聞けば聞くほど胸糞悪くて」

無意識に殺気が漏れてしまっていたのか、いつの間にか注目の的になっていた。一誠をきつく叱っていたリアスも、どうしても譲れないことを訴えていた一誠も殺気に充てられてこつちを注目していた。

「いい一誠よく聞きなさい！あなたの行動が私やほかの部員にも多大な影響を及ぼすのよ！あなたはグレモリー眷属の悪魔なの！」

「では俺を眷属から外してください。俺個人であの教会へ乗り込みます」

一誠の目は譲れないといった決意ある物の瞳だ。正直一誠が一人で行けば一誠は確実に死ぬ。正直俺から見れば無謀で何の得にもならない。

ここで一誠をはぐれとして対処するか、それとも黙って行かせて殺すか、それとも別

の選択肢を選ぶか

(あの時の言葉……こいつの人生をお前はどうか左右する?)

リアスの主としての、一誠をどう思っているかがこの選択肢で判断できる。故に、蓮はその言葉に注目する。

「一誠あなたは『兵士』の駒を弱いと思ってるけどそれは違うわ。『兵士』にはプロモーションという他の駒にはない特殊な力があるわ」

「プロモーション? 何ですか? それは」

「プロモーション、実際のチェスでは、『兵士』の駒は相手の最深部陣地へ駒を進めた時に、他の『王』以外の駒、通常は『女王』にその能力を変化させることが多いが、実質は他の全て、好きな駒へと能力を昇華させることを言う。俺の予想だが、悪魔でいう『兵士』は敵陣地と認識された場所に足を踏み入れた際、その能力を『戦車』『騎士』『僧侶』『女王』の4つのいずれかの能力に変化させることを言うのでは?」

「……へえ、流石ね、蓮。少ない情報でその洞察力、やっぱり眷属として欲しいわね」

リアスは妖艶な瞳でじっくりなめまわすようにこちらを見つめるが直ぐに一誠に向き直り

「今蓮の言った通りよ。正確には『王』が敵陣地と認めた所に踏み入れた際だけ……例えば、『教会』とか」

なるほど、と思わず笑みを浮かべてしまう。リアスはそっちの選択肢を選んだ。一誠を助ける選択肢を

彼女の言葉を一誠は理解できていないようだが、なら俺もするべき事をやろう。



「大事なようが出来たわ。私と朱乃はこれから少し外へ出かけます。ああそうだ、蓮、悪いけど今日の部活は…あら？」

朱乃の報告を受けたリアスは眷属全員を見渡すように外に出ることを伝え、蓮に今日の部活はなしと伝えようとするが先ほどまで近くにあった蓮の姿は既にこの校舎には無かった。

数分後

蓮はリアスたちの話が終わる前に部室を出た。そして現在、ミラーワールドを通り、その姿は先ほど話で出ていた教会の茂みにいた。

件の教会からは多くの人の気配、そして一体の墮天使の気配を感じる。そして教会から発せられる心地よい殺気も

“ 発動 ”

蓮は胎内に宿りし神 セイクリッド・ギア 器を発動させる。一瞬で腕が黒い禍々しいものへと変貌する。

だが一つだけ何時もと違うことが

『ほう…中々の殺気が満ち溢れているな。蓮よ。本当にいいのだな？』

「そうだ」シエーラ「お前の言葉を疑っているわけではないが」死者蘇生」。実際に目の当たりにしない限りは信じられない」

違う事。右腕から声が、女の声で右腕が語り掛けてくる。正確には右腕に宿りし深淵と永劫の鍵（アビシヤルエタニテイー）からだだが、因みに「トリシユーラ」の名前は呼ぶのが面倒なんで、以前気に入っていた女性だとかの名前で「シエーラ」と呼んでいる。

蓮は懐からカードデッキ、しかしナイトの物ではない、ナイトは黒かったが、そのカードデッキは色がこげ茶色であり、真ん中のライダーの象徴であるレリーフも違う

そのカードデッキを地面に置き、右手の手の甲に全身の意識を集中させる。

「うっ！グググググ」

全身の力が右の手の甲に吸い込まれる感覚に思わず地面に膝をつく。

『蓮！「いいから……うぐつ！……続ける」しかし……「命令に従え!!」  
わかった』

ウグウウウ！全身の力と言う力が吸い取られる。意識をしっかりと保っていなければ、  
気絶してしまうほどに

だが徐々にこちらの生命力を吸い取り始めて数秒、右手の甲が闇色の閃光を放つ。そ  
して蓮はその“目”を地面に置いたカードデッキに向ける

【Revive】

音声が響くと同時に、闇の閃光が俺から掻き集めた命の本流をカードデッキに注ぎ始  
める。それはほんの数秒だった。

黒い閃光が徐々におさまっていく。閃光の余波で起こった土煙で視界が悪かったが、  
土煙の向こうに誰かが立っている影が映し出される。

「う〜ん〜…あれ…(こ)は…(ど)か?」

暢気な声が上がった方向に俺は歩みを進めた。そいつはいきなりだったからか、森の中を見渡していた。

「ん?あれー?君どこかで見たことあるね?どつかであつたかな?」

「蘇って記憶が飛んでいるのか?おい、俺だ。相川蓮だ」

「相川…(こ)は…(ど)か?相川、って旦那!どどどどど、どうしてこんな所に!俺とやろうつてんですか!!!」

「落ち着け…もうライダーバトルはとづくに終わっている。お前とやり合う意味はねえよ」

呆れてものが言えない。どうやらこいつは自分が死んだことすら忘れてるらしい。

こいつは佐野 満(さの みつる)、2年まえライダーであることを職業とし自分を売り込んできた男だ。俺はこいつに株で儲けた金を掴ませ、利用するだけ利用していたんだが王蛇に敗れデツキを破壊され、俺に助けてくれと懇願しながら死んでいった。

「そうだ…俺、あの王蛇ってやつにデツキを破壊されて……なんで生きてんの俺？」  
『それはお前を主が命を削って蘇らせたんだ』

「ん…なんだ、頭の中に声が……って旦那！その右腕どうしたんですかい!? って気持ちわりい」

『気持ち…悪い…だと』

シエーラの奴……どうやら気にいっていたようだな、落ち込んで手の甲の“目”まで悲しそうに泣いちゃっているし

それにしても……っち、これは予想以上の疲れだな。体が思うように動かない。

通常の7割……動けばいい方か。

「旦那なんか辛そうな表情していますけど……てか旦那が命を削って俺をよみがえらせたってどういう」

「それは……」こんな所に人間」っちこんな時に」

俺たちの頭上、黒いカラスの様な羽を羽ばたかせている女が此方を見下ろしていた。近づかれたことにも気づかないなんて

「だだだ旦那っ！あれなんですか!?ゴスロリ幼女に羽が！」

「誰が幼女だ！人間のくせに！」

墮天使は地上に降り立つと優雅にお辞儀し、殺意をのせた笑みをこちらに見せる

「私、人呼んで墮天使のミツテルトと申します。レイナーレ様に言われて渋々見に来ればまあなんてことでしょう。脆弱で弱つたらしい人間が2匹も」

幸い奴は此方が雑魚だと思っているようだ。完全に油断している。

(佐野：聞こえているな)

(えっ何で頭の中に旦那の声が！)

(驚いたそぶりを見せるなああの女に気取られる、黙って俺の声を聴け)



佐野は何が起こっているのかわからない様子だが、黙ってこちらの指示に従うかのよううに小さく頷く

(いいか状況を説明する。お前の懐に“インペラー”のカードデッキがあるのは解るな)

く  
ごそごそと佐野は自らのズボンのポケットをあさる。目的の物を確かめたのか、頷く

内心では驚いているだろう。何故ならそのカードデッキは破壊され粉々に砕け散ったはずなのだから

だが今は驚いてもらっている余裕も、話している余裕もない

(目の前にいる女は“墮天使”、神話なんかで存在する墮ちた天使だ。恐らく奴は俺を、俺の中にあるある物を狙ってくる)

（ある物…ですかい？ああすいません。で…俺はどうすればいいですか？）

本当に物分かりがいい、と言うより扱いやすいな

（現在俺はその体力の殆どをお前の蘇生に使っちゃったから正直あまり動きたくない）

だから

（お前はあの女を戦闘不能に追い込んで、俺の目の前まで連れてこい）

（殺すんじゃないですか？）

思わず疑問に思う佐野。蓮と組んでいたところは、目の前の敵は生かすな、殺せといつも言ってきただけに不思議に思った。だが蓮の言葉を疑いはしない

蓮の指示はいつも適格だったから

「つてことで、何でこんな所にいるのかは解らないんですけど、残念ですけど、死ねや!!」

お淑やかだった外面を脱ぎ捨て暴力的な本性をむき出しにしたミツテルトはその手に光の槍を作り出すと問答無用でこちらを的確に殺しに来た。

投げつけられた槍を、地面に転がることで避ける。奴は攻撃したことで動きを止めている

(佐野！今だ!!)

佐野は小さく頷き。懐からこげ茶色のカードデッキを構え

「行きますよお！『変身!』」

Vバックルにカードデッキを装填した瞬間、その姿が変わる。

「あん?・・・お前まさか!レイナーレ様が言っていた!でも聞いていたのと姿が違  
う!?!」

黒いライダースーツに皮のジャケットを着こみ、両肩と頭には鹿の角の様な装飾

かつて、ライダー同士の戦いにおいて、王蛇に敗れたものの、ナイトのアシストをし  
ていた仮面ライダー

「仮面ライダーインペラー、久しぶりのお仕事!張り切つていきますよ!」

「ちい、仮面ライダーだか何だか知らないけど、人間が生意気なんだよ!」

ミッテルトが両手に光の槍を作り出し、作り出した槍をインペラーに向かって勢よく投げつける

ブウン。と高速で投げつけられた槍は吸い込まれるようにインペラーに向かうが

「オラッ！」

バキン！

インペラーは飛来する槍を体を捻り放った回転蹴りで粉々に砕く。

自慢の光が硝子の様に粉々に砕ける。それを人間に砕かれた。その事実はミッテルトにとってレイナーレが語った妄想を現実のものへと変える。

「い、いやだ！来るなよ！来るなあああ!!!」

錯乱したミッテルトは自分の生成し続けられる最大量の槍を生成するたびに恐怖を振り払うかのようにインペラーに放つ

「オラッ！ハッ！セイヤッ！」

だがインペラーは飛来する槍を蹴りや拳で薙ぎ払い、腰を深く沈めるのが見えた瞬間だった。

「えっ？ギヤアアア！」

ミッテルトの目の前に、まるで瞬間移動したかのようにインペラーの仮面が目の前に現れたと思ったら、自分のお腹に激痛が走り、思わずため込んでいた息をすべて吐き出してしまふ。

激痛に悶えながらも自らのお腹に目を向けたミッテルトに映ったのは深々と突き刺さっているインペラーの膝だった。

ただの膝蹴りで、戦車の砲弾をま間近で食らったような衝撃、ミツテルトは目の前のそれが自分の良く知る人間では無い事をようやく理解するがすべては後の祭りだった。

「旦那〜！捕らえましたよ！てかどうなってるんすか！体超軽いし。まるで羽が生えた感じなんすけど！」

「ああわかった。…わかったからその右手に掴んでるのを寄越せ」

いい年下男がピョンピョン跳ねるなど言いたくなるが、インペラーの戦闘はそれほどまでに見事だった。

以前とは比べ物にもならないほどの脚力、以前の倍はあるのではないかと思えるほどだった。

ほいっと右手に掴んでいる金髪、未だに深々と突き刺さった膝の形が無残にも残って

いる。

「あつ……あが……」

もはや意識が朦朧としているのか、まあ暴れられないだけ丁度いい

蓮はミツテルトの首を右手で強く握りしめる

「がはっ！……ぐるじい！たすけ」

目に涙を浮かべ必死に助けを懇願している姿は当初の余裕は欠片も残っておらず、見ている側としてもとても滑稽で思わず笑ってしまう

「ああ……助けてやる」

「ああ……ありが」

「と思うか？残念だが俺はそこまで善人ではないのよ！」



【D r a i n】

「あくいいねく癖になりそうだ」

「あつ……あがが……ああ……あ……あ……」

右腕を伝ってミッテルトの生命力が流れ込んでくるのがわかる。蓮は失った生命力が体中に広がるのを心地よく感じ、逆に吸い取られるミッテルトの方は吸い取られるたびに目から光が消え発する声も消えていく

そしてすべての生命力を1滴残らず吸い尽くされたミッテルトは

“ドサツ！ザアアアアアアアアア”

砂となつて消えた。

「相変わらずえげつないっすね。一瞬の希望を持たせた上で、絶望に叩き落とすその手口」

「うるさい……うん！回復した。どれくらい補充できた。シエーラ」

『ふむ…墮天使1体分だと3人くらい分の生命エネルギーのストックだ。本来は4つくらい搾り取れたが、先ほど佐野の復活に使ったからな』

「へへへ…いやすいませんね〜って、旦那！邪魔者もいなくなっただしそろそろどうなっているのか教えてくださいよ！」

急かすインペラーに蓮はどうするかと悩んでいた。正直言って、時間もあまりない。先ほどの戦闘で数分ロスしてしまい、何時一誠やリアスたちが来るかもわからない。

『蓮、もしよかったら、私がああなたの記憶から必要なことだけを抽出して佐野の脳に直接情報を送ることもできるが』

「どの位だ？」

『5分もかからないわ。佐野 満。先ほどは挨拶も出来なかったわね。私はこの  
セイクリッド・ギア  
 神器、深淵と永劫の鍵（アビシヤルエタニティー）に封印されている魂で”トリ  
 シューラ”蓮からシエーラと呼んでもらっているし、あなたもそう呼んでくれるかし  
 ら』

「おお！これはこれは、セイクリッド・ギア  
 神器？まあなんだかわからないけどあんたが教えてくれる  
 のかい？」

「ええ、ただし……ちよこつと痛いわよ（ニコ）」

キラン！と右手の目が一瞬輝いたような。一方佐野も”え？なんかいやな予感”と  
 額に汗を浮かべる。

「えっ！おお！！急に頭に色々なことが…つてあつあつたたたたたたたたたた！！痛い  
 ！！痛いですよ！！ちよこ！」

急に頭を抑え込み地面を転げまわるインペラーに唾然としてしまう。一体何がと右腕を見ると

『ふっふっふ……気持ち悪いって言った罰よ！オホホホホホホ!!!』

どこのお嬢様だお前は、てかやつぱり気にしていたんだ。気持ち悪いって言われたこと

5分後、出来の悪いコントが終わるとすぐに俺たちは教会に突入した。しかし正面からではない。もちろんミラーワールドを景夕してだ。表では白髪おかつぱのはぐれ悪魔狩りが侵入者を待ち構えていたが残念ながらそんなものに構っている余裕はない

「旦那〜！ありましたよ！」

分かれて入り口を探していたところインペラーが祭壇の下、地下へと続く階段を見つけてる。

階段を地下に続く通路を降りきると、奥へと続く一本の道があった。その道を急ぐようにかけていく。時折扉が見られるが一つ一つ確かめながら奥へと進んでいく。

そうして行く内に、ナイトとインペラーは最後の扉に行きつく。

扉の向こうの空間は広く、奥には祭壇があるのが見える。表の世界ではその空間を埋

め尽くすほどの悪魔狩りや神父が、そして祭壇の十字架付近には今回の首謀墮天使レイナーレの姿が見える。

そして、その祭壇には、まるで生贄に奉げられるかのように挑発の幼さを残した少女があられもない姿で鎖につながれていた。

「ひでえ．．．．．あんな年の女の子を．．．旦那」

「ああ．．．．．佐野、悪魔狩り共はお前に任せる。2，3人寄越せ。その命を吸い尽くしてやる！」

久しぶりに血が冷たくなるのを感じる。それほどに怒っていると言う事か

「行くぞ!!」

「ん？何だ？鏡が「死ね」」

グサツ！ドサツ！

近くにいた男の脳天が翼召剣ダークバイザーにより真つ二つに切り取られる。男の体が倒れることでようやく周りの連中は気づきだす。

「しつ侵入者だああ！〔D r a i n〕アガアアアア！」

次に、叫び声をあげる男の生命エネルギーをすべて吸い尽くし、ミッテルト同様に砂に還る。

「どこから現れた!？」

「鏡から急に!？」

「良くも仲間を!!」

「こっちにもいるぞ!!」

「つち予想通りの数の多さか!ならば数には数だ!!インペラー!!!」

インペラーはナイトの声に頷くと腰から一枚のカードを抜き、自らの契約モンスターの顔を模した召喚機ガゼルバイザーにベントインする

【アドベント】

「ヘアッ!」「ギキイイ!」「グルオ!」



「何だ！また鏡から！今度は化け物が！」

鏡から現れた2足歩行のミラーモンスターたち、ギガゼール、メガゼール、マガゼール

インペラーの支配しているすべてのレイヨウ型モンスターが多数現れる。

そのモンスターの数が自分たちの数を超えてしまうことに萎縮してしまっている

「お前らあ！！今回は旦那のお墨付きが出ている！！一人残らず食い散らかせえええ！」

「へアアアアア！！」「ギキイイ！！」「グルオオオオ！！」

現支配者であるインペラーの許しが出了途端、ギガゼール率いるレイヨウ型モンスターが悪魔狩りを襲い始める

「ウワアアアアアア！！来るな化け物オオオ！！」

「俺は!!俺はもつと悪魔どもをオオオ!!」

もはや広い空間はレイヨウ型モンスターで溢れ帰り、実力的にも劣る悪魔狩りの断末魔が絶えず飛び交う

「ギャアアア・・・アア・・・ア」

生きながら生命エネルギーを吸収すること5人。もうそろそろいいだろう

「早く!早く!早く!!」何を?そんなに急いでいるんだ?レイナーレ?」ヒイツ!」

ナイトは祭壇の上まで跳躍し、レイナーレを見下ろす形で背後に立つ。一方レイナーレもこの間、一方的な力で殺されかけた為、恐怖心が体に刻み付けられてしまい足がす

くんでしまう

視線を前にすると、十字架に拘束されたあられもない金髪の少女が。周りにそれらしい人物がいいることから見てもアジアで間違いないだろう

ザンツ！

「ああ！拘束を！儀式が・・・至高の墮天使への道が」

翼召剣ダークバイザーを一振り、アジアを拘束していた鎖を砕く。後ろで鼠が騒いでいるが今はどうでもいい

「おーい・・・お嬢さん。起きろ。助けにきてやったぞ」

アジアの幼い頬をぺちぺちと軽くたたく。その柔らかい瞳が次第に開いていき、最後にきよとんとした表情を浮かべている

「ええつと……騎士様？」

まあ……騎士であることには変わりないが

「立てるか？」

「えっ！は、はい。ここは……私は確かレイナーレ様に」

「ああ、そのレイナーレに君は神セイクリッド・ギア器を抜かれかけたんだ。そこを俺が助け「バサアア!!」ん？つておいテメエ!!逃げな！」

「逃げるわよ!!私はこんな所で死ぬわけにはいかないのよ!!」

逃がすかよ！

レイナーレを逃がすまいと追いかけてしようとするが、ふとその手が誰かに掴まれている。

アーシアの小さい手が、震えながらこちらの左手をしつかりと握りしめているのだ

しかも、彼女はその華奢な体を小さく震わせている。まあ殺されかけたのだから、仕方ないか

『蓮……その子はいいとしてレイナーレはどうする?』

「ああ……まあ大丈夫だろう。上に一誠たちグレモリー眷属の気配が感じられるし、後はいつらの方で始末するだろうさ」

それよりも、まずはこの子をどうするべきか

「あ……あの」

「ん? 何だ? ああ自己紹介がまだだったな。俺はナイト。仮面ライダーナイト」

「仮面？ライダー？」

「仮面ライダーっていうのは……まあ、簡単な種族だと思っておけばいいよ」

本来ならば正義の味方とか言っておきたいけど、俺らの行ってきたことを「正義」とは呼べないし

『妥当よね……間違っても復讐を望みとしている者を正義の味方とは呼ばないわよ』

うるさい

「で……ではナイトさんで……ナイトさんは一誠さんの」

「ああ……一応知り合い？てか顔見知り？どうやらあいつ等も上に来てるみたいだし。ちよつと待つてな」

俺はそういうと、辺りを見渡し、適当な服を探すが見当たらないな。てか血の付いた

悪魔祓いのローブしかないし

仕方ない

「ダークウイング！」

『キキイイイ！』

「えっ！コウモリ・・・さん？でもおつきです」

「ダークウイング！俺の部屋から適当なコートとつてきてくれ！」

『キイイ！』

了解と再びミラーワールドに消えていくダークウイング。ミラーモンスターを雑用に使うなんて

他の連中が知ったら驚くどころか、呆れるだろうよ

『キキイイイ』

ダークウイングが持つてきた俺の黒のコートをアジアに羽織らせる。薄着だと体に悪いし、寧ろ俺の下半身にも悪い

「旦那！こっちは全て終わりましたよ」

インペラーの陽気な声が入る。そういえば途中からエクソシスト悪魔祓い共の断末魔が聞こえなくなっていた

この部屋にもどうやら俺らを除いて生きている者はいないようだし

「あの……ナイトさん。この方は？」

ああ……そういえば言い忘れてたな。佐野



「はいはい。俺、この人と一緒にでき・じゃなかった、仮面ライダーインペラー、インペラーって呼んで。いや〜それにしても間に合ってたよかった」

「はい！ナイトさん、インペラーさん。助けてくださり、ありがとうございます。」

アーシアが頭を下げてくる。正直レイナレを殺す為に来たのだからお礼を言われることは無いのだが

「いや〜俺初めてですわ。なんか、こうやって闘ってお礼言われたの初めてですよ旦那」  
インペラーは完全にうれしくて舞い上がってる。まあ考えてみれば、闘ってお礼を言われることは無かったしな

『ん？…どうやら上でも決着がついたようよ。蓮』

確かに、ふと上の気配を探してみると、堕天使の気配が消えていた。どうやら倒した

既にこんな所にいる必要はないしな

「ここを出るぞ。こんな所にいたところで既に意味がないしな」

「了解です。／＼はいっ！」

アーシアは俺がお姫様抱っこ形で抱きかかえ警戒の為、インペラーが前方を先行する形で地上に向かう。

「イツセーさん…大丈夫でしょうか。」

不安そうに表情を曇らせるアーシア。まあ無傷とは言えないだろうが大丈夫だろう

キイイイイイイイン！キイイイイイイイイン！

「!？」

それは何時も突然だ。カードデッキを持っている者だけが感じ取れるミラーモンスターの出現予告

どこだ……どこから……!? 上か!!

「旦那!!」

「先行しろインペラー！アーシアちよつとスピードを上げるが我慢してくれ」

「えっ！あ、はい！わかりました」

ぎゅつと俺の体に抱き付くアーシアを抱え込むようにして階段を蹴り上げる

毎度毎度面倒なタイミングで現れるよ本当に！

そして地上、表の教会ではすでに戦闘が始まっていた。

「セイツ！ハアアアア!!」

『シエアアアア!!』

インペラーが闘っている敵は、この間倒した『デイスパイダー』に人型の化け物がくつついた様な姿、『デイスパイダー・リボン』

『デイスパイダー』の糸に更に毒針を連射する能力を備えていたな

「イツセーさん！」

アーシアの叫びの方向を見れば、そこにはレイナーレにやられた後に、襲われたんだろう、傷ついた一誠、小猫や木場も傷を負っている。

俺はインペラーに奴の注意が向いている間に、一誠たちの近くにアーシアを下す。

「アーシア!?無事だったのか!」

「はいっ!ナイトさんが助けてくださったんです」

「互いの無事を確かめあっているとこ悪いが、まだ戦闘は続いている。良いかお前たちはアーシアを含めた自分の身だけを守れ!」

「でっでも」

「お前たちの実力ではまだミラーモンスターには勝てない!ここは俺らに任せろ」

「うおっ!?!旦那!こいつめんどくさいっす!加勢してもらえますか!」

インペラーが苦戦する。正直言って相性が悪い。『デイスパイダー・リボーン』の吐き

出す糸を回避しつつ、蹴りをぶち込もうとすれば、上半身の腹から毒針が放たれる。

確かに面倒な相手だが！

【ナスティベント】

『キキイイイイ!!』

『シユオツシユオオオ!?』

ダークウイングから放たれる超音波が一瞬だが、奴の動きを止められる

インペラーもその一瞬だが隙を見逃さず、腰のデッキから一枚のカードを抜きだすと、右膝のガゼルバイザーにベントインする。

【スピンベント】

インペラーの腕にギガゼールの角、螺旋状のドリルの様な武器、ガゼルスタップが装着される。

「おっしやあ！行くぜオラア!!」

ガゼルスタップがインペラーの方向に合わせて高速回転するドリルを『デイスパイダー・リボーン』に叩きつける！

ダイヤモンドも平気で砕く高速回転するドリルが『デイスパイダー・リボーン』のメタリックな装甲を削る。

『ジエアアア?!?!』

「オラツ！セイ！ハアアア!!」

右腕の重さを物ともしない動きで徐々に、しかし確実にその装甲を削っていく。だが『デイスパイダー・リボーン』も遣られつ放しとはいかない

奴も苦し紛れだが毒針を上半身から連射してくる。インペラーはガゼルトルネードを発動し、腕を勢いよく振り払ってしまったために防御が間に合わない

ドドドドドドドドドド!!

「うおおお!!ちよつとたんま」

一瞬まずいと思い、衝撃に覚悟するインペラー。だが、容赦なく襲い掛かる毒針

「ハアッ!セイツ!!」

ガン!ギン!

だが翼召剣ダークバイザーの剣先がすべての毒針を切り落とす。

「くぐぐー」



「わっかりましたー!」

「ジエアア!」

ナイトの翼召剣ダークバイザー、インペラーのガゼルスタップが交互に繰り出され、ただでさえ相性の有利さでようやく互角だった『デイスパイダー・リボーン』は2人になつたことで戦力差が一気に逆転する

その野太くなつた上半身の腕も、ガゼルトルネードの高速回転の前に削り取られ、自慢の胸の毒針も発射口を潰されて攻撃方法まで失う

何よりインペラーの隙をナイトが、ナイトの小さな隙をインペラーが互いに補うようにし、隙のないコンビネーションと合間のない連続的な攻撃が、圧倒的な実力差を更に広げる。

「すごい!なんて隙のない連撃なんだ」

「……スゴイ……」

遠くからその光景を見ていた木場や小猫はその圧倒的な戦い方に尊敬の念を向けていた。一誠とアーシアに関しては動きが速すぎて何が起きているのかすらわからないでいる。

「さて……そろそろ決めるか！」

そういつてナイトは翼召剣ダークバイザーにカードをベントインする。

【ファイナルベント】

『キキイイイイ!!』

翼召剣ダークバイザーから発せられた電子音声と共に現れたダークウイングがナイトの背なかに合体しマント状になる。同時に空中から現れた大型ランス、ウイングランサーを手に取り大きく飛翔する。それをぎこちなく追う『デイスパイダー・リポーン』だ

が本能的に危険を察知したのか。重い足取りで必死にミラーワールドへと逃げようとする。

「ところがぎつちよん！」

『ジエツジエアア!?!』

だがインペラーもそれを見逃すほど頭が緩いわけではない。遠心力を利用した反動で振り上げたガゼルスタップが一本また一本とその野太い足を削る。そこへ最高点に達しナイトが空中から急降下してくる

「ハアアアアアアア!!」

ナイトの“ファイナルベント”『飛翔斬（ひしようざん）』が容赦なく『デイスパイダー・リボーン』の体を串刺しにする。

『ギヤアアアアアアア!!』

最後に、断末魔を上げると同時に、ミラーモンスター『デイスパイダー・リボーン』は爆炎に包まれその存在を消滅させた。

「で？なんであなたが此処にいるのか？教えてもらえるのかしら」

「レイナーレを追っていた。偶然とはいえこの教会に見つけたからな、とりあえず始末しておこうと考えての事だ」

「本当なんです。ナイトさんは私を、レイナーレ様から助けてくれました。」

あの後、『デイスパイダー・リボーン』を潰した後、やってきたリアス達にナイトとインペラーは詰問されていた。

まあ地下室から出てきたんだ。仕方ないと言えば仕方ないが

（どうするんです？ 旦那の友達でしょ。始末するわけにはいかないですよね）

（ああ……いつらは繋がりを持っておいた方が情報が入るしな……）

しかし正直このまま帰すって顔してないよな……特にリアスは

「まあまあ部長……ここは一誠君たちを助けてくれたわけですし」

朱乃がまあまあとしかめっ面で睨めつけてくるリアスをなだめる。最早他の部員は

どうすればいいのか苦笑いを浮かべている。

一誠なんかはアーシアと一緒にのおろおろしてるし

「はあ・・・まあ今回私たちはほとんど何もしていない訳だし・・・今回だけは見逃してあげる」

言い方に棘はあるがまあ良いだろう

ふと気づかなかったが、そこに転がっている派手な女はどうするのか気になってしま  
う

「レイナーレはどうするんだ？」

「あの女墮天使はここで消すわ。それともあなたが持つて帰る？」

「冗談・・・あんな雑魚、餌にしかならんよ」

そのまま振り向かず、堂々とリアスの横をナイトとインペラーは通り過ぎ出口に向かう。

「あのっ！今回はアーシアを助けてくれて、ありがとうございました。」

「私も、これでまたイツセイさんとお話ができます。ありがとうございます」

一誠とアーシアの2人が思いきり頭を下げてくる。互いに本当にうれしかったのだらう

ふっと仮面で解らないが自然に笑みを浮かべてしまう

「兵藤一誠！……今回は偶々だ。偶々俺らがいたから助けられた。だがこんな偶然は2度も起きない。だから強くなれ。もう二度と奪われないように」

俺の様に……ならないように

「はっはい！俺…もっともっと強くなります！アジアや部長たちを守れるように！」

「イツセーさん」

「イツセー」

一誠は力強い言葉と共に左腕の赤く輝くドラゴンの籠手を前に突き出す。彼の言葉に思わずリアスやアーシアはほほを赤らめてしまっている。

「その言葉…忘れなよ！」

俺はそれだけ返すとインペラーと共にミラーワールドへ消えていった。



「あれ？アーシアそんな男物のコートなんて持っていたか？」

一誠はアーシアが何時ものシスターの格好ではなく、下着に男物のコートを着込んだ

姿に気づく

「これですか？このコートはナイトさんが目に毒だとかでかけてくれたんです」

リアスは考える。ナイトのコートは明らかに男物、と言う事は彼の正体は男性と言う事になる

「アーシア、ちょっとそのコート貸してもらってもいいかしら？」

「えー！あつー！はい・・・どうぞ」

アーシアは恐る恐る恥ずかしそうに頬を赤く染めながらコートを外し、リアスにそれを渡す。

と言う事はアーシアの格好は今

「イツセー先輩・・・あつち向いていてください」

「はっはいいいい！すみません！」

小猫ちゃんにばれた。つていうかその拳をこっちに向けないで！

一方のコートを受け取ったリアスはコートに何かないかと物色し、右のポケットからある物を見つける。

「これは……懐中時計？かしら？」

「ええ……そうにしか見えませんが」

出てきたのは古びた懐中時計、折り畳み式ではあるが内側からカチカチと音が鳴っていることから間違いはないだろう

恐る恐る時計のふたを開くリアス

「これは……写真？」

懐中時計のふたの裏にはある家族の写真が映し出されていた。  
母親と父親・・・そして小さな少年の写真が

しかも母親の容姿は

「これ・・・朱乃？」

小さい男の子を抱いてる母親。その容姿は朱乃そっくりだった。全員の視線が朱乃の方へと向くが当の本人も小さく口を開けて驚いていた。

「あらあら・・・でも私こんな男の人は知りませんし、私の母とも関係は無いと思います、ほら(´▽´)」

朱乃が指をさす方向。そこには写真の撮られた日付が記されていた。それも14年前の日付が

「確かに、14年前の日付では朱乃の記憶に残らない訳でもないし……やはり別人でしょうか」

わからない……としか答えようが無かった。しかしこれは明らかな手掛かりになる。

「この写真の家族は確実にナイトと関わりがあるわ……また改めて、時間があるときに調べてみましょう」

「……はい！」

こうして、リアスたちは2つの手がかりを見つけた

1つはナイトが男だと言う事

そして

2つ目は写真に映し出されていた家族が何らかの形で、ナイトと関係があるであろうことだった。

## 第6話 動き出す闇 渴望する愛

最初は些細な気づきだった。

ある下級悪魔の女性が数週間連絡が取れない、家にも戻っていない。

ただそれだけなら旅行に行っているだけという可能性などがある為相手にされなかった。

次は同じく下級悪魔、だが此方は1人ではない。3人構成の家族がこぞって姿を消した。

現場は当時食事の最中だったのか、作り立ての料理が数多く並べられていた。このため明らかにおかしい

しかし、貴族社会である悪魔たちの上層部は動かなかった。下級悪魔がいくら消えようとも、微動だにしない

それを知っての犯行か、各地で少しずつ、だが確実に行方不明者は増加していった。

そしてある場所でも

「ハアハアハアハア!!何なの！一体何なのあの化け物は!?!」

何かに追われているように必死に後ろを振り返りながら女性は逃げていく。

女性はかつて、冥界のある貴族のお屋敷に努めていたメイドだった。

だが数週間前から、そのお屋敷で何名かのメイドが行方不明になる。

主は、諸事情でそのメイドたちは辞めたと言っていたが、消えたメイドの中には自分と親しい間柄の女性もいた。

彼女からは諸事象でメイドを辞めるなんて一言も言われていなかった。更に消えていったメイドたちにはある共通点があった。

それは通常の下級悪魔に比べてやや魔力が高いという共通点だ。



そして何か気味が悪くなり、私はお屋敷を辞めて実家に戻ろうとした矢先だ。

自分の後ろから獣の雄叫びが聞こえたので振り返るとなにもいない。

だが獣の息遣いは徐々にだが確実に自分に近づいてくる。そして、怖くなり近くの鏡を見た時、鏡の中にシマウマの化け物が

「ハアハアハアハア!!もう少し…この先に行けばベルゼブブ様の」

魔王様の領地がある。それだけが必死に逃げる女性の唯一の望みだった。背後を確認しながら、必死に逃げる。ああ・足が痛い。先ほどから逃げ続けてどれくらい経つただろうか。ふと足を止めて背後を振り向くが何もいない。だが何かいる。止まってはいけないと自分の中の何か警告を発している。

早く!早く!この先の路地を抜ければもうすぐ!あそこまで走れば

そんな刹那の願いを胸に立ち止った足に鞭を打ち足を引きずりながらも走ろうとするが女性は気づいてしまった。

遅い時間だった為に人がいないのは解る。しかし、流石に走っていて人っ子一人いないのはおかしいと。今自分が走っているのは普段は明るい家々の光で照らし出されているような場所だ。なのにさつきから走っていてその光が見えない

しかし、前方からゆつくりとこちらに向かつて歩み寄ってくる影が女性の瞳に映る。思わず“助けて”と声を絞り出し継り付こうと限界の足で一步を踏み出す。

だが月光に映し出されたその陰に、私の表情は歌旅絶望してしまう。

『ブルルルル』

月光に映し出された影の正体、それは先ほどから自分を執拗に追いかけてきたシマウマの様な模様の化け物。

あつ・・・足が、動かない

体力の限界と千切れてしまった希望のせいか女性は地面にへたり込んでしまう。足

が動かない・体が動かない女性を他所にまるで獲物を追い詰める狩人のごとく恐怖を煽る様に目の前の化け物はゆっくりと、確実に近づいてくる

“ギャリン！ギャリン！”と怪物の腕から生えている鋭利な刃物が音を立ててこちらに迫ってくる。一步進むために自らの体は恐怖に包まれて動かなくなっていく

嫌だ・・・死にたくない！こんな所で・・・死にたくない！・・・誰か・・・誰か・・・助けて！

必死に声を震わせながら叫んだ。だが目の前の怪物は、その腕から生える角状の武器を上高く振り上げ、しかし一向に来ない苦しみから恐る恐る目を開けてみる。

振り上げられた刃が目と鼻の先数十センチの部分で止まっている。いや止めている

？

『ブルルルル』

目の前の化け物は何かを感じたように背後を向いていた。その化け物の視線の先、こちらからはうまく姿は見る事ができないが人が立っていた。

そして、薄つすらとだが街灯の光で目の前に立つのが男だと言う事だけわかる。

「おっと！これは、夜の散歩に外を出歩いてみれば面白いものに出会えた。」

『ブル!?ブルルル』

目の前通りの奥の方から現れた男は白衣を着た生粋の科学者のような恰好だった。何故こんな夜道にと疑問に思う前に私は必死にその男に助けを求めた。

「お願いします！助けて・・・助けてください」

「ん？なるほど・・・君はそこに居る女性を襲っているところだった。と言う所かな？」

『ヒーン！ブルルル!!』

「あ・・危ない！」

先ほどまでこちらを捕食対象としていた化け物は一転、突然現れた男に対象を変え  
る。思わず“逃げろ！”と女性は叫ぼうとするが恐怖で声が出ない

必死に声を上げようとする一方、怪物が目の前に迫ってくるというのに男は落ち着い  
ていた。寧ろ口角を上げて目を見開き喜んでいるようにも見える。

「おや？私の事を餌だと思っっているようだね。実に丁度いい！先ほど最終調整が終わり  
た私の新たな力。君で検証させてもらおうとしよう」

男はそう言いつつ、手に持っているそれを腰に当てる。腰からベルト状のものが広が  
り、まるで取り付けたそれがバツクルの様になる。

『ゲネシスドライバー』と呼ばれるそれは、この世界の技術ではない異世界の技術で作ら  
れている事を、もちろん女性は知らない

しかし、女性に襲い掛かっていた怪物の反応は違った。

『フシユルル!?!…ブルルル!?!』

男に襲い掛かろうとした自らを止めて、逆に逃げるように後ずさりし出したのだ。まるで、目の前の男を恐れるかの様に。

だが男はそんな怪物の様子などどうでもいいのか。変わらぬ態度で手に『レモン』の絵柄の錠前の様な物を取り出す。

『レモンエナジー』

錠前の鍵の部分が開かれた。そう思った女性の耳に、機械声で何か音声が発せられる。だが女性はその電子音声よりも、男の頭上に空間の裂け目から巨大なレモンの様な物に目が行ってしまう。

あれは何だ? レモン? 混乱しどうしたらいいのかわからず呆気に染まってしまふ。目の前の怪物も行き成り現れたそれに注目しているのか反応が先ほどから一切なく動かないでその様子を見ている。

『ロック・オン……ソーダ』

男が手に持つ『レモン』の錠前を腰のバックルのちようど中央の部分、窪みがある所にはめ込み、錠前を閉じて固定し右のレバーを中心に固定したレモンを絞る様に押し込む。

同時に空中に浮かんでいたなどの巨大なレモンのような物体が男の頭を飲み込むように落下すると同時に、巨大な物体が割れて、男の上半身を鎧のように覆い尽くす。

次の瞬間、女性の目には先ほどまで目を輝かせていた男は映って居なかった。

代わりに男が立っていた場所には、青と黒を基点としたライダースーツにレモンの皮で覆われた鎧を纏ったまるで戦士

『レモンエナジーアームズ』

その戦士、仮面ライダーデュークは右手に持った、弓と矢が一体となった己の武器、『ソニックアロー』を怪物に向ける。

「さて…そのレディーには夜風は少々肌に辛いだろう。早めに検証を終わらせるとし  
ようか」



一方そのころ、駒王学園に通う高校2年生、相川蓮は先日、この街に不法に侵入しとどまっていた堕天使を倒し、何時もの生活を過ごそうとしていた。

しかし、学校に来てみると同時に目の前で起こっているバカ騒ぎに頭を痛めることに。

理由は簡単、一誠の隣にいる金髪の清廉な女性アーシア・アルジェントと一緒に登校してきたのが始まりの原因だ。

「嘘だ！」

「バ、バカな……。イツセーが、金髪美少女と一つ屋根の下で？有り得ないいいい」

「いやあく悪いけど、もう君たちの間には越えられない壁があるって、あ！よう蓮！おはよつす」

一誠が俺に気づいて手を振ってくる。しかし正直に言おう。非常に関わりたくない。というより何故か関わったら終わりの様な気がした。俺は一誠を無視すると同時にその場で反転しこの場を立ち去ろうとする。

しかし……。遅かった。何故か一誠の近くで悶絶していた一誠の友人？である丸坊主とメガネのバカ面がこちらに目を光らせる。そしておもくそ指をさしてきた。

何か嫌な予感が

「なあああにいいいい!!!相川蓮とお前知り合いだったのか!!!」

「お前！知っているのかこいつは……。こいつはな!？」



「マジカアあ!!蓮どういうことだ応えろ!お前部活ではそんなそぶりを見せなかったのに!」

今度は一誠が目に血の涙を浮かべて鬼のような形相で蓮をにらみ胸ぐらをつかんでくる。しかし解釈しようにもどこからそんな話が出てきたのか、理解できない!

思わず立ち止まってしまい、覚えのない濡れ衣だ!と反論しようとするが

「相川君本当なの!?!」

「本当にお姉さまと付き合っているの!?!」

「私狙っていたのにいいいい!!」

次々と教室からさっきの叫び声を聞きつけた生徒が雪崩のように押し寄せてくる。

やばいと瞬時に判断した俺は回れ右をして、廊下を爆走ダッシュで逃げる。

一方で次々とさっきの発言を聞いた奴らが教室から押し寄せそのまま学校全体を巻き込んだ逃走劇を繰り広げる蓮

てか一体だれがそんな噂を流したんだ!! つうか冷静に判断している場合じゃない!

「蓮てめえ! 逃げるなああ!!」

「逃げるなって言って逃げねえ馬鹿はいねえだろうがあ!!」

何故か先ほどまでにこやかにあいさつをしてくれた一誠までが鬼の形相で追いか

てくる。

最早騒動が収まるまで逃げるしかなかった。

結局、その日。駒王学園の2年ほとんどの生徒から逃げ回り続け、その大暴動は先生や生徒会の面々が出てくるまで続いた。一誠を含める生徒は生徒会室では入りきらないほどの人数の為、体育館に移動させられソーナ生徒会長のありがたいお説教を永遠と聞き続けることとなる。

一方の俺も、解放されたとはいえ、既に完全な噂になってしまい。それを聞きつけた朱乃の他のファンに休み時間永遠と付け狙われることとなってしまった。

## ——お昼——

旧校舎の一角、オカルト研究部の部室には3人の男がそのソファ―にたむろって食事をとっていた。今では時の人となって学校中の生徒から追いかけられる羽目になった蓮は安住の地を求めて、ここオカルト研究部の部室に逃げ込んでいたのだ。

もちろんいつも昼を共にする剣やレオも一緒に

「それで今日の昼飯はこんな所で食っているわけか…良かったのか？部員でもない俺らを部室に居れて」

「部長の許可は取った。つか、まじでどっからあんな噂が」

昨日までそんな噂は流れていなかったのにと蓮は少々頭を捻らせるが、そこにレオが蓮の肩を優しくたたく

何故かその表情がこちらを憐れんでいるように見えるが

「ああ…それだが」僕の小猫ちゃん「たちが言っていたんだけど、お前…部活勧誘されたときに姫島先輩が教室まで来たんだろ。あの時の様子があまりにも親しかったから、噂になつたらしい」

レオの情報から簡単に噂の原因がわかってしまった。

しかし、それは誤解だ！あの時は思わず正体がばれたのかと警戒してしまっただけであつて親しげにしていた訳ではない

とそれを素直に話しても信じて貰えないだろうし

何でこんなことになるんだと思わず項垂れてしまう蓮に剣やレオは苦笑いを浮かべるしかなかった。



「あらあら・・・今日はお客さんが多いですわね」

「(っ)ほっ?!?!?!?!」

「あつ！どうもすいません。お部屋借りちやつてます。」

思わず口に含んでいたお茶を吹き出してしまう。

まさかのこのタイミングで噂の人が来るとは何というタイミング！というより予想すらできなかつた。

剣とレオは礼儀正しく笑みを浮かべて部屋に入ってきた朱乃に挨拶する。一方俯いたまま真っ赤になって顔を上げない、恥ずかしがっている蓮に二人は邪悪な笑みを浮かべる。

「うふふ…今お茶を入れますね」

朱乃は何時もの様にニコニコと笑みを浮かべた状態で何時もの様にお茶を入れ始める。そんな何時もの姿に思わずほっとしてしまふ。

だがそんな蓮の初心すぎる反応に更に邪悪さを増した笑みを浮かべ、その耳にささやく。

（蓮、こんなことになって言うのもあれだが・・・告白してしまったらどうだ？）

「んなつ!？」

思わず何を言っているのか解らないほど取り乱す蓮。あたふたとする表情を面白がる2人

(おいレオ見てみる。今のこいつチョー面白いぞ (笑))

(こらこら・・・からかうのは良くないよ剣 (笑))

特に見てケラケラと笑っている剣、レオも微笑を浮かべているだけだが体が小刻みに震えている。

そんな彼らを見て、蓮はやつと自分をからかって楽しんでいると理解する

・ ・ ・楽しんでやがる。こっちの反応を見て楽しんでやがると。

(で? どうなんだ?)

しつこい上に楽しそうな笑みを浮かべる。がこっちもやられっ放しには

(なるほど・・・答ええないのなら仕方ない。先輩に直接「ライダーチョップ!!」ぐほおお)

剣に渾身の一撃を叩きこみ、最悪の事態を回避する。蓮だが恥ずかしがりながら

(確かに：彼女は綺麗だし、：おつきいし、お茶もおいしい、母さんに似てっけど：)

(けど?)

蓮の煮え切らない態度にさらに迫及をしようとしますが、その表情が遠い何かを思い出している。何かを悲しんでいるような瞳になる。

(・・・・・・・・・・・・・・・・まず彼女は彼女自身の気持ちもあるから)

(・・・・・・・・・・・・・・・・そうか)

嘘だ。そう剣とレオは即座に感じた。伊達に長い間、一緒にいるわけではない。だが二人はそれ以上は踏み込めなかった。

蓮のその表情が、一瞬だが悲痛なものへと変化したのを2人は見逃さなかったから

「お待たせしました…あら？どうか…しましたか？」

暗い雰囲気を感じた朱乃だが、剣は食べかけの弁当箱のふたを無理に閉じ、それをかばんに突っ込み傍にいたレオの腕を掴む。

「あつあはははは…何でもないですよ。すみません、お茶を頂きたいのは山々なんです、俺とレオは失礼します」

「えっ!?僕はまだお茶を「良いから」…今度何かおごつてよ」

何か納得しない様子のレオを剣が引つ張っていきながら2人は部室を出ていく。

残った朱乃と蓮は二人ともしばらく沈黙を保っていたが、小さくため息をついた朱乃がやれやれといった感じで口を開く。

「今日は・・・大変でしたね。その・・・私と付き合っているとか」

「あつ！いやつ！！全然誤解ですし・・・って、もちろん嫌っていう訳ではありませんよ！でも」

人の気持ちを無視したこんな噂だ。あなただつて嫌だろう。そう思っていた。

「私は・・・嫌ではありませんでしたわ」

“ えっ！ ” と思わず勢いよく顔を上げる。いま彼女が言ったことが蓮には信じられ無かった。聞き間違えだと、思った。

だけど朱乃も何時ものニコニコの笑顔とは違う表情、頬を赤らめて恥ずかしそうに上目使いでこちらを見つめていた。

“ ドクン ”

俺の心臓が思わず高鳴ってしまふ。唯でさえ、その顔が自分が大好きだった人に近いのに、更にはそんな

「ねえ……あなたは、嫌でしたか？私と付き合つてると言われるのは」

何を考えているのか、彼女は自分が座っているソファから反対側のソファに、つまり……俺の隣に座る。

“ドクン……ドクン”

「あの……姫島先輩」

「嫌……2人の時は、朱乃って呼んで……」

“ドクン……ドクン”

朱乃は徐々に近づき、遂にはその豊満な胸が腕をそつと挟み込み。その吐息が耳に

正直心臓の鼓動が止まらない。このままでは本能に身を任せて襲ってしまいかもしれない

でも……俺は違う

「姫島先輩……すみません。……俺は……駄目なんです」

「何で……? 私では嫌?」

違う……違うんだ。そうではないあなたに魅力が無いわけではない。寧ろ付き合えればどれ程嬉しいか

でも……駄目なんだ

「俺は……誰かを愛してはいけません」



「えっ!？」

「俺は……失礼します。ごめんなさい」

蓮は逃げるように朱乃から遠ざかって行く。走り出す中で蓮は改めて思った。

俺は人を愛せない。愛してはいけない。人並みの幸せを望んではいけないんだ。

俺の手は……多くの人の血で染まっているのだから……と

朱乃は蓮が出ていった部室の入り口をただ見つめていた。

自分でも何をしているんだと今更ながらに思う行動だった。

ありもしない噂に踊らされしかし、チャンスと言わんばかりに私は彼に迫ってしまっ  
た。

初めて会った時から、彼の私を見る目が他の部員とは違うものに私は気づいてしまっ  
た。

故に最初は少し気にかける程度だった。かわいい後輩。結局はそんな立ち位置だっ  
た。

でも……あのほぐれ悪魔討伐の日から私の彼に対する意識が徐々に変わっていつ  
た。

彼のあの最後の寝言

『何で…何でお母さんを助けてくれなかったんだよ……父さん』

言葉は違う。なれど、その声に込められた感情は幼いころの自分を重ねているように

見えた。

その後、起きた彼に私は無視することはできずに聞いてしまった。そして彼は悲しそうにこう言ったのだ。

『母は、俺が幼い時に死にました』

その時確信したのだ。何故必要にこの子の事が気になるのかが

自分と似ているのだ。母は死に、父と呼ばれた男には裏切られた私と

だから、この機会を気にもつと彼の事を知ろうと迫った。だけど断られた。振られたのだ。

けど、出ていく際の彼の言葉

『俺は……誰かを愛してはいけません』

これがどんな思いで語られたかは私には解らない

解らないが・・・ただその時の表情が、彼のその表情が・・・私には辛そうに見えた。

## 第7話 動き出す闇・忠実なる最強のしもべ

— 夜 —

朱乃とのあらぬ噂で散々な1日を過ごした蓮だったが、その後、予想外にも部室で本人に告白されてしまう

しかし、蓮は朱乃の告白を拒絶した。

放課後には部活には出ずに、黙って帰ることを選ぶ。部活に出てしまえば必ず彼女と顔を合わせることになる。

行きたくは無かった。故に丁度良かったのかもしれない。

変に悩む蓮に、一本の電話がかかってきたのだ。コールナンバーを確認した瞬間、表情を変えてその電話に出る。

正直此方の用事も行きたくは無い。無いが……

「……わかった。直ぐに向う……少し待ってろ」

蓮は駒王学園の制服のまま、店の手伝いをしていた佐野を強引に連れ出し、ある場所へ向かう。

駒王町から電車で8本ほどの所にある駅から歩いて10分。たどり着いた場所は市街地のとある廃ビルだった。俺はそのままロビーに顔を出すと、すぐに屋上へ案内された。

『お待ちしておりました。こちらへどうぞ』

受付嬢に案内されるがまま、蓮と佐野は屋上に案内された。屋上は緑化庭園となっており、様々な花や木が植えられ、まるで楽園のような空間だった。

その楽園の中心、テーブルの上にはティーカップなどの茶器が、そしてその椅子には

優雅にお茶を飲んでゐる男性、それこそが蓮をここまで呼び出した張本人

「ん〜…よく来たね。蓮」

「…とりあえず用件だけ話せ。アジユカ」

蓮を呼び出した者、それは冥界の魔王にして蓮の協力者、アジユカ・ベルゼブブだった。

席に座るなり、テーブルのティーカップに注がれたハーブティーを一気に飲み干す。いささかマナーにかける行為だが目の前の男にそんな気遣いは必要ない

しかしその体から、湧き上がるオーラの様な殺気に、目を細めるアジユカ

「今日はやけに殺気立っているな…何かあったのか？」

「うるさい！イラついているんだ！とつとと用件だけ話せ！」



『落ち着いて蓮』

怒鳴り付けるような叫びを上げる蓮を宥める様にシエーレは優しい声をかける。

自分でも八つ当たりだと言う事は解っているのだ・・だがそれでもやり場のない感情を蓮は抑えることができないでいる。

ここら辺はまだ年相応の子供なのだ。周りの大人は改めて思う

「・・えーつと、すみませんね。旦那なんか学校から帰って来るなりこんな調子で」

「気にしなくていい佐野 満、急に呼び出したこちらにも問題がある。」

それにと付け加えるアジユカの表情が真面目なものに変わるのを蓮も佐野も感じる。

「蓮、今回態々来てもらったのは、少し面倒な事態が起こってな」

アジユカの口からでた言葉、面倒な事態。

大抵この男からでる面倒なこと、それは実験の後始末がどうのこうのと言う事だが今

回のは雰囲気が違う。

だが次の瞬間、アジユカの口から語られた言葉は、蓮のイライラを吹き飛ばしてしま  
う

「実は先日、冥界で凌馬がミラーモンスターと遭遇した。」

「なんだと!? 奴らが冥界に現れたのか!」

蓮は目を見開いて驚いた。

予想はしていない訳では無かった。現に『デイスパイダー』が現れたことを考えても  
いずれ冥界にその脅威を伸ばすことは予想できた。しかしまさかこんなに早く現れる  
とは思っていなかったのだ。

奴らがこつちに現れてまだ1カ月も経っていないんだぞ!

「その驚きようは流石に予想していなかったようだな・・・話をつづけるぞ。モンスター  
はどうやら下級悪魔の女性を襲っているところだったようだな、偶々通りかかった凌馬

が倒したらしい」

「モンスターの特徴は」

「シマウマの様な模様の2足歩行と言っていたな」

蓮は告げられた特徴からそのモンスターが、嘗て、ターゲットを細切れにして捕食していたミラーモンスターゼブラスカルだと言う事に一瞬で理解する。しかし奴は過去に自分が倒したと考えていたが、やはりミラーモンスターは復活し始めている。

「で……ここからなんだが、襲われていた彼女を保護し、他の物が話を聞いた所、彼女が働いていた屋敷では既に数名、被害者が出ていると言っていた。」

「恐らく、ゼブラスカルだろう。しかし倒したのなら、もう問題はないだろう。」

それこそ通信で会話してもいいような内容だが

「問題はその後だ、部下に他の地域にも似たような事例が無いか調べてもらったところ」  
まさか!?

「あつたのか?」

アジユカはため息をふとつきながら頷いた。

「ああ・・しかも複数な・・しかも、モンスターが現れた場所は全て、フェニックス領の内から一定の距離だということが解った」

「フェニックス? フェニックスってあのおとぎ話に出てくるような火の鳥の事ですか?」

「そうだな・・確かに能力的にはそのフェニックスに近い。しかし、君が言っているフェニックスは恐らく幻獣の方だろう。冥界では、幻獣のほうをフェネックス、不死身の再生能力をもちあらゆるものを焼き尽くす炎の力を操る悪魔の事をフェニックスと呼ん

「でいるんだよ」

「へえくなんかすごいすね．．」

「そうだ．．．たしか昔、アジュカと接触した際に一通り調べたことがある。フェニックスの涙と呼ばれる回復アイテムで有名な不死の一族だったな。」

「でだ．．．そのフェニックス家が関わっている？アジュカはそう睨んでいるんだな」  
アジュカは黙って俺の言葉に頷く。

同時に何故、アジュカが俺や佐野を直接呼び出したのか、これで合点がいった。

フェニックス家の誰かが裏で、ミラーモンスターと、もしくはそれを操っている存在と接触していると。しかし、アジュカは魔王。証拠もないのに動くことはできない。

できて、ミラーモンスターの邪魔は入るだろうから、相当な実力者でなければ対処

できない。

故に・・・俺たちライダーか

「今回の依頼、君たちライダーにはフェニックス領に侵入して、誰が裏でミラーモンスターを操っているか・・・それを確かめてもらいたい・・・のだが」

アジュカは若干声のトーンを落とす。何時もなら無理やりにも「やれ」と言い切るのに

「どうした・・・何か懸念が他にもあるのか？」

「ん？・・・そうか。君は聞いていないのか。今回の目的のフェニックス家の3男、ライザー・フェニックスはリアス・グレモリーの婚約者だ」

その後、アジユカから得たフェニックス家の情報を手に対策を打つことになった。

蓮は自分の部屋に戻るなり、預かった資料に目を通す。同時にこの依頼をどうするかと頭を回していた。

（事態は悪い方向へ徐々に進んでいる。早いうちに動かなければ被害はより大きくなることは目に見えてわかる。）

しかし、リアスの婚約の件も無視することはできない。

判断を間違えれば・・・最悪は・・・いやっ！考えるな！

『ねえ蓮・・・早く寝ないと明日の学校に差障るわよ』

シエーラの声が心配そうに蓮に語り掛ける。

「学校なんて正直如何でもいい。問題はアジュカの依頼、冥界に誰を送るかと言う事だ」

『そんなの、佐野で良いんじゃないの？彼、復活して私の力でパワーアップしてあるし、問題はないと思うけど？』

シエーレも”自分の力を信用できないの”と言ってくるがそれに対し”それは違う



”と蓮は答える。

確かにシェーレの力で佐野には俺の力の一部を流すことでパワーアップはしているし、それこそミラーモンスター程度には相性が悪くても遅れる心配は無いだろうと考えていた。

しかし、状況と言うのは思った以上に複雑に変化する。俺はそれを2年まえの戦いで学んだ。

「……念には念を入れて、せめてもう一人は行かせたい」

佐野……インペラーの契約モンスターは“ギガゼール”

その最大の特徴は他のミラーモンスターと意思疎通することで集団で行動する点。今回の様な情報収集などには確かに優位だが……如何せん単体の力が弱い

故にミラーモンスター以外の敵が複数潜んでいた場合……可能性は低いですが、考え

られない訳でもない。

『だけど蓮……あなたの記憶を除いた限り、残るライダーの中で協力して動く、まして、大人しくこちらの言う事を聞くライダーがいるかしら？』

シエーレの指摘は正しい、だからこそ悩んでいるんだ。

確かに強力な戦闘能力を持ったライダーは沢山いる。しかし……しかし問題は、シエーラが言ったように大人しくこちらの言う事を聞くか聞かないかだ。

ましてや、協力する？以ての外だ

『除いた限りでは……城戸 真司（きど しんじ）、手塚 海之（てづか みゆき）が唯一の選択肢になるが』

「駄目だ!!……………それだけは……駄目だ」

思わず声を荒げてしまい同時に、表情が何かに怯えるように強張る。

シエーレも、そして、蘇った佐野も不思議に思っていた。何故、城戸 真司を、手塚海之を生き返らせないのかと。

佐野やシエーラも一度、佐野を喫茶店ハカランダ、つまり家に連れてきた夜にふと佐野は聞いたのだ。

“何故、蘇らせたのが城戸 真司では無く、自分だったのかと”

答えは……今と同じ。そして、蓮は言ったのだ。

“手塚や城戸には、もう戦って欲しくは無いと”

しかし蓮も伊達に2年まえの戦いを生き残った訳では無い。故に解ってしまう。この件に対応できるのはライアか龍騎だけだと。

「だが……手塚や城戸以外に、佐野と協力してこの任務を任せられる奴は……いない」

上位の強さを持ち、更にある程度こちらの言う事を正確に聞き、実行するライダーは

だがその時、ハツと目を見開き考える。」

(待てよ・・・上位の強さ、更に正確に指示に従う・・・居るじゃないか！最強の力を持ち、主に正確に従うライダーが！)

懐から四角いカードデッキを取り出す。インペラーと同じ茶色、しかしそのデッキが纏うオーラはインペラーの比ではなかった。

だがこいつなら・・・こいつならば

懐から取り出したカードデッキを部屋の床に置く。それは佐野を復活させた時と同じ工程

“発動”

蓮は神セイクリッド・ギア器、深淵と永劫の鍵（アビシヤルエタニティー）を発動し、その右腕に漆黒のオーラを纏わせる

【Revive】

漆黒の輝きは右腕の甲、不気味に動く目から床のカードデッキに向かって注がれる。

しかし今回は、前回の様に蓮は苦悶の表情を浮かべない。今使っている生命エネルギーはあの教会で墮天使の一人、ミッテルトから根こそぎ奪い取った生命エネルギーを使っているから。

カードデッキから爆発的に広がった闇色の閃光は次第にその勢いを弱めていく。

閃光が完全に消える。しかし、佐野の時とは違いカードデッキが置かれた傍には人の子一人いなかった。

『失敗!? 確かにエネルギーは照射され、明らかに生命エネルギーのストック残量も減つ

ているのに！」

自分の能力が初めて不発に終わったことに焦るシエーラ

だが俺は失敗したとは微塵も思っていないかった。寧ろ成功したと思っていた。

だつてさ……ほら

キイイイイイイン！キイイイイイイイン！

『この音は……まさか敵か!？』

「落ち着け……敵じゃない。それに神セイフリッド・キア器はちちゃんと発動している。」

だつて……ほら、そこにちゃんといるじゃないか

『ほう．．．私を蘇らせるとは．．．今は、お前が我が主と考えても良いのだな．．．』  
相川蓮

そいつはそこにいた。ただし、鏡の内側の世界に

圧倒的な存在感がその体から、オーラとして溢れ出ている。シエーラも俺が蘇らせたそいつの存在感到圧倒されて言葉を失っている。正直俺も気を張っていないと飲み込まれそうなほどだ。

だがそんな存在が俺を主と認めている。思わず笑みが止まらない。

「ああ．．．俺を主と認識しているのか。そいつは好都合だ．．．．記憶の共有は済んでいるか？」

シエーラに俺の記憶を渡すように言う。もちろん必要な所だけだが

『．．．．状況を確認した。私はこれから冥界に赴き、フェニックス家とミラーモンスターの関わりを探せば良いのだな』



「流石だ。だが出発は朝まで待て……佐野と一緒に行かせる。お前はあくまでフォローをしろ」

『それが主の命なら。私は全ての力をもって、望むまでだ』

そいつはまるで機械の様に、人形のようにただ冷静にこちらの命令に従う。こいつならば、俺の望む結果を佐野と一緒に持つてくるだろう

なあ……最強のライダー

「仮面ライダーオーディンよ」

——冥界のとある豪邸——

暗闇に閉ざされる部屋。明かりもつけずに漆黒の闇が辺り包む

そんな部屋にそいつらはいた。闇に蠢くように、しかし鏡の世界で呻き声を、怨嗟の叫びを上げている異形の存在

「どうやらあなたの作戦は順調なようね」

ええ・・・フェニックスとしての彼の能力は厄介ですが、頭の方は扱いやすくて助かりますよ

人の形をしているも異形の存在を気にせず不気味な笑みを浮かべる。

しかし、と一人が言葉を濁す。

「何かイレギュラー？」

いえ・・・この間、この家のメイドに少し勘ぐられましたね。危険の芽を積んでおこうと“手下”を向かわせてのですが・・・随分前から音信不通でしてね

ただ食欲旺盛な奴ですから・・・問題は無いと思いますよ

「ならばいいけど・・・忘れ無い事ね。あなたに失敗は許されないわ」

わかっていますよ

あの少年に復讐させてくれる機会を与えてくれた。あなたたちの期待には応えて見

せ  
ま  
す  
よ

ねえ・・・君は今どこで何をしているんでしょうね

ねえ・・・相川君

## 第8話 現れたフェニックス

アジュカ・ベルゼブブからの依頼

それは冥界で密かに広がりつつあったミラーモンスターが原因とされる行方不明事件の調査だった。

フェニックス家が納める領地から一定以上で起こりつつあることから、アジュカはフェニックス家の誰かがミラーモンスターまたはそれを操る者と関わりがあるのではと睨んでいた。

そして、同時にリアスの婚約者が件のフェニックス家に連なるものと言う事で事態は複雑に

そこで蓮は、かつて戦った最強のライダー、仮面ライダーオーデインを復活させ手駒とし佐野 満と共に今朝、アジュカを通じて冥界に送り出した。

こつちはこつちでできることを始めようとした時だった。学園の校門でその魔力に気づいたのは

俺だけではない。傍にいた剣、女の子を口説いていたレオも感じ取った魔力に警戒を崩さない

「蓮・・・気づいたか？」

「ああ・・・この魔力。隠してはいる様子だが・・・何者だ？」

学園の中、それも本校舎からではなく、オカルト研究部がある旧校舎からその魔力は

発せられている。

正直ここまで近づかなければ気づかないほど巧妙に隠された魔力

リアスでも、ソーナでも、その両眷属でもない。実力的には彼女らを遥かに凌いでいる魔力が旧校舎の方から発せられている。室でいえばアジユカと同等か

「この魔力の高さ。魔王ほどではないにしろ。これは……どうする蓮?」

剣はバックの中に手を突っ込み。レオは懐から“特注の携帯”を取り出している。

2人とも驚くほど警戒を強めている。かく言う俺も右手が懐のカードデッキを既につかんでいた。

それほどの存在が向うの方にいると言う事だ。

だが蓮は警戒をそのままに現状を、冷静に分析し、即座に判断する。そして2人にだ



け聞こえるような小声で話す。

「魔力を抑え、気配も俺たちレベルで、やっとここで気づくほどに抑えている……つまり戦闘が目的ではないな」

だとすれば、方向から考えてみてもリアスの関係者である可能性が高い……

だが相手が解らない以上、油断はできない。それにこのまま3人で近づけば、部員である俺は兎も角、2人は確実に怪しまれる。

ならこの場での最適な選択肢は

「俺が確かめよう……剣、レオ、お前たちは授業を受けていてくれ。何かあれば連絡をよこす」

「いいのか？」

劍の心配にコクリと頷く。

「俺ら3人で行ったら怪しまれる。だが俺なら部員だ。何とでもいい訳は通る。」

「確かに・・・OK。この場は蓮に任せよう。劍、僕らは教室に行こう」

「わかった。気を抜くなよ蓮」

そういつて2人は俺の背中を1回ずつ叩き、本校舎の方へと走っていく

2人の姿が見えなくなると蓮は、旧校舎の方へと重い足取りで歩みを進める。

懐のカードデッキに手を添えて何時でも取り出せるように

そして、近付く度により一層に強くなる気配に警戒を続けながらも部室の前の扉の前に立つ。

やはり……というか何というか魔力の気配は確かにこの部屋から発せられているし、中にリアスや他の眷属の気配もある。

“ トントン ”

「失礼します……っ」

室内には、部長であるリアスを含めた、朱乃、小猫、木場、一誠、そして新しく眷属に加わっていたアーシアの他にもう一人

リアスの傍に佇む、銀髪の女性、メイド服を着ていることからリアスの家の者だと予想はついたが

『魔力の質が他とは段違い．．．この女．．．一体何者？』

そんなことは俺が聞きたい。だが目の前のメイドからはここにいるどの悪魔よりも強力な魔力を感じる。

アジユカと同等、また及ばないまでも、身振りで最上級クラスの悪魔だと言う事だけは判断できる。

「お嬢様．．．彼は何者ですか？」

「彼は部員よ、グレイファイア。ほら、この間、お兄様セイクリッド・ギアにお願いした神器の所有者よ」

「ああ．．．では彼が．．．」

何か言いたそうな表情だが、目の前のメイドは此方に頭を下げ

「初めまして。私は、グレモリー家に仕える者です。グレイファイアと申します。以後、お見知りおきを」

「こちらこそ・・・2年の相川蓮です。悪魔ではありませんが、リアス部長にはお世話になっていきます。」

丁寧なあいさつをされたので、一応それなりのあいさつはする。

だがお互いに、警戒は解かない。こちらの事を説明できれば警戒は解かれるだろうけど、そう事は簡単にはいかないだろう。

しかし・・・グレイファイア・・・さんが居るとはいえ。部屋の空気が重い  
小猫は何時もいるソファアではなく部屋の隅で椅子に静かに座っているだけ  
朱乃に至っては・・・まあ昨日の今日だから顔を見ずらいため省略

一番はリアス、苛立っているのが魔力から読み取れるが・・・一体

「全員そろったわね。では、部活をする前に少し話があるの……実はね」

そうリアスが口を開いた瞬間だった。床に描かれた魔法陣が光り出す。その魔法陣に描かれた紋様が変化した時には俺はすでに動いていた。

一誠とアーシアの前に立ちセイクリッド・ギア神器を発動させる。

室内を眩い光が覆い、魔法陣から人影が姿を現すと同時に炎が巻き起こり、強烈な熱気がこちらに襲い掛かる。

だが同時に、右腕を覆っていた神セイクリッド・ギア器の黒い瘴気を盾にし、熱風が後ろに流れないようにする。

「蓮……お前……どうして」

「良いから。構えて……来るよ」

一誠が後ろで熱風から自分たちを守ってくれたお礼を言うが、蓮は目の前に現れた人影をじーっと睨む。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

炎を薙ぎ払い現れた赤いスーツを着た20代前半のホスト崩れの男、アジュカの言っていた情報と一致する。

ライザー・フェニックスというフェニックス家の三男……つまりは

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

リアスの婚約者にして、今回の依頼におけるターゲットの1人だった。

「いい加減にしてちょうだい！ライザー！以前にも言ったはずよ！私はあなたとは結婚しないわ！」

「ああ、それは以前に聞いたよ。だがなりアス、君のお家事情だつて困窮しているんじゃないのか？純潔同士の、それも上級悪魔そ新生児が貴重なことを君だつて知っているだろう？」

先ほどから嫌がるリアスに無理になら馴しく接しようとするチャラ男、ライザーフェニックス

正直、一誠辺りは飛び出して、ぶん殴りかかりそうなくらい頭に来ている様子だが、同時に、いや寧ろ、一誠と話に熱中しているリアス以外の眷属はもう一方の方に意識が向けざるを得なかった。

その一方である蓮だが



「……………(イライラ)」

『蓮、気持ちは解るけど少しは殺気を抑えた方が良いわよ。ほら、後ろのアーシアって名前の女の子も怯えているわよ』

セイクリッド・ギア  
神 器を通してのシエーラのありがたい忠告だったが、蓮はイライラを隠そうしない。

本人も好きでイライラしている訳ではない。アーシアにだって蓮自身、この姿で会うのは初めてなのだから、あまり怖い印象を持たれて嫌われたくもない。

だけどそれを抜きにしたってこのイライラは抑えられなかった。

目の前の男、今回のターゲットでもある男、ライザー・フェニックスの情報は前もって手に入れていた。

眷属は全員女性、趣味は美しい女性をコレクション感覚で集めるはつきり言って屑以

下、親から生まれつき与えられている地位と能力のおかげで負けなし。努力もしたことが無いとか

資料を読めば読めば読むほどイラついてくる。目の前に存在しているだけでも吐き気がしてくる。

だがそんな蓮の事など眼中にもないと言っているように、リアスとライザーの言い争いは進行する。

「私は家を潰さないわ。婿養子だつてちゃんと迎え入れるつもりよ」

リアスの言葉を聞き、満面の笑みを一瞬浮かべるライザー。

だがリアスはそんなライザーを「キリッ！」と睨むと

「でもあなたとは結婚しないわ、ライザー。私は私が良いと思った人と一緒になる。それくらいは権利は誰だつてあるはずよ！」

リアスの訣別の一言に、一瞬、気持ちが一瞬となつていく蓮

しかし一方で婚約を破棄されたライザーはみるみると機嫌を悪くし、目元に苛立ちが見えた。

「…俺もな、リアス。フェニックス家の看板を背負った悪魔なんだよ。この名前にも泥を塗る訳にもいかないしな。というより、君をこんなゴミ屑が集まったような人間の世に置いておきたくも無いんだよ！」

ライザーの周囲に炎が駆け巡り、室内に火の粉が鱗粉のように舞い散る。

「俺はキミの下僕をすべて燃やし尽くしてでもキミを冥界に連れて帰るぞ」

殺気と敵意が部屋全体に広がる。一誠は初めて受ける上級悪魔からの殺気に体中を震わせ、アーシアも一誠の腕にしがみつく

黙って様子を見ていたグレイファイアもため息をつきつつも、その諍いを止めようと動こうとした時

“ シュオオオオオ ”

漆黒の瘴気が部屋に充満したライザーの炎を喰らうかのように纏わりつき消していった。

「「「えっ!?!」」」

「「これは!?!」」

「なっ!?!俺の・・・俺の炎が消えていくだど!?!」

グレイファイアとライザーの表情が驚愕に染まり、それ以外の者は何が起こったのか思わず呆気にとられる。

暫らくすると、部屋に充満していた炎が消えて、代わりに充満していた漆黒の瘴気が一か所に吸い込まれていく。

漆黒の瘴気を纏った異形の腕、セアフリッド・ギア 神器 深淵と永劫の鍵（アビシャルエタニティー）を発動させイライラした感情を隠そうともしていない蓮がライザーの炎を消したのだ。

そこで初めてこの場に相応しくない者がいることに気づくライザー

その表情は今まで驚愕に包まれていたが、一気に憤怒の表情へと変貌する。

「きつ貴様あああ!! 何処から紛れ込んだかわからんが、この俺の炎を!! 人間風情があああ」

「ツ?! いけないわ!! 逃げて蓮!」

全力の殺気と共に、紅蓮の炎が俺に向かって放たれる。朱乃の悲鳴が俺に向かって放たれるが俺は単純に右腕、深淵と永劫の鍵（アビシャルエタニティー）を突き出す。

【Drain】

右腕から響く女性の声と同時に目の前に迫った紅蓮の炎が右手の甲、その瞳に吸い込まれるように、次第に消える。

「どうやら、ライザー様の炎を自らのエネルギーに変換した。と言う事でしょうか？ 相川様」

全員が息をのんでいる中で、冷静にこの神セイクリッド・ギアの能力を分析するグレイファイア

「その様で……」

だが実際に俺も、まさか……生物の生命だけでなく、こんなことまで出来るとは思ってもよらなかったが

『まあ蓮ならあのくらいの炎片腕で消せたでしょうけど』

だが、俺が何もしなくてもあのメイド、グレイファイアが消していただろうか？

正直言つて笑うしかなかった。その秘めている魔力は尚更、実力も相当に高いな

「何を笑っている!?!人間がああ!!」

口元がニヤける。だが俺の表情がどうやら、ライザーの癪に障つたようだが・・・別にお前の事を笑つたつもりは無いんだが。

「ライザー様!いい加減になさいませ。これ以上やるのでしたら、私も黙つて見ている訳にはいきません」

だがそこへグレイフィアが蓮とライザーの間に入る。全力では無いとはいえ俺には、その風貌からは威厳と迫力あるオーラが見える。

「貴方も・・・その神セイクリッド・ギアの能力、報告には受けていませんが?」

「別に・・・隠していた訳ではありませんよ。偶々です。偶々うまく発動しただけですよ」

能力自体は別に解っていないなかったわけではないがな

だが蓮としても、このくだらない言い争いに飽き飽きしてきた。

早い所終わらせて欲しい・・・こんな茶番は

「レン！・・・大丈夫？ごめんなさいね、こんなことに巻き込んでしまって」

別にそれはいいが体をペチペチ障らないでも、らえるか？俺は珍獣ではないんだが

・・・（ニコニコ）

それに・・・離れて貰えないと、あなたの女王からの視線が怖い

「おいリアス！何なんだソイツは!?何故人間がこの場所にいるんだ!!」



「彼はうちの部員よ！悪魔ではないけど、セイクリッド・ギア神器を宿しているから、私の所で保護してやるのよ」

「っぷ！保護って」

「……とりあえず一誠の奴は後で軽く締めておくとしてリアスよ、保護って……俺は天然記念物かなにかか？」

「保護だって？リアス。君は何を考えているんだ？人間たった一人、無理やりにも眷属にしてしまえばいいだろう？」

「だから！貴方のそういうところも嫌なのよライザー！無理やり眷属にするなんて」

今度はリアスの体を紅い魔力のオーラが薄く発し始める。互いに譲れない主張の為、互いの魔力が干渉し合い、再び空気が張り詰める

「いい加減にしてください。お嬢様、ご自身の意思を押し通すのならば、ライザー様との

『レーティングゲーム』にて決着をつけたらと、旦那様やサーゼクス様の御意志です。』  
グレイファイアの言葉に更に眉間に青筋を浮かべ、リアスは嘆息気味話す。

「……そう、お父様もお兄様も……どこまで私の生き方を弄れば気が済むのかしら。でもいいわ。丁度それならお父様もお兄様も納得するでしょうし。ゲームで決着をつけましょう、ライザー」

リアスの挑戦的な態度に、ライザーはもはや勝利を確信したように嘲笑を浮かべ

「別に俺はいいが……ククク。なあ、リアス。まさか、ここに居る面子が君の下僕なのか？」

「そうよ。たださつき言ったようにレン……彼だけは私の下僕じゃないわ」

リアスの返答に心底おかしそうに笑いだすライザー

一誠はバカにしたようなその笑いに殴りかかろうとするが、蓮に手で遮られる

「ハツハツハ！これじゃ話にならないな！俺の可愛い下僕に対抗できそうなのは、キミの『女王』である『雷の巫女』位じゃないか」

そう言いながら、ライザーが指を鳴らすと、再びライザーが現れた時と同様の魔法陣が出現し中から人影が出現してくる。

数にして15人。確か眷属にできる最大の人数だったと思うが

それにしても情報通り女性ばかりだった。俺は1人1人に品定めするように実力を測るが

正直言つて蓮は内心ため息をついていた。

（はあく・・勿体ないな）

『何が勿体ないの？』

解らないか・・・見れば見るほどいい素材じゃないか。だからこそ勿体ない。あの男の眷属ではその素材をドブに捨てているようなものだ。

「おいっ！おい聞いているのか！そこの人間!!」

ライザーがこっちに指をさし怒鳴りつけてくる。しまった・・・考え事をしていて聞いていなかった。

まあ・・・聞く必要はないだろうが、というより正直付かれてきたんだが

「あん？・・・何？正直もう疲れたから帰って寝たいんだけど」

「きつ貴様ああ!!ミラ!!殺せ!!」

「はい。ライザー様。恨みが無いが！覚悟!!」

蓮のバカにしているかのような態度に憤慨し、下僕の1人に命令する。小柄で堂々とした女の子が長い棒を構えて一直線に踏み込んでくる。

悪魔にしては中々の速度で踏み込んでくる。この子も筋はいいと感じたが、はつきり言って遅い。

(さて・・・どうするか?ここで倒すのは簡単だが。そうなると後々面倒だし・・・しようがない)

「かはっ・・・い・・・痛い」

正直痛いのは嫌だがと考えながらその棒を強化しておいた腹で受け、勢い付けて後ろに飛びのき壁にぶつかり、わざとらしく気絶振りしておく。

「蓮!てめえ!蓮は悪魔じゃねえのに・・・何てことするんだ!」

「蓮、蓮大丈夫!? アーシアちゃん・彼をお願いしますわ」

「はっはい・・・しつかりしてください。いま直しますから」

一誠が俺の為に怒ってくれているのが聞こえるし。俺の傍には揺さぶりながら心配そうに声をかけてくれる朱乃の声が、どうやらお腹にあたる暖かい光はアーシアの  
セイクリッド・ギア  
神 器の光か

「はっはっは！ 所詮は人間！ 屑でしかない存在が、純潔の悪魔である俺に敵うわけないんだよ！ 大人しく身分相応に地べたに這いつくばってろ！ リアス、言った通りゲームは10日後だ。次はゲームで会おう」

そんな捨て台詞を吐きながら、ライザーは下僕の女の子たちと共に魔法陣の中へ消えていった。

ライザーが消えた後はもちろん部活は中止。俺もアーシアのおかげで痛みが引いた。あの後簡単に自己紹介をして俺は部室を後にした。

そして、ただ黙って屋上までやってきた蓮。

「先ほどから付いて来ている事は解っている。出てきたらどうだ？」

扉に向けて放たれる声。しばらく見つめていると観念したかのように彼女は出てきた。

「……気配は消していたはずですが……やはり気づきますか」

扉の陰から出てきた人、それは先ほど、ライザーの後を追うように魔法陣で消えていったグレイファイアだった。

どうやらあの魔法陣はダミーでずっと気配を消して隠れていたようだがな

「では単刀直入にお聞きします。あなたは何者ですか？」

先ほどと同じ質問、しかし彼女の目は、部室の時とは違い、完全にこちらを警戒しているのだ。

さて……どうしたものか

「駒王学園2年、相川蓮。セイクリッド・ギア 神器を宿した人間……では納得しないよな」

「当り前です。あなたの体から感じる力の波動。かなり巧妙に隠されていますが、人が宿す力の大きさではありませんし」

何よりとグレイフィアは口にした瞬間、蓮の目の前から消えたと思っただけの瞬間  
「シッ！」

背後から鋭い声と共に手刀が首の根元に向かって容赦なく振り下ろされる。俺は余



裕の表情でその手刀を交わすと同時にカウンターで右腕を放つ

“パンツ”

空気が破裂したような音が屋上で鳴り響く

「やはり・・・あなたの立ち振る舞いは、とてもでは言えませんが学生の範疇。いえ、人の動きの範疇を超えています。・・・何者ですか。」

グレイファイアの表情がさらに険しくなり、抑えられていた魔力がドツト噴き出す。叩き付けられた魔力量に体が震える。

流石に冥界、サーゼクス・ルシファアの妻にして最強の女王と言ったところか

『どうするの？』

「どうしたらいいと思うっ？」

まあ・・・正体を下手にばらしても警戒されるだけだし・・・しかたない。あんまし貸しを作ると面倒なんだがな

懐から徐に自分の携帯電話を取り出すとある番号をリダイヤルする。一体どこにかけているのかとさらに警戒の姿勢を強めるグレイフィアを他所にソイツにつなげる。

『私だ。どうしたんだ？ 依頼の件、フェニックスの情報ならすべて渡したと思ったが何か足りなかったか？ それとも今回の私の実験に協力してくれるのか？』

「どうしてそうなる。今回は依頼とは関係ない。あんたの同僚の奥さんに殺気を向けられているんだ。どうにかしてくれ」

まさかの要件に電話の相手も若干驚きで声のトーンが1段階上がる。

『ほう・・・グレイフィアがそこにいるのか・・・成程、キミの力に警戒していると言った状況か・・・仕方がない”貸し”1だよ。』

「チツ．．．わかったよ。ほらよ．．．あんたにだ」

「．．．はい．．．!!なぜあなたが!．．．はい．．．はい。解りました。しかしサーゼクス様には報告させていただきます。はい．．．では」

閉じられた携帯をこちらの手に返してくるグレイファイア。

「まさか．．．アジユカ様と関係があるとは．．．本当にあなたは何者のですか?」  
「俺の事は詮索するなどは言われなかったか?」

そういうとグレイファイアは黙り切ってしまふ。下手に詮索されては面倒だ。フェニックスの家とも付き合いがあるグレモリー家のメイドなら尚更に

「さすがにこれ以上追及するのは“不味い”と考えたのか素直に頭を下げるグレイファイア

しかし

「失礼いたしました。．．．しかし、何故アジユカ様の協力者でありながらリアスお嬢様と行動しているのか。それだけでもお教え願えませんでしょうか？」

何故リアスと行動しているか

最初は偶然だった。レイナーレの一誠襲撃が無ければ出会う事すら、関わる事すらしなかつた。いや．．．俺の中の神セイクリッド・ギアの存在が俺と彼女をツ引き寄せたから．．．いやそれも違う

俺は本当は．．．．．

「単純に俺の中に神器（セイクリッド・ギア）があつたからだ。それ以上の理由はない」「そうですか．．．わかりました。とりあえず私は帰りますが、主であるサーゼクス・ルシファー様にはあなたの事、お伝えしておきます。」

では、と丁寧なお辞儀と共にグレイファイアの足元に転移魔法陣が浮かび上がりその姿が粒子の様に消えていく。と同時にその気配も消える。

今度はダミーではなく、本当に冥界に帰って行ったようだ。

しかし同時に俺たちの存在が魔王、いや冥界側にも知られる危険性が出てきた。今回の依頼が終わるまではアジュカのほうで抑えられるだろうが、存在がばれるのは時間の問題と言う事になってしまった。

しかし、仮にあの女の口をここで封じるとしても、こちらは無事では済みまい。

「さて……俺もできることをしようか」

『手伝うわよ。蓮♪』

ああ……だがまずは、佐野たちの状況次第だな。

一体あつちではどうなっているのか・・・

頼むぞ・・・佐野、オーデイン

## 番外編①【佐野君の冥界調査】

リアスの婚約をかけてライザーとのレーティングゲームが決まったところ、魔王アジユカ・ベルゼブブの依頼、そして蓮の命令で冥界のベルゼブブとある研究所のとある一室に佐野は案内されていた。

本当ならばもう1人、同行してきたライダーが居るはず。しかし近くの鏡には何も映ってはいない。

佐野のパートナーとして冥界にやってきたオーデインは別行動で行方不明事件の発生現場を回り、先にフェニックス領に潜入している。

冥界入りして既に7日が経とうとしていた。だが一向に調査が進まない。こんなことでは旦那に殺されてしまう

そんな時だった。数日前に襲われた女性に話を聞けることとなったのは

「そうですか・・・シマウマの化け物に襲われて」

「はい・・・本当に、あの時、戦極凌馬様が現れてくれなかったらと思うとつ本当に・・・本当に怖くて」

目の前で肩を掴み、怯えた様に体を震わせている女性。この女性、実は一昨日ミラー・モンスターに襲われたところを、その戦極凌馬とか呼ばれる（恐らくライダーだろう）に助けられたと。



正直運が良かったとしか言いようがないと佐野は思っていた。

自分もかつて死んだからこそ分かるのだ。死の瞬間のあの恐怖は何とも言葉では言い表せられない。しかもミラーモンスターに捕食されようとしたのだ

「ではもう一度確認しますが、お嬢さんの務めていた主のお屋敷っていうのはフェニックス家とは関係があるんですね」

「は．．．はい。実は数日前にライザーフェニックス様とその執事様との会食パーティーがありました」

パーティー．．．いいな．．．うらやましいな．．．つと違う違う

思わず貧乏人根性で想像してしまった佐野は頭を振り払う

「で．．．その数日後、最初の行方不明が起こったと。」

「はいっ！数日周期に1人、1人と・・・私のメイド仲間も・・・あの子、小さい子供を養いながら頑張っていたのに」

「あつ・・・ちよつ・・・泣かないで、大丈夫ですから泣かないで下さいよおお」

女性は思い出してしまったのか嗚咽を漏らしながら泣き出してしまふ。彼女れきⅡ人生である佐野にとつては女性の泣き顔など幼いころの同級生の泣き顔しか知らないため、こういう状況の時の宥め方など解らなかつた。

「ヒッククッ！・・・いきなりごめんなさい。でも・・・あの子、まだ小さいのに不憫で不憫で」

「んゝまあ・・・そうでしょうね。自分もちよつとは解らない訳でもないですから」

自分もかつて親に勘当させられたが、実際に父親が死んでしまった時の事はよく覚えてる。何とも言えないのだ。内心ではすごく嫌つていても、実際に親の死に直面したら。愕然と来てしまふ。

ましてや、それがまだ親にべつたりの小さい子供、それも母親が居なくなると言う事はどれだけの事か計り知れない

子供の時とはそれほど繊細な事なのだと、俺は旦那から口を酸っぱくなるほど言われた。

あの人子供が関わると急に人が変わるからな

そんな昔を懐かしむように思わず苦笑いを浮かべる佐野だったが、女性が小さく驚いたような声を上げる。

何か思い出したのだろうか？

「そういえば……ルビー君。確かお母さんが消える少し前に変なものを見たって」

変なもの……何だろう？何か見たのだろうか？

「鏡の中に・・・人がいるって、その人がお母さんを連れて行ったのかなって」

「何だって!?!」

思わず椅子を弾き飛ばす勢いで立ち上がる佐野。女性小さく“あわあわ”と口元を震わせる。

だが佐野はそんなの関係ないと言った勢いで女性を問い詰める。

「その子はあなた以外に・・・例えば他に何か言ってますでした?見たことある人だとか。あつあとその話他の人には言いましたか!?!」

問い詰めなければならぬ。佐野の背筋に嫌な汗が浮かぶ。もし俺の考えが正しければ

「え・・・あつ!・・・わっ私・・・」

「良いから答えて！最悪の事態が考えられるなら！奴らはその子供まで狙ってきます！」

「・・・そう言えば・・・あの子、黒いヘルメットを被っていたって。それにこの話はメイドや執事にも言っていたから」

黒いヘルメットを被った人が鏡の世界にいた。ミラーモンスターなら黒いヘルメットなんてあいまいな表現はしない。それにミラーモンスターでそんなモンスターの情報はない。

それに俺の感が正しければ・・・その子が見たのはミラーモンスターではない

旦那が言っていたミラーモンスターを背後で操り、フェニックスに協力している存在それがもし俺の予想している奴で、その子の話をそいつの耳に入ったら

その子が危ない！

誰か！と叫び、外に待機していたスーツ姿の女性に後を任せると廊下に取り付けてあつた鏡にカードデツキを翳す。

「変身！」

仮面ライダーインペラーへと変身しミラーワールドに飛び込むと同時に一枚のカードをガゼルバイザーに装填する。

【アドベント】

「ギガゼール！お前はオーデインの所にこの伝言を伝えろ！」

“ コクン ”

そう言つてメモをギガゼールに渡し、傍に控えていたライドシユーターに乗りこむと最大速度でミラーワールドを駆け抜ける。

急がなければ……急がなければ間に合わなくなる。冥界は道が整備されていないが、幸い道幅が広い。このスピードなら

(っ！見えた！)

ライドシューターで駆ける事、数10分。メイドの女性から聞いた住所にひっそりと立ち尽くす建物が見える。ライドシューターを適当に置き、急いで家の中に駆け込むインペラー

しかし……事は既に起こってしまっていた。

『『ウウウ……ウウウ』』

既に家の中には確認できるだけでも3体の白い昆虫型ミラーモンスター『シアゴースト』がのろのろとした緩慢な動きで人間の手の様な物を捕食している。その周りのも食い散らかされた肉片がちらほらと目に入る。

「おじさん……チャールズおじちゃん!!」

「っ?!子供!」

インペラーの強化された聴覚は唇を震わせた幼い少年の声を聞き逃さなかった。建物の端、コンクリートの壁にもたれかかる様に体を震わせている4、5歳の少年。

おそらくあの少年がメイドが言っていたルビー君で間違えないだろう。



だが同時に食事が済んだのか『シアゴースト』も次の獲物を捕食しようと動き出す。

3体が3体、端っこで震えている少年に群がるように集まっていく。

「させるかよ!!」

インペラーは叫ぶと同時に少年に襲い掛かろうとした3体『シアゴースト』に蹴りや拳の打撃を暴風雨の様に浴びせる

もともと動きが緩慢な『シアゴースト』。ミラーモンスターの中でも最弱の戦闘能力だけあってインペラーの打撃をまともにすべて受けてしまい、建物の外まで叩きだす。

「良いかい。このまま目をつぶって、ここから動かないように。お兄ちゃん直ぐに終わらせて来るから」

少年の体を傍にあつた綺麗な毛布で隠し、安心させるように言葉をかけ、外に弾き飛ばした『シアゴースト』を追撃する。

『ウウウ!!?ウウウウウ』

『ウウウウウ』

『ウウウウウウウ!』

外では吹き飛ばされた衝撃から起き上がった『シアゴースト』が建物から出てきたところを口から吐き出した職種の様な物でインペラーの腕や足、首を拘束する。

「ぐっ……舐めんじゃねえぞおお!!」

インペラーは怒りの咆哮を上げると、腕に巻きついていてる触手を手にし強引に『シアゴースト』ごと自ら引き寄せ、渾身の蹴りを叩きこむ。

『ウウウウウ!!?』

『ウウウウ』

蹴りをぶち込んだ『シアゴースト』を残りの『シアゴースト』にぶつけることで、首と足の職種の拘束が弱まり簡単に外れる。

互いの重量を支えきれずに重なり合うように転がる『シアゴースト』

そのチャンスインペラーがみすみす逃すはずは無い

【スピンベント】

インペラーの右腕には、嘗て『デイスパイダー』の硬質した装甲を紙の様に貫いた【ギガゼール】の頭部を模したドリル状の刃が装備され

「オラアアア!!」

高速回転する2本のドリルが重なり合っていた一番下の【シアゴースト】の背中から

お腹までを貫通させる。

『う!?!ううう……う……』

そのまま立ち上がることなく爆散させる。残りは2体。だが

『『う……ううう……う』』

メキメキメキメキ!

体を丸めた体位になっている『シアゴースト』の背中が心臓の様に上下に鼓動したと思ったら、その皮の中から青い、頭部に4つの虹色に輝く薄い羽根を取り付けたトンボ型ミラーモンスターに姿を変貌させる。

『シアゴースト』が脱皮することでトンボ型ミラーモンスター『レイドラグーン』に変態した。

(くそー！進化する前に倒したかったが・・・)

奴の面倒な所は『シアゴースト』と違って、純粹に飛行能力が追加される点

ナイトの旦那とは違い飛行能力は持たないんだよ！

『ブブブブブブ!!』

「飛ばしはするかよー！」

【アドベント】

『ギギイイイイ!』『グルオオ!』

飛翔しよう翅を高速振動させる『レイドラグーン』をレイヨウ型モンスター『ネガゼール』と『オメガゼール』がそれぞれ自分の武器である両腕のカッターと槍で飛び立とうとする『レイドラグーン』を地面に抑え込む

「これで！ラストオオオオ!!!」

右腕のガゼルスタップで仰向けに倒れている『レイドラグーン』串刺しにする。

ギューイイイイイイイン!!

『ブブ!?ブブブブブブブブウウウウウウウウウ!!!』

腹に串刺しにただけではまだ死なない『レイドラグーン』に突き刺したガゼルスタップのドリル部分を高速回転させる。レイドラグーンの体から血の代わりに大量の火花が泉のように溢れ出す。

インペラーの最後の追い討ちに遂に耐え切れなくなった。レイドラグーンは絶望を超える痛みの中、断末魔を上げ、『シアゴースト』と同様に爆散する。

残りは!?何処にッ!

『ブブブブブ!!』

残る『レイドラグーン』の高速振動する翅の音が、羽ばたきがどんどん近くなってくるが、辺りを見渡してもミラーモンスターの影も形も

「!?上か!」

反応するインペラーだが間に合わない。『レイドラグーン』の右腕の鋭利な鉤爪が頭上から迫る。

【ソードベント】

．．．斬!

『ブブ!?．．．ブブ．．．ブブウウウウウウ!』

だが、インペラーの頭上に迫った。『レイドラグーン』の体が上半身と下半身で真つ二つに割れ、爆散する。

一体誰が?!と周りを警戒するインペラーだがその前にソイツは現れた。

「ふん・我が居なければあの場で重傷を負っていたぞ。佐野 満。お前は主が遣わしたライダーの1人なのだ。ミラーモンスター如きに殺されるでない。」

尊大な物言いでこちらを助けた仮面ライダーオーデインは言いたいことを言うだけ言う。と再びミラーワールドに消えていく。

正直言い返したいところではあったが油断していた事は事実。死ぬことは無いにしろ、重傷を負っていたかもしれない

2年間死んでいた故に体がなまったか？

まあ一応周りに確認できるモンスターは倒したから良いとするか。

それよりも



インペラーの姿のまま、再び半壊した建物の奥へと入っていく。奥のむごたらしい事件現場の様な所に包んだ毛布

それをそつと外すと中から目を見開いたまま恐怖に打ち震える一人の少年がこちらを見上げている。

「大丈夫だ。もう大丈夫だから。」

インペラーの姿、変身を解いた佐野は少年の小さい体をそつと包むように抱きしめる。

「怖かったな．．苦しかったな。だけど大丈夫。お兄ちゃんが付いているから。」

「あ．．．あ．．．あ」

少年は恐怖からくる張り詰めていた緊張が解けたのだろうか、腕の中で意識を失い

ぐったりとなる。

しかし、佐野は少年を抱きしめたまま、拳を握る。

何故こんな少年が襲われなければならないのだろうか

自分はライダーだ。殺す殺される環境で相手を沢山傷つけてきた。正直殺されても文句は言えない。

だがこの子は違う。この子はただ母親と幸せに暮らしていただけなのに

ただ・・・幸せに

『俺はただ・・・幸せになりたかったただけなのに』

それはかつて自分が死ぬ前に蓮に訴えた最後の言葉であり、純粋な望みだった。

幸せでありたい。だから金を欲する。昔の俺はどんなことをしても、どんな相手に媚びても金を手に入れる。

それが幸せにつながると思っていたから。

懐から取り出した携帯電話で電話をかける。このままではこの子は衰弱してその内死んでしまうかもしれないから

『ふむ．．．私だ』

『はは．．．私だ。じゃ解りませんよアジユカの旦那』

電話の相手はアジユカ・ベルゼブブ。こんな時の為、また何かあった時や情報を共有するためにこの携帯も彼から渡されたものだ。

『ではこれからは名乗ろうとしよう。でだ佐野君？何やら飛び出して行ってしまったと研究所の方から連絡があつたが？』

流石に情報が速い。

『先ほど、ミラーモンスターに襲われた情報から、彼女の同僚、ミラーモンスターに喰われた女性に子供がいるという話を聞きまして、しかもその少年、どうやら母親が消えるところを見てしまっているそうなんです』

電話の向こうでアジユカが“なるほど”と意味深な返事返してくる。

『つまり、口封じにくる可能性があることから、君は急いでその少年の下へ向かったと：では少年は？』

「少年は何とか・・・しかし、少年の身元引受であろう2名の叔父夫婦は・・・助けられませんでした」

唯一の後悔に思わず歯ぎしりしてしまう。だが今は後悔よりも腕に抱かれている少年をどうにかしなくてはいけない

「少年は捕食の現場を見てしまっていますし、襲われた恐怖で精神的にも結構負担がかかっています。どうします?」

『・・そうだな・・ならばこのまま研究所まで連れてきてくれ。あそこなら大抵の事は対応できる。それに凌馬と私が開発した。アーマドライダーシステムもある。ミラーモンスターの1体や2体対処できる。』

「わかりました。では・・・」

電話を切った佐野はここで重大なことに気づいてしまった。

「この子……どうやって連れて帰ろうか」

こうして佐野は犠牲は出たものの、未来ある少年の命を怪物から守ることができた。

完

—  
冥界、  
フェニックス領  
—

人間界から戻ってきたライザー・フェニックスは自分の部屋に戻るなり、余裕の笑みを浮かべていた。

もう少しで欲しかった女が手に入る。手に入れたらどうしてやろうか。など楽しんでいた。ぽいだった。

「失礼します。ライザー様、明日のご予定の確認に参りました。」

「ああ・・入れ」

失礼しますと一呼吸置いた扉から現れたのはメガネをかけた執事

これでも多忙なライザーはそのスケジュール管理を眷属から、最近採用した最も優秀なものに任せていた。

「明日のご予定は、バアル家との会食、エルサドル様とのチェス・・他に」



執事はメモを見ずにすらすらと次の予定を一字一句、時間の秒単位まで完璧に話す。これがライザーがこの執事を専属に選んだ理由だった。

この一度見たらすべて記憶してしまう、“絶対記憶”これを持っているこいつならば何処にスケジュールを組めばいいのかも全て任せていられる。

父上に無理を言って専属にする価値だけはあるな。そして父上も知らない事がもう一つ

「続いて・・・本日の処理ですが、レフユール侯爵を行方不明で処理いたしました」

「ほう・・・よかった。よかった。あいつはあれで、面倒な男だった。おかげで美しい女を取りこぼす所だったよ」

ライザーは邪悪な笑みを浮かべる。もう一つの使い道

## 暗殺

目障りな男や、俺に不満を持つメイドなどを進んで処理をしてくれる俺の裏の右腕

唯一の懸念としてはこの男。どうやって処理をしているかのその方法が解らない

それとなく何度も聞くがはぐらかされるか、契約の事を持ち出される。

契約とは俺が指し示す輩を消すこと。しかし、その方法については口外しない

まあだが、こちらにも動かずに邪魔者を黙って対処できるのは楽でいい

「これからも頼むよ……なあ

香川英行（かがわ ひでゆき）君

」

「はい……お任せ下さい。わが主」

執事は黙ってお辞儀をする。その頭の下で薄っすらと不気味な笑みを浮かべながら。

ライザーはこの時、気づいていなかった。

この男の存在がこれからの冥界において、どのような害をもたらすかなんて。

## 第9話【守るべきもの】

リアスの婚約を賭けたライザーとのレーティングゲームが決まって遂に10日たった。

リアスたちグレモリー眷属はどうやら合宿と言う名目で強化トレーニングに言っていたらしいが実際は何をしていたのだから

俺？俺は一応部員だけど・・・まあやることがある訳で、正直ゲームに参加するわけでもないのに付き合っていない訳で

一方で冥界に送り出した佐野、オーデインからも様々な情報が挙げられてくる。中でも一昨日の夜、早速フェニックス、特にライザーが怪しいという情報が佐野たちからの調査で挙げられてきた。

そしてもう一つ、襲われたメイド：の同僚の息子がミラーモンスターに襲われた。佐

野も情報を聞いて即座に動いたらしいが少年を引き取った叔父夫婦は間に合わなかったと

そして佐野はこうも言っていた

“ 旦那の気持ち・・・少し分かりました。俺・・・今回の相手、絶対に許せませんよ ”

あの業突く張りから怒りのこもったこんな言葉聞けるとは思わなかったために、その時は思わず絶句

だが佐野が怒りを感じてくれたからこそ、俺も冷静でいられた。いつもなら腸が煮えくる位の怒りが嘘の様に感じられない

その助けたという少年は現在、佐野がや凌馬がいる研究所で保護されているらしい。だからか、まだミラーモンスターには見つかっていない。

佐野には少年が目を覚ましたら連絡をする様に言っ  
てはあるが心配である。普通なら怖気が走るよ  
うな場面まで見てしまったからな。

あと数日以内に目を覚ますかどうか

— 夜 —

深夜の11時40分頃

遂にリアスとライザーのレーティングゲームが始まろうとしていた。

久々に会うリアスたちグレモリー眷属の力は10日前と比べて見違えるほどに成長しているように蓮には解る

しかし・・・いや、最後までどうなるかわからない

「じゃあレン、今日あなたはソーナと一緒に生徒会室で私たちの勇士を観戦していてちょうだい」

リアスは自信満々と言ったように胸を張る。先ほどまで朱乃と優雅にお茶を飲んでいた余裕は伊達じゃないな

「蓮君行つてくるよ！」

「俺らの活躍見てろよな！」

「あかつ・・・頑張ります」

「勝つたらお祝いの新作ケーキ・・・試食お願いします」

何故か最後のは要求を言われたような気がするのだが・・・まあ良いだろう

ただ一人、朱乃とだけは互いに最後まで会話をする事ができなかつたが蓮は彼女とすれ違う直前に一言

「頑張つて下さい。応援しています。・・・朱乃」

「・・・はい！頑張りますわ。蓮」



最後に朱乃の笑みを目に入れると同時にリアス達を光が包み込み、転移されていく

決戦の場へ

その後、蓮はリアスに言われたように、旧校舎から新校舎へと歩みを進めている蓮

3階の生徒会室に向かう廊下、消灯は既に消え、辺り一面が闇に包まれている。襲撃にはびつたりの環境だと考えながら歩く蓮に突然その魔力反応は現れた。

『蓮！』

「わかつている！この魔力・・・魔王クラスか！」

目の前の暗闇から徐々に近づいてくる巨大な魔力に、懐のカードデッキを握りしめる。何時でも対応できるようにした蓮を前にその人は現れた。

リアスと同じ紅い髪、大人びた好青年。だが向けている笑顔とは反対にその内に宿っている力の大きさは魔王クラス、それもアジユカを超えている。

そうか・・・この人が

「初めまして、まさか魔王であるあなたの方から接触してくるとは思いませんでしたよ。サーゼクス・ルシファー」

「そうだね。君の事はグレイフィアから聞いていたが中々面白いものを秘めていそうだね」

飄々としているがこの男、先ほどから一切の隙を見せていない。と言うより隙が無い

「アジユカからはキミの事を単なる協力者兼（実験動物）と言われてはぐらかされてね。

実際に一目見ようとしたわけだけど」

誰が  
くくくと面白おかしそうに笑ってくる。というかアジュカのやろう、誰が実験動物だ

「いや失敬……確かに面白そうな存在だ。アジュカが気に入るのも頷ける。」

「そうですか……ならばそろそろ観戦席に戻られたほうがよろしいと思いますよ。後ろの奥さんに何かされる前に」

えっ後ろ？とサーゼクスが後ろを向いた瞬間、かの魔王の背中が急激に収縮したように見える。

原因はもちろん俺の目の前で目を半目にし、憤怒のオーラを発している銀髪のメイド

「何処に行かれたのかと探しに来てみれば……あなたと言う人は」

「さて・・・待つんだグレイフィア。私はただトイレを探して偶然、偶然通りかかった。その優しい青年にトイレの場所を」

うわゝ子供みたいな言い訳してるよこの人

てかグレイフィアさん？様の目じりが吊り上がり、青筋が浮かぶように見えるのは俺の気のせいでしょうか

『恐らく気のせいじゃないわよ・・・見て見なさい、目の前の男の情けなさを』

目の前・・・あえて見ないようにしていた。何故？目の前で正座をして頭を下げている魔王（笑）がいるからだよ！

時間を気にして様子を見に来たソーナが来るまで、そのお説教は続いたのさ

と言う訳で何とか生徒会室にたどり着いた蓮

中には“放送室の間違いじゃあ”と思うくらいのモニターや放送器具が辺り一面に設置してある。恐らくこれを使ってこの試合を中継するのだろう

グレイファイアの声が放送機械を通して全体に流れる。この人が今回の審判の様だな。

しかし、試合フィールドが駒王学園を模したものとは思わなかった。てつきり冥界の森でも再現するのかと思っただけに少し驚く。

しかしこれは完全になめられているぞ、リアス

「しかしまさか、あなたと一緒にリアスの初ゲームを観戦することになるなんて夢にも思いませんでしたよ」

「こちらこそ。まさか生徒会長率いる生徒会メンバーが“悪魔”だったとは予想にしていまませんでしたよ」

お互いに軽口を開きながら開始時間まで待つソーナと蓮

「貴方から見て……リアスは勝てそうですか？」

笑いながら、しかし意地悪な質問をしてくるソーナ。蓮は無表情に表情を変えて冷静に判断する。

「40%……どれだけ力を付けて来たかは解りませんが、大目に見てですが」

「厳しいですね……ですが、私もあなたと同様の意見です。こんな……出来レース以外の何ものでもありません」

おいおい……この学校の学友がそんなこと言ってもいいのかよ

『蓮も部活の後輩だけどね』

うるさいな・・・俺は自分の意見を言ったただけだよ

「ライザー・フェニックスの戦術は味方を犠牲にして相手を確実に倒す」サクリファイ  
ス」正直数頼みの最低最悪の戦術です」

確かに・・・ライザー・フェニックスの過去のゲームはアジュカの下で目にしていた。  
結局は戦うことになるかもしれないから

だからこそ、その戦術が”外道”まして、3流の戦術だと言う事を俺は知っていた

「会長、相川君。お話し中済みませんが・・・そろそろ動くようですよ」

椿の指差すモニター、そこに移されている一誠

『変態！女の敵！』

『ケダモノ！性欲の権化！』

なんだか・・・罵倒されているけど・・・

「女性に接触した際に、自分のイメージを魔力として流し込んだのでしょうか・・・中々・・・独創的な技ですね。」

こつちを見ないで！その同情的な目を止めて！正直友達辞めたくなってきた、ガチで「ん？会長グレモリー眷属の皆さんが移動を・・・体育館を放棄するのでしょうか？」

頭を痛めながら、モニターに注目する。確かに一誠と小猫が敵から離れるようにして体育館を外に出ていく

確かにマップから換算すると数が圧倒的に少ないリアスにとって牽制と進路が同時に確保できる唯一の場所

だがこれは相手も予想で来ている事、ならばとるべき選択肢は





恐らくは相手の『女王』だろう

見方を犠牲にすることで敢えて相手を油断させ、そこを一撃で仕留める。犠牲が前提のクソ戦法だが所詮はゲーム、残念だがこれではリアス達に勝ち目は

キイイイイイイイン！キイイイイイイイイン！

全く今日くらいは大人しくしてろっての

「すみません、ちよつとお手洗いに」

“早く戻ってきた方が良いですよ”と椿に言われ、俺は生徒会室の外に出る。反応が

あつた方は……

『下よ 蓮。1回それもまだ校舎には反応が無いから、恐らくだけどまだ工程だと思わ』

校庭か……よし

暗闇に目を慣らして行きつつ、廊下越しに走っていき、月当たりの階段を一気に駆け下りていく。そして1回の窓越しにそいつらはいた。

ぞろぞろと新校舎に向かって走ってくる。一瞬でた月の光に晒された怪物の姿が一瞬映し出される。人間の覆面姿の様な姿。間違いないと蓮は確信する。

イモリ型ミラーモンスター『ゲルニユート』が3体、数は少し多いが、戦闘力では『デイスパイダー』の方が遙かにめんどくさい敵だ。

更に『ゲルニユート』は窓越しから様子を覗っている蓮に気づいている様子はなく、校

舎の壁にその吸盤の様な指先を張り付けると緩慢な動きで壁をよじり登り始める。

今なら奇襲で一体削れる。蓮は腰のVバックルにナイトのデッキを装填する。

「変身！」

蓮の姿が鏡が重なり割れる音と共に仮面ライダーナイトの姿に変わる。

『ゲルニユート』はどうやら3階の放送室を狙っているのか、かすかな放送器具の明かりを頼りに壁をよじ登っていく。

だが上るのに夢中で3体ともこちらに気づいてはいない

「早々にやってきてもらって悪いがリアスの邪魔はさせない！」

【ファイナルベント】

『キイイイイイ！キイイイイイ！』

現れたダークウイングがそのままマントの状態ウイングウォールに変化し、そのマントがウイングランサーごとナイトを包み込む

一個の漆黒の弾丸となったナイトの『飛翔斬』が『ゲルニユート』の死角から貫かれる。

『ウギャツ！ギャギャ！？』

流石に仲間がやられれば気づくだろうが、2体程度なら

『ブブブブブ』

『蓮!?!後ろだ!』

「何!?!うおっ!」

シエーラの声が無ければ危なかった。残り2体の『ゲルニユート』ばかりに意識をそいでいたおかげで背後からの奇襲に気づかなかった。

新手、それも飛行タイプのもンスターか！

佐野もつい先日、冥界で戦ったトンボ型のミラーもンスター『レイドラグーン』

さつきから妙に“ブンブン”うるさいと思ったら

『『『『ブンブンブン』』』』

3体・・・数はそれほどでもないが、『レイドラグーン』をどうにかしなければ『ゲルニユート』が

『ブンブンブン!!』

ギャン！

『ブブブウウ！』

ガンツツ！カンツツ！

「くそっ！こいつ等ツツ！連携して」

1体1体は大したことが無いが、連携してくる『レイドラグーン』に手間取ってしま  
う。別に速攻で倒せなくもないんだが

『ギャギャツ！』

ブンブンブンブン！

「うざいんだよっ！『蓮後ろ』わかっているっ!!」

背後から迫る風切音に翼召剣ダークバイザーを一閃しこちらに投げられた大型手裏剣を弾く

『レイドラグーン』に手間取っていれば、その隙について『ゲルニユート』にやられ、『ゲルニユート』を先に片付けようとすれば『レイドラグーン』が邪魔をする。

このまま長引けば、不審に思ったソーナナか椿のどちらかが蓮を探しに来るかもしれない。かといって探しに来たところをミラーモンスターに襲われる可能性も

『蓮！迷っている暇はないわよ！力を使いなさい！』

「だがツツ！『ギャン！』今あるデッキは！『ガキーン！』ライアの」

『迷っている暇はないでしょ！それとも、あなたはそのまま学友を殺させるつもり！どちらを優先するか考えなさい！』

正論過ぎるシェーレの指摘に自分の中で葛藤するナイト。だが“カツ！”と目を見



開いた蓮は決心を決める。

これ以上・・・誰も犠牲にしないために

“ 発動 ”

〔Revive〕

ナイトの右腕が神セイクリッド・ギア器 深淵と永劫の鍵の漆黒の腕に代わると同時に校庭に放った赤紫色のカードデツキに漆黒の閃光が注がれ、次第に人の形を生みだす。

漆黒の閃光が収まった時、新たな戦士が蘇る。

「ここは・・・学校か？俺は・・・確か、王蛇の攻撃で・・・致命傷を負って

『ちよつと混乱しているところ悪いけど良いかしら？』

誰だ！

『あなたの頭の中に直接話しているのよ。状況が状況だし記憶の共有は後回しにする

わ。まずは上を見なさい』

上だと・・・あれは・・・ミラーモンスターツツ！それに・・・蓮!?

『そうよ。私の蓮が今闘っているの。それに上空のミラーモンスターの他に屋上にもう2体『ゲルニユート』っていう別のモンスターがいるわ』

頭の中に話しかけてくる声は淡々と状況を説明し、男もこれをすぐさま状況を理解することができた。

つまり俺は

「俺は校内のモンスターを倒せばいいんだな」

『そうよ♪理解が速くて助かるわ。恐らくあいつらは3階の明かりがついている部屋に向かうはず。その前に止めて。あなたの力は右のポケットの中に入っているはずだわ』

右のポケット・・・確かに四角いものが入っている。取り出してみると懐かしいカードデッキが

『じゃあ！お願いね！上空のモンスターは蓮が引き受けるわ・・・ほら蓮！貴方からも何か言ったら？』

「うるさいっ！・・・今そんな悠長な場合じゃ！」

蓮！蓮なのか！

「・・・・・・・・こつちは何とかする。『ゲルニユート』は任せる・・・手塚」

たったそれだけ、たったそれだけだが思わずほつとしてしまう。助けた子が生きていて、今も闘っている

俺にとって、協力するには十分な理由だ

「ああ！任せろ！必ず倒して見せる！だから・・・変身！」

Vバツクルにカードデッキを装填した瞬間、手塚の姿が鏡合わせの様に変わる

赤紫のライダーアーマーを纏った仮面ライダー、その左手にはエイをモチーフにした盾形の召喚機エビルバイザーが装備されている

仮面ライダーライア

かつて親友から受け継ぎ、最後まで戦いを止めようとした手塚のもう一つの姿が今再びよみがえる。

俺は怖かったのかもしれない

手塚に、俺を庇って死んでしまった手塚に恨まれているのではないかと

でもあいつの安堵する声を聴いて・・・俺は

『『ブブブブブブブ』』

そんな感傷は俺たちには関係ないといった『レイドラグーン』3体がそれぞれの方  
向から槍がナイトを貫く瞬間、ナイトの姿が消え、互いに突き出した槍同士が火花を上  
げて激突する。瞬間移動したかのように突然消えたナイトをその複眼で探すが見つけ  
られない

「人が感傷に浸っているときにいい加減やかましいんだよ!! 空気ツ読めやこのクソ虫が  
！」

罵倒が辺りにこだましたかと思いきや、風を切る音が「ビュンビュン」と『レイドラ  
グリーン』のあたりで吹く

と思いきや突然自分たちの体が重力に飲まれた様に地面に落ちていくのだ

他の『レイドラグリーン』も同様に落ちていく。よくよく見れば頭の翅の部分が全て根  
元から鋭利な刃物で切り裂かれたように消えているのだ。

『『ブブブウウ!!』』

地面に激突する『レイドラグリーン』幸いミラーモンスターはこの程度では死なないの  
かよろよると立ち上がる。

「ところが残念。お前らはもう終わりだよ」

「ブブ!？」

「何時の間について言いたいんだろがよ．．お前らが遅いんだよ!!」

“グサツ”という生々しい音と共に1体の『レイドラグーン(A)』の腹からウイングランサーの剣先が突き出てその切先から緑色の液体が流れ落ちる。

『『ブブウウ!!』』

仲間がやられたからか傍に転がっていた『レイドラグーン(B)』が地面に落とした槍をナイトに向かって投擲する。

だがその槍がナイトを貫くことは無かった。何故なら

『ブブ．．．ブウウ』



「あーあ、俺を殺すつもりで、味方を殺しちゃったよ。」

ナイトはウインググランサーを腹に突き刺した死に体の『レイドラグーン（A）』を盾にし、投擲した槍はとどめを刺すように『レイドラグーン（A）』の脳天を貫通した。

『ブブウウウ!!』

怒りに我を忘れたか自らの爪を武器に『レイドラグーン（B）』が無謀にもナイトに突っ込む

が突っ込もうとしたナイトの姿が、再び一瞬で消える。と同時に『レイドラグーン（B）』の視界が左右で割れる。

意識する暇もなく『レイドラグーン（B）』の体が緑の血潮を吹き出しながら真つ二つに割れ、地面に生々しい死体を残し消える。

『意識する前に、相手の体を翼召剣ダークバイザーで真つ二つに切り裂いたの?』

「ああ……正直この程度の硬さなら、少し力を流せばバターみたいに簡単に斬れるよ。さて残りは」

残る最後の『レイドラグーン(C)』にゆつくりと翼召剣ダークバイザーの剣先を向ける蓮

一方剣を向けられた『レイドラグーン』だが、頭の翅は根こそぎ切取られ、飛翔も満足にできない。更に立ち向かおうとしていた自分の同種も無残に殺された。

『ブ!?ブブブブブブ!!!』

『レイドラグーン(C)』はナイトに背を向け一目散に逃げる。逃げるしかなかった。最初は3体、いや5体のミラーモンスターで押しに押し切っていた。それが今ならどうだ? 3体に分けられたと思ったら、頭の翅を斬られ空中戦を封じられ、更に1体、また1体と殺されるしまつ。

目の前のあれは獲物ではない！いつの間にかこつちが獲物になってしまった。

逃げるしかない！そう考え、『レイドラグーン（C）』は必死に逃げようとするが

ナイトに背を向けた時点で、奴はもう死んだも同然だった。

“ヒュンツ！……グサツ！”

『ブブウウ!?ブ……ブ……ウ』

逃げようとした『レイドラグーン（C）』の背中をウインググランサーが貫通する。『レイドラグーン（A）』同様に

「おいおい……逃がすわけないだろうがよ。お仲間が戦って死んだのに逃げてんじやないよ。せめて戦って死ねよ。」

その声を聴いたが最後、『レイドラグーン（C）』は声を発することなく首を弾き飛ば

され、消滅した。

一方、ライアは校舎の中を急いで駆けずり回っていた。ナイトに任された2体の『ゲルニユート』の排除だ。

奴らはどうやら屋上にいるとの事であり。ライアは校内の階段を通って、今やつと屋上の前にたどり着く。

“バン！”という音と共に開かれた屋上の扉。しかし『ゲルニユート』の姿が見当たらない

何処へ身を隠してと辺りを探そうとした時だった。感覚が以前より数倍鋭く感じられる。

風の音、扉の動き、そしてもちろんモンスターの気配も

『ウギヤアアア!』

「そこか!」

ライアは飛びついてくる『ゲルニユート(A)』に逆に蹴りを喰らわせる。

身体能力も向上しているからか、以前のライアでは考えられないほどのダメージが『ゲルニユート(A)』を屋上の端まで叩きつける。

だがライアは気づいた。確か『ゲルニユート』はもう一体いるはずと言う事に

再び意識を集中し辺りを探るライア

そして見つけた！

【アドベント】

「エビルダイバー！俺の右後ろ後方だ！」

『グギャア!?』

ライアが指示した方向、背中から己の武器である大型手裏剣をライアにぶつけようと振りかぶっていた『ゲルニユート(B)』にライアの契約モンスターであり、エイのミラーモンスターでもある『エビルダイバー』が高速での体当たりを喰らわせ、吹き飛ばされる。

そして徐々に元の主に呼び出されたからか非常にご機嫌な様子である。

「よしよし・・・後でかわいがってやるから、お前は今吹き飛ばした方の『ゲルニユート』を足止めしてるんだ。わかるな」

『……(コクリ)』

ライアの命令に首の部分を小さく縦に動かす。

「よし！ならそつちの方は任せるぞ！」

ライアの行け！と言う言葉と共にエビルダイバーは吹き飛ばした『ゲルニユート(B)』を再び襲い始める。エビルダイバーもパワーアップしているようで以前よりその動きが機敏になっている。

『グギヤアアツ!!』

「クツ！お前らも武器を使うというなら！こつちも遠慮なく使わせてもらおう！」

【スイングベント】

ライアの手で電気をバチバチと放電させたエビルダイバーの尾を模した鞭を召喚し、

こちらに向かつて放たれた大型手裏剣を鞭で弾く。

剣や銃と違い鞭の軌道の読めない動きとタイミング、更にこちらの間合いの外から仕掛けてくるライアに振り回される『ゲルニユート（A）』

だが何とか保ち続けていたその均衡も直ぐに崩れる

“バギャン！”

『グツ・グギヤアア!!』

防戦一方だった為か『ゲルニユート（A）』の武器である大型手裏剣に罅が入り、そこを渾身の一撃で叩き付けたエビルウィップの衝撃に耐えられなく。結果砕け散った。

「ハアアアアアアアアア!!」

武器が破壊されたことよって出来た隙を狙い、エビルウィップを断続的に打ち付け



る。まして以前より威力が向上されている為、一撃一撃が重い。

故に『ゲルニユート（A）は何とかこの間合いから逃れようとするも、立ち上がる事すら困難になるほどの鞭の連撃に、遂に体が付いていけなくなる

「これで・・・終わりだ！」

ライアが飛び上がり体を回転させながら叩きつける鞭。遠心力を利用した上に纏わりつく電撃によつて最高潮までに高められたその一撃

“ドオオン！”

『グッ！グギヤアアアアアア!!』

強烈な一撃に耐える事が出来なかつた『ゲルニユート（A）』は断末魔の叫びを上げながら爆散する。

だがまだ戦闘は終わっていない

「残る一体・・・は？」

残る一体の『ゲルニユート(B)』だが・・・正直にライアは脱力してしまった。

『ググギャアア』

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

「・・・♪」

エビルダイバーの拘束の移動を捕らえられない上に、鉄板を切り裂くほど鋭い両端のヒレ エビルフィンと高速飛行で行う体当たりの衝撃が『ゲルニユート(B)』を圧倒している。

しかもエビルダイバーの奴・・・完全に余裕を持って遊んでいる。

「これ……俺要らないんじゃないか？」

そんなことを思う手塚だが、相手の『ゲルニユート(A)』の翻られている姿が逆に不憫に思えてきてしまう。

「仕方ない……早々に切り上げよう」

【ファイナルベント】

圧倒的有利な線上に鳴り響く召喚機の認証音声により呼ばれたと確信したエビルダイバーは大きく旋回し、ライアもその背中に飛び乗る。

徐々に加速しながら、高速で相手に体当たりを喰らわせるファイナルベント“ハイドベノン”が既に満身創痍の『ゲルニユート(B)』を声なき肉片に変えてしまう。

頼まれていたミラーモンスター『ゲルニユート』2体を倒したライアは蓮の援護に向かおうとしていた時

『あら？そつちも終わったようね。』

先ほどの女の声だ。一体どうゆう原理で俺の頭に語り掛けて来るのだろうか

女は「クスクス」と先ほどから黙っている俺が面白いのか笑いだす。

『佐野といいあなたと言い、やっぱり仮面ライダーとなる人間は面白いわね』

「ライダーを知っている……何故、俺の頭に直接語り掛けて来る！お前は一体蓮とどういう関係なんだ！」

何もいない屋上でライアは突然叫ぶ。女声はやれやれと言った声色で

『私の名前はとりあえず“シエーラ”って呼んで頂戴。それとあなたの質問なんだけど・・・いちいち説明するのも面倒だし、まとめて送っちゃうわね♪。少し痛いわよ』

何だろう・・・さつきから思っていたのだが、このシエーラと名乗っている女？色々と軽い気が・・・

「送るって・・・いったいいい!?な・・・何だっ！あ、頭が・・・頭に何かが！」

余りの痛みに平衡感覚が機能せずに倒れこむライア。

突然、頭に何かが濁流の様に押し寄せてくる。まるで半壊した川の水の流れに流れていくそれは止まる事を知らずどんどんと俺の中に入ってくる。

何なんだ・・・これは

『蓮には悪いけど・私が見た記憶ではあなたは信頼できるし、私だけでは最悪あの子を守ることはできない。だからお願い。あの子を』

守って・・そう、微かに聞こえたシエーラの言葉にライアは、手塚の意識は記憶の本流に飲み込まれた。

それは記憶だった。

それは16歳の少年が16年かけて刻んできた記憶

親を殺された記憶

誰も頼れずに孤独に生きる記憶

絶望に飲み込まれそうな記憶

取り付かれたように母親を求め、血で血を生むライダー同士の戦い

それが敵わぬと知った時の絶望感

それらすべてが蓮の記憶であり、感じてきた全てであることに手塚は何も考えることができずに思わず見入ってしまう

これが……！こんな悲しい事が！たった16歳の子供が背負っているというのか！

こんな

『そうよ……あなたが知って居るライダーバトルの記憶はあの子が体験してきたことのほんの一部、あの子はずっと後悔と絶望をその背に背負ってきたのよ』

誰かがこちらに歩んでくる。それは女の姿だった。長いセミロングの青い髪、西洋人

だろうか顔立ちは整っているため綺麗である。

それにその声には聞き覚えがあった。

「シエーラ……で良かったか」

『ええ……手塚 海之、この姿を見せたのはあなたが初めてよ』

軽く手を交わす手塚。しかしその表情は明らかに曇っている。

『そんな顔をしないで、私だってあなたにそんな表情をして欲しくて蓮の記憶を見せたわけじゃないんだから』

シエーラは酷い表情の手塚に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「だが……まだ16歳の子供だぞ……それなのにあんなの……あんな』



とてもではないが言葉で表すことは気持ち的には無理だ

それに、親を殺されたと言う事は知っていた。嘗てそれとなく聞いたことがあったからな。

だが今の記憶の話が本当ならばあれは殺されたというより“生贄”にされたという方が正しい

それに蓮はあの時意識が朦朧としていたようでそこらへんの部分がうまく記憶されていないようだが

『あの子の記憶は誰かによって封印されているわ』

「何だって……！一体誰に！」

シエーラは首を横に振るだけ。つまりシエーラも蓮の記憶の封印は誰が行ったか知らないと言う訳だ。

『私はあなたに本当の相川蓮を知って欲しかった。あの子が何故ライダーになったのか。あの子が何を求めているのかを。そして、それを知った貴方に聞くわ。あなたは蓮を如何したい？』

どうしたい？どうもこうも無い。俺の答えはあの戦いで、あの子の運命を。自分の占った運命を変えた時から俺の答えは変わらない。

「俺は彼奴の運命を変える。彼奴が破滅の運命を辿ろうというなら……俺は彼奴を守る。この命に代えても」

「そう……そう思ってくれる貴方だからこそ、私は彼女との約束を果たすことができるわ。付いて来て」

シエーラは薄い笑みを浮かべ、記憶の本流から外れた道なき道を歩んでいく。その後

ろを追いかけていく形で俺は付いて行く。

そして黙って付いて行くこと数分。俺たちの目の前に途轍もなく大きな壁が立ちふさがる。しかしよく見るとそれはただの壁ではない

それは 一枚の絵だった。

女神のような女性が茨に包まれている絵。見ていると何か……引き込まれそうな

『お待ちしていました』

ツ!?なんだ……いったいどこから

『そんなに怯えなくても大丈夫。私はあなたの目の前にいますよ』

目の前……目の前には一枚の絵しか……

手塚がじつと見つめると、絵の中心女性の胸のあたりから青い光が、徐々に徐々に溢れ、次第にその光が手塚の目の前に集まっていく

光は収束し、次第に人の形を現していく。

そして光が収束し現れたのは一人の女性だった。手塚はその女性の姿を目にした瞬間、驚愕する。

「あなたは!?!いやっ!だって蓮の記憶では……あなたは」

あなたは……死んだはず。だがその女性は悲しそうな瞳で黙って首を横に振るう。違うというのか

『そうですね。確かにあの子の記憶は偽りの者です。私が夫に頼みあの子の記憶を改ざんしてもらいました』

何故そんなことを!だって……だってあいつは

『あなたには全てお話ししましょう。あの子の全てを知って・尚、あの子を守ろうとしてくれる貴方に。そして、あの子を』

「なあシエーラ、手塚は『ゲルニユート』を倒したんだろ。なんでこつちに来るのが遅いんだ？」

もうあの戦闘が開始してから30分以上が経過している。手塚の能力は、深淵と永劫の鍵（アビシャルエタニティ）の能力で人間の時とは比べ物にならないほどパワーアップしているはず。以前ならいざ知らず『ゲルニユート』2体くらいなら余裕で倒すと思っていたのだが

『手塚はもうすぐ来るわよ．．．ほら、来たわ』

シエーレが左手の甲の目玉を向けた先、階段をこちらに降りてくるその男を、手塚は俺は直視できなかつた。

怖いのだ・・・あの時の事を思い出すと、俺を庇って死んでしまったあの時の喪失感を思い出してしまう。だが最も恐ろしいのはそんな俺を手塚がどう思っているか

「蓮・・・久しぶりだな」

ビクンツ！と体が跳ね上がる。手塚の久しぶりに聞いた手塚の声は2年前と変わっていないなかった。やさしくいつも俺の事を気にかけてくる声

やかましくも最後まで俺を守ってくれた男がそこにいる。

だけど俺は彼奴に何をしてきた。俺は彼奴に

“ポンツ！”

何をされたのか。一瞬わからなかった。解らなかったが・・・頭に手がのせられていた

優しい。そして暖かい。どこか昔に無くしてしまった温もり

「よく・・・頑張ったな」

「うっ！手塚・・・俺っ！俺!!」

その言葉に蓮は抑え込んでいた感情を爆発させ、手塚に抱き付く

手塚もそんな蓮を優しく抱きしめる。自分の子供の様に優しく

「ゴメンっ・・・俺っ、俺っ」

「わかっている。シエーラに全て教えてもらった。頑張ったな」

すべてを理解しているよ。そう俺に呟いて



——それから

それから蓮は全てをぶつけた。あのためのライダーバトルの事。そしてその後の事。今起こっている事。口から吐き出すくらいの勢いでいろんなことを話した。

時間が許す限り

そしてこの時、蓮は忘れていたのだ。いま何んでここにいるのか

『ねえ蓮、手塚に色々話したいことがあるのは解るけど、いいの？こつちにあのメガネの生徒会長が向かっているわよ？』

あつ・・・！

忘れていたのだ蓮は。思わず舞い上がってしまったが為に集中しすぎた！手塚図かと一緒にいる所を見られたら非常にメンドクサイ事になるではないか!?

「手塚、話の途中で悪いがこのままミラーワールド経由で俺の家へ向かってくれないか？」

「そうだな。確かに俺が此処にいとどちらにせよ不味いな。」

“ 変身！” した手塚もといライアは、蓮に手を上げて“ 先に行っている ” と示すと鏡の中に吸い込まれていく

タイミングが良かったのか。手塚が居なくなると同時に上の階段から小走りで、こちらに向かって駆け寄ってくるメガネの貧乳会長

「ハアツ！ハアツ！・・・つ、今私のどこを見て、何をっ！どういう風に考えたかは一先ずは置いておきましょうか（ニコ♪）」

いや・・・♪つけても怖いですから

若干その迫方に退いてしまう。しかしなぜ彼女が此処にいるのだろうか？もうゲームは終わったのか？

「ゲームは・・・終わりました。」

目に見える様な落胆さ。そして納得できない様な感情がその表情から伝わってくる。

まったく・・・あんたにそんな顔されるとこっちまで気が滅入るよ

思わず、彼女の肩を叩き。その口から残酷な結果を告げる

「負けたんだろ・  
・  
・部長は・  
・  
・なあ、生徒会長」

## 第10話 【朱乃の想い】

——駒王学園 オカルト研究部部室——

「負けて……しまいましたわね」

朱乃はただ1人、誰もいない部室に重い溜息を吐く

あれから2日、フェニックス眷属とのレーティングゲームで負けた後、私は冥界のベッドで目が覚める。そして知った。私たちは負けたのだと。イツセイ君は2日経った今でも目が覚めず、アーシアちゃんもその看病で学校に姿をあらわしていない。

リアスも今は冥界に、4日後の婚約パーティーの為に軟禁され、祐斗君も小猫ちゃんもそんなリアスに付き合っている。

皆自分が今やることをやっている。

それなのに、それなのに私は何をやっている？

私はここで何をやっている？

リアスがライザーの下に嫁げば彼女は必然的にこの学園から去ることになるだろう。そして、彼女の女王である自分も当然離れることになる

だけど自分はここを離れたくは無かった。

まだ、まだここに居たい！自分勝手なのは十分わかっている。解っているのだ……だけど、だけど私はまだ……蓮と離れたくない。

“ゴトン”

その時、誰もいない部室の奥、丁度何時もリアスが座っている机から何か堅いものがぶつかる鈍い音が聞こえる。

何だろうと机の近くに近寄ると銀の懐中時計が転がっている。

落ちた拍子か何かだろうか、丁度蓋が外れて中の文字盤と、蓋の背面から除く家族の写真が目に入る。

「あら？…これは……」

それは教会やはぐれ悪魔から自分たちを守った謎の男。仮面ライダーナイトが自らのコートと共に置いて行ったもの。

なぜ今、こんな物が此処にあるのだろうか。確かりアスが預かると言っていたが彼女が机にしまったままにして置いたのだろうか？



思わず手に取る朱乃。ふと3人家族の写真に目が行ってしまふ。母親が子供を抱き上げ、父親がその隣、3人ともカメラに向かって幸せそうに笑っている。

本当に幸せそうに

「失礼します。やはりここにおられましたか朱乃さん」

部室の扉の前、黒く長い髪を波打つように揺らして自分に近づいてくる。

生徒会副会長にしてソーナの『女王』でもある椿だ。今日はソーナどころか眷属の一人も周りには居ない。彼女だけが訪れることは滅多にないのに

「椿さん? どうしましたか? 残念ですがリアスは今冥界で」

「いいえ。今回はあなたの様子を見に来たのよ。同じ女王ですもの。今回の件は会長ともども、残念でなりません。」

「いえ・・・仕方の無い事ですから」

態々こちらを心配してくれるのはありがたい。けれど、今更誰が何と言おうと結果は変わらない。リアスはライザーと結婚し、私もこの駒王町を離れる。『女王』である以上

にリアスの下を離れるという事は出来ない。

私はリアスに救われたのだから

唯一この状況を如何にか出来る存在。彼女の兄であり魔王様でもあるサーゼクス・ルシファー様だが、あの方の『女王』でもあるグレイフィア様が態々審判を務めた試合で負けたのだ。

あの方が表だって動くことはもうないだろう。

最早絶望しかないことを表情に浮かべる朱乃。彼女の表情から最早同情せざるを得ないと椿はふと彼女が握る銀時計に気づく。

「あら？朱乃さん、その手に持つ物懐中時計は？」

何かのお守りだろうか？と気になってしまう椿に、私はそういえば握りしめたままだった銀時計を彼女に見せる。

「え．．．ああこれはある方の落とし物ですね。できれば探して返したいんですけど、誰の者かわからなくて。手がかりはここに映っている写真なんですけど」

椿に見せやすいように、写真の向きを椿に向け、椿もその写真に写っている人物をよく見ようと目を細める

「えっ．．．この人って」

「椿さん？この写真の男性を知っていますの？」

椿は思わず面食らった様に目を丸くする。どうやら彼女はこの写真の男性を知っている様子

「ええ．．．と言うよりあなたは、喫茶店『バカランダ』と言う店を知っていますか？」

バカ．．．ランダ．．．!?!その店の名前は聞いたことがあった。

確か小猫ちゃんが毎週スイーツを楽しみに通い詰めている店でもあり、蓮の父親がマスターをやっている店ではないか！

「この男性は、『バカランダ』のマスター、相川始さんと言って、とても美味しいコーヒーを入れると評判の男性で、確か相川君のお父様だったはず。」

「蓮の……お父様。ならこの隣に映っていらつしやる女性は」

「蓮君のお母様と言う事になるのでしょうか？しかし、こうまじまじと見るとあなたと瓜二つの顔ですね。それでこちらの小さい男の子が蓮君……はふう！ちっちゃい蓮君は可愛いですね〜」

思わず顔に手を当ててうつとりと小さいころの蓮を見つめる椿。

だが、朱乃は手にもつ写真、にこやかに笑っている蓮の父親が。『ナイト』なのだろうか……

一瞬、怪訝な顔色を浮かべるが、どうにも納得できない。蓮の父親が仮に仮面ライダーナイトならおかしい点が幾つかある

まずあの日、墮天使レイナーレによって一誠が殺された日。私たちがナイトを見た時間帯は午後の17時位だったろうか

あの日は日曜日だけあって、当然店には人もいるはず。少なくともナイトは30分以上はあの場にいたことになる。店の、それも喫茶店のマスターが稼ぎ時にそんなに離れるだろうか？

そしてもう一つ、タイミングが良すぎる。

ナイトは私たちがミラーモンスターに襲われている時に現れ、そして墮天使のアジトである教会に関しては私達より先に潜入していた。

たった2回。たった2回だが偶然にしてはタイミングが良すぎる。ましてや小猫以外はほとんど面識がない

学生でもないし、ストーカーでもありえない程に行動が速すぎる。

その上、『ナイト』の声は男性だとしても、少し若い。私達位の年の印象を受けた。し

かし、この写真が撮られた日付は14年前の者。いくら若く見えても声自体は!?

ドクンツ!

一瞬頭の中に何かがよぎる。突然の心臓の高鳴りに表情が凍り付いてしまう。

写真は14年前にとられたもの……そう自分は考えた。

ならば今……この写真に写る子供は幾つだ?

(恐らく……15から20歳くらい)

この子は誰だ?

(相川……蓮)

この子は今……何処に所属している?

(駒王学園2年……そして、オカルト研究部の部員)

声が年相応に若く、時間に縛られない、かつこちらの行動をある程度先回りできる。

すべての条件と言うパズルが次々に組み合わさり、私の思考の中に絵として現れた蓮に内から溢れ出す衝動が最早抑えることができなかつた。

「……と言う事で非常に残念ですが相川君は「蓮」っ！朱乃さん!」

驚く椿を押しつけ部室を飛び出していく。確か今日はまだ学校に残っているはず。今日はまだ

西に沈んでいく夕日が朱乃の姿を紅く照らす。

明日でもと一瞬頭に過る考えを振り払い朱乃は走り続ける。

何故だかわからない。何故だかわからないが今日で会えなければ後悔してしまう

もう二度と会えなくなる様な。そんな不安が私の頭を過る。

走り続ける朱乃は必死に蓮の居そうな所を探す。

教室、生徒開室、その他、蓮が居そうな場所を必死に探すが無処にもいない。

焦りもう帰ってしまったのではないか？

思い出したのだ。

彼なら、彼なら蓮の居る場所を知っていると

向かった先は体育館の横にある建物。表の看板には駒王学園、剣道部と書かれている。その建物には大勢の駒王学園の生徒が集まり、中ではもう日が沈むというのに、必死に声を張り上げて竹刀を振り下ろしている剣道部員の姿が見える。



「ざわざわっ」

「あれっ！おいあれ姫島先輩じゃあ」

「マジか!?!おいおいいったい何でこんな汗臭い所に」

「ざわめき始める部員たち」

朱乃は自分に集まる視線を華麗にする―し、目的の人物を探し……見つけた。

朱乃に気づかず一人必死に竹刀を振るうその目的の人物に

「失礼しますー!」

「えっ!あつ……先輩!」

一言断ると黙って上がる。朱乃に思わず声をかける生徒がいるが、彼女は気にせず目的の人物まで歩み寄る。

「ん？・・・あなたは・・・どうしてこんな所に」

こちらに気づいたからか防具を外し、汗をぬぐう

蓮が校内でも最も一緒に行動している人物

「貴方に教えてほしい事があるんですの・・・神代君」

その頃……

「つまり、子供の方は会話ができるような状態ではないんだな」

『そうなんですよ。何というか……言葉に表せないくらい深刻で』

ふむと顎に手を当ててどうするか考える蓮

まさか朱乃が自分を探しているなど終ぞ知らない蓮はアジユカ製、改造携帯電話で連

絡を取り合っていた。

相手は現在、冥界の失踪事件の調査へと送り出した佐野

「リアスが勝てるとは想像していなかったが予想外なことに、あと数日経てば、婚約パーティーが行われるとか。」

電話の向こうで佐野の嫌そうに引いている表情が目には浮かぶ。実際に蓮としてもこの進行速度は異常だと

恐らく予め、予定されていた事なんだろう

胸糞悪いぜ

『だけどよ旦那。正直黒幕はもうわかっているだろう？ さっさと仕留めた方が』

確かに。佐野の言う事も解る。だが

「フェニックス家の周囲にはミラーモンスターの気配があるんだろ。それに、本当に敵が奴だけなら問題は無いがな」

『どういうことですか？まさか悪魔が』

悪魔なら・・・か

悪魔ならまだいい。魔王、最上級悪魔クラスの化け物さえ来なければ対処できない訳でもない

だが

“ガコン”

ん？誰か屋上に来たのか？

「佐野、悪いが誰か来た。続きはまた後だ」

「えっ……いやちよつと旦那!？」

“パタツ”と携帯電話が閉じられ、懐に携帯電話をしまう。

ここは本来、立ち入り禁止の屋上。一般の生徒が、ましてやこんな夜暗い時間に来るわけがない

ギイイイイイイ

鈍い鉄の扉が開かれる。蓮がこの場に残っていた理由は2つ、一つはここならば滅多に人が来ない、または居ても追い出せば良いだけの事

そして2つ目、それは人との待ち合わせ

別に屋上でやる理由はないが、自分も待ち人もここならばすぐに集まれる。

そう考えて決めた待ち合わせ場所だったんだがな

「ツツ!?・・・参りましたね。何であなたが此処に」

思わず額に冷たい汗が流れる。待ち合わせていた人物は蓮の親友でもある剣、そして、レオのはずだった。

だからこんな所を待ち合わせにしたのだ。なのに

「なんであなたが此処にいるのか。説明してもらえますか?朱乃先輩」

「そうね。あなたにどうしても会いたかったから。じゃあダメかしら?蓮」

何であなたが此処に来るかな。





「俺に会いたかったから？それは一体どういう意味ですか？」

「あら？そのままの意味のつもりなのだけど？」

不敵に俺の目の前で笑う朱乃。何時もの笑みに若干影が見えるのは……リアスの件か

「今回の事は生徒会長から聞きました。残念でしたね。」

「ええ……。でもあなたの事、あなたのその右腕の事は、今後はソーナ会長が面倒を見てくれるから」

悲しそうな表情を浮かべる朱乃。面倒が見られない、つまりこの学園に居られなくなる。またこの学園に居られる時間が少なくなると言う事か

「辞められるのですか？この学園を」

「……………解りません。ですがリアスが冥界に向かっては、『女王』である私は付いて行かない訳にはいきませんから」

「そう……………ですか」

思えば仕方の無い事かも知れない。そもそも関わり合うはずもない関係だったのだ。

これで……………そう、これでいいんだよな

「それじゃあ。最後のお別れ……………ってことで会いに来てくれたんですか？」

「そうね……………本当は黙って行こうかと思っていたわ。でも……………抑えられなかったの」

朱乃は制服のスカートからそれを取り出す。それは銀色に輝く、この世界に2つと無い懐中時計

「なッ!?なんで・・・それを、その懐中時計はッ！」

嗚然とするしかなかった。それはこの世界で唯一、相川蓮しか持ちえないただ一つの形見

「これはあなたの物ですね?蓮」

「そっそうです! いや、何処に落としたり探していたんですよ。は・・・ははは」

頬が引き攣る。この懐中時計は、どんな時でも一緒に居られる。そういう意味を持って母から、そしてあの人から幼いころに貰った・・・

その中には、小さいころの、自分が3、5歳くらいに撮った写真が納められているはずだ。当然それを見た上で。

「見たんですね」

「ええ……勝手ながら。あなたと初めて会った時、あなたは驚きのあまり泣いていました。が、やっとその意味が解りました。」

「すみません。……あなたと母を重ねてしまった。不快に思われたのなら、謝罪します。」

深々と頭を下げる蓮。しかし、朱乃は黙って首を横に振るう。

「私は言いましたよね。2人の時は、朱乃って呼んでと。私は本気です。だからこそ、最初はこの内に抱く葛藤を抑え込んで、合わないつもりでした。」

私はあなたに振られたのだから。彼女のその一言が蓮の心を揺さぶる。

「でも、この懐中時計の持ち主があなたとわかった時、私は……私はあなたに会いたい」と同時に確かめたいと思っただけ」

「確かめたい？ 一体何を確かめると言うんですか？ この懐中時計の持ち主なら確かに俺

ですが」

「違うわ」

違う？ 一体何を確かめたいと言うんだ

朱乃はただ何も言わずに首を横に振るう。その表情からも何を言っているのかわからない

「わからない？ この懐中時計はコートのポケットの中にあつたのよ。」

……………コートの……………ポケット……………ツ!?

朱乃の真意に思わず動揺を隠せない蓮

余りの予想外、まさかアジアに渡したままのコートの中にあの懐中時計が

「貴方が・・・仮面ライダー・・・ナイトだったのね。蓮」

## 仮面ライダーナイト

嘗てミラーワールドにてその存在を知らぬ者はいなかった。

冷静に戦場を分析し、常に的確かつ冷酷、卑怯ともいえる残酷な手口であらゆる敵を、あらゆるライダーを葬ってきた。

そんな蓮だがただ一つだけ、その正体だけは最後まで、一部のライダーを除く、他のライダーには正体がばれないように慎重に慎重を重ねていた。

はず……だったんだがな。

「は……は……!! あつははははは!! そうかつ! いやまさかこの懐中時計が。母さんの形見がまさか仇になってばれるとは……解らないものだ、本当に解らないものだ」

「っ!?!」

顔に手を当て突然狂った様に笑い始める蓮。顔に当てた右手の指の間から射抜くよ  
うな冷徹な眼光が朱乃を射抜く

蓮から放たれた異常なほどの殺気に思わず朱乃は身を震わせる他なかった。

(こんな濃密な殺気！今まで感じた事なんて)

“ 殺される ”

【雷の巫女】と一部の人間からは実力が評価されている。戦闘もはぐれ悪魔なんかで経  
験が無いわけでもない

そんな実力がある。朱乃でもそう感じさせるほどの殺気



普通だったら失神するか、体が板のように硬直して思うように動かせないほどの殺気を朱乃に向かって発し続けているはず。

なのに

なのに何で

「なのに何であんたはっ！俺を憐れむような悲しい表情を浮かべるんだよ！」

彼女の表情からは「恐怖」は見えず、逆にこちらを「かわいそうな目」で見つめる。

やめろ

そんな目で、そんな目で俺を見るな。憐れむな！

「ダークウイング!!」

“キイイイイイ!!”

「ミラー……モンスター」

蓮に呼ばれてやってきた蝙蝠型ミラーモンスターにして、ナイトの初期からのパートナー【ダークウイング】

屋上を旋回するように一周飛行した【ダークウイング】は主である蓮に向かい合う形で空中停止する。

「命令だ！……その女を！その女を殺せ!!ダークウイング！」

“蓮”と小さく朱乃は呟く。蓮は無情な決断を、目の前の朱乃を殺すようにダークウイングに冷酷な命令を下す。

だが

「何故だ。．．．何故命令を聞かない!!ダークウイング!!!」

何度命令しても、ダークウイングは動かなかった。契約者の呼び声に答え、契約者の命令に絶対に従う。それがミラーモンスターのライダーの契約のはず

なのに「ダークウイング」は動かなかった。

ただ真つ直ぐに、こちらをを直視したまま動かない

“キイイイ。キイ。キイイイイ”

悲しげな鳴き声を上げる。

ダークウイングの言葉に俺は思わず啞然としてしまう

「なん……だって、俺が……あの女を殺すのを拒んでいるだ。」

俺が目の前の女を……朱乃を殺すのを拒んでいると言うのか！

この俺が、この俺が

「巫山戯るな……巫山戯るなよ！ダークウイング。お前が動かないのなら俺が直  
接手を下すまでだ!!『変身!』」

Vバックルにカードデッキを装填した蓮の体が鏡合わせの様に重なると同時に、その  
姿が漆黒の仮面ライダー、ナイトの姿へと変わる。

ナイトは左腰に添えられた翼召剣ダークバイザーを右手に添え、一步で朱乃の目の前  
まで移動し、剣を振り上げる。

「さようならだ！何か最後に言い残すことは」

「……………」

最後の最後になっても憐れみを消さないか……、死ね！

月の光に照らされた白人の刃が朱乃の首に向かって振り下ろされ、朱乃は一瞬、体が恐怖震える。

『あつ……………あ……………れ……………ん』

蓮の脳裏と朱乃の姿が重なる。同時に、振り下ろされた剣が空中で止まる。

“バリイン”

鏡が割れる音に目を恐る恐る開けた朱乃。その目に写った蓮の姿に胸が引き裂ける  
思いになる

蓮は泣いていた。腕に力を入れずにと脱力した状態で、その手に握っていたカード  
デッキが落ちると同時に思わず膝をついてしまう程に弱弱しく見えた。

「蓮っ！」

体を暖かな温もりが全身を包む。どこか懐かしいと思えるような温もりが蓮を包む

解らなかった。何故この女性は自分を抱きしめる。何故泣く。俺はあなたを殺そう  
としたのに

「ごめんなさい。あなたの事をわかってあげられなくて。あなたの苦しみを分かっ  
てあげられなくて。」

だから何故あなたが謝る。謝るべきは此方のはずだ。なのに何故

「なんで……謝るんだよ。謝らないでくれよ」

自分自身、自分の気持ちが解らないでいた。殺すべきかそうではないか。

「リアス達にはあなたの事は言っていないし、教えるつもりもありません。だから大  
丈夫よ」

「何故……何故そこまで俺に優しくしてくれるんですか。俺はあなたを」

蓮は抱き付いたまま思わず幼少のころの癖彼女の胸に顔を埋めてしまう。そんな蓮

の頭をなでながら、赤子をあやすように扱う

「例えあなたが私にお母様を重ねていても構いません。私は蓮が好き。それがどんな形であれ私を求めてくれたらそれでいいですよ。」

でも、と言葉を濁す朱乃。その理由は解っている。ライザーとの婚約。リアスがこの場を離れれば朱乃もそれに付き添って離れていく

朱乃だけではない。小猫や木場、一誠にアーシアも離れていくことになる。あの戦いのない、暖かな空間が

「だからこれで最後。ごめんなさい。もっと沢山、抱きしめてあげればよかったわね」

それが彼女との、この場での最後の別れになった。





朱乃が屋上を立ち去った後、蓮は後に合流した劍やレオと連れ添って家に戻った。

い  
2人とも、特に劍に関しては朱乃に屋上を教えたからか何時ものおちやらけた声は無

レオも劍から聞いていたためか、それとも空気を感じ取ってか、最後まで黙ったまま  
だった。

## 蓮の部屋

ベッドと写真以外何もない部屋だった。パソコンは別宅の方にあるしテレビもあつちだ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暗い部屋で蓮は電気もつけないまま黙って下を向いていた。如何すればいいか解らなくなっていたのだ。感情のまま動けば俺だけじゃない、仮面ライダーと言う存在に悪魔や墮天使。天使などのこの世界の者たちにその存在を知られる。

だが、動かなければ朱乃たちを見捨てることになる。

本当にそれでいいのか・・・本当に

「シエーラ・・・お前はと思う。如何すればいいと思う？」

自分の右腕に意識を向ける。すると念じてもないのに右腕は深淵(アビシヤルエタニテイ)と永劫の鍵の鍵の漆黒の鎧に覆われ、手の甲の眼球が俺の視線とかち合う

シエーラの瞳、深淵(アビシヤルエタニテイ)と永劫の鍵によつて生まれたのろいの眼光が静かにその瞳を細める。

『私には答えられない。私は唯の神セイクリッド・ギア器、あなたの意思は私の意思。』

そうか・・・それはそうだよな。こいつはもともと神セイクリッド・ギア器に封印された規格外の存在。所詮は俺の決定には逆らえない

「すまない……余計なことだったな。」

質問するだけ無駄か……そう結論付けようとする蓮。だが

『でも……一つだけ言えることがあるわ』

言える事?……

意味深な答えを返してくるシェーラにセイクリッド・ギア神器の解除を止め、自らの内に意識を集中させる。

『……後悔のない選択肢を。かな……』

何処か思慮深い、しかし単純なその答えに俺は直ぐに答えを返すことができなかつた。

後悔の無い選択肢。それは今までの自分を振り返ってみると言うシエーラなりのアドバイスなのだろう

そうか……後悔の無い選択肢

『セイクリッド・ギア神器に封印された私だけど後悔はしていないわ。聖書の神を恨んだ事もないし、私を旨く扱えなかった使い手たちを侮蔑したり、蔑んだりした事も無い。』

だって

『全ては貴方という使い手に出会う為の通過点だと思っているのだから』

．．．．．通過点

シエーラの言葉が脳内で繰り返し、再生される。

そうだ．．．．．そうだった。俺は何を迷っているんだ。

俺は何のためにこの力を手に入れた？

殺すため？

破壊するため？

守るため？

違う、違う、違う。全てだ。

俺が愛する者、大切な者を全てを守り、それらを奪う者を滅ぼし、全てを破壊する。  
今までもそうではないか。

確かに、行動に対する結果、後悔する事は沢山あった。



母さんは死に、手塚も死に、城戸も死んだ。大切なものを失っていった。

だが、今回は違う

行動しなければ奪われる。なら奪わせないために行動しろ。

俺から奪っていく全ての奴等から奪え。邪魔をするものには容赦をするな。どんな汚い手を使ってでも奪わせるな。奪え。

そうだ……何を迷っているんだ。奪われる前に奪う。殺される前に殺す。

今までだってそうやって来たじゃないか。

『どうやら……あなたの意思は決したようね』

「ああ……2年間、ぬるま湯に浸かり過ぎた。奪う前に奪え。殺される前に殺せ。そういうことだ。」

蓮は壁に立てかけてあつた漆黒のコート。朱乃が最後の別れと共に手渡した漆黒のコートを着込むとゆつくりとした足取りで店の外へと歩みだす。

途中店の手伝いをしていたであろう木場（勇）や総司とすれ違ったが二人とも蓮がまとう雰囲気に声をかけることができなかつた。

そして、外へと続く扉を開いた蓮を3つの影が待ちかねていた。

「おいおい！わが友、蓮よ！ここで頼らないのはどういうことだ？」

「そうだよ。僕らの力がそんなに信用できないかい？」

白いスーツに身を通した、手にジェラルミンケースをぶら下げている剣

青と白のなタンクトップに【SMRT・BRAIN】とロゴ書きされたジュラルミンケースを床に置いているレオ

そして

「俺は絶対にお前を守るとある人に誓った。だからこそ、お前が闘うと言うなら俺も闘うまでだ」

オレンジ色の上着に白いTシャツ。手には赤紫色のライアのカードデッキが握られている。

「後悔するぞ。俺がこれから行おうとしていることは」

血で血を生み出す争い。殺し合いだぞ

そう言葉にさつきを乗せて放つ。だが

「だから？言っただろ蓮。俺は、いや俺たちはお前と共に戦うと。それがどんなに理不尽なものであろうとも。」

「同感だ。爺やが言っていた。男にはどんなに世間から攻められ非難されようとも、共に戦い抜かなければならない友が居ると」

「僕も元からそのつもりだしね。」

手塚はやわらかい物腰でだがはつきりと言いつ切った。

剣もレオもどちらの意志も固く、誰も引き下がろうとしなかった

『物好きがたくさんいるな』

…本当にな

思わず微笑が止まらない。これから命を奪い合う戦いに赴くと言うのに

「ならば行こうか。俺から奪おうとしている愚か者に、自分が、何を敵に回したのかを」

「「ああっ!!」」

この時、勝利の美酒に浸かっていたライザーは知らない

自分が敵に回ってしまった者の大きさを

そして全ての悪魔は知るだろう。この世には自分たちが知らない、強大な力を持った者がまだ居ると言うことを。

## 第11話 守る者の為に

——とある古城

「おいつ！A班、B班は表を、C班、D班はそのまま裏門を、残りの班は会場内の警備に当たれ！」

「はっ！」

主催会場である中世ヨーロッパ風の城ではフェニックス家が用意した下級悪魔の兵隊が物々しい数として城全体を周辺から囲むようにして展開していた。

上級悪魔同士の、更に言えば魔王サーゼクス・ルシファアの妹でありグレモリー家の跡取りであるリアス・グレモリーの婚約パーティーが行われるからである。

ある愚かな上級悪魔は言う。この警備を破って来れる等、SS級のはぐれ悪魔でも無理だと。

この物々しい警備を突破できるものなどいない。無理であると

だが悪魔たちは知らないのだ。この世界には自らの知らない勢力や力がある事を



警戒態勢の城の一角

「良いよなく。上の連中は今頃優雅にパーティーだぜ」

大理石でできた壁を背に兵士の1人が愚痴をこぼす。他の兵士も苦笑いしながら同感だと言うように頷く

「確かにな。俺らも美味しい飯にありつきたいぜ。」

「そう言うなって、もし隊長にそんなこと言ってる事がばれたら、お前。減給だぞ。」

「うへええ、それは嫌だな。やめよ辞めよこんな話」

「「あはははは!!」」

楽しくも和気あいあい。そんな様子で適当に警備の形をとるだけの男たちは完全に

この警備力を掻い潜ってくる人間は居ないと誰もが思っていた。

だが、そんな油断こそが己が死を速めるとは知らずに

キイイイイイイイン！キイイイイイイイン！

「ん?・・・おい、何か目の前のガラスに何か映らなかったか?」

「はあ?おいおい、余りにも暇だからって今度は会談でも始めようっていうのかよ」

「そうだぜ。いくら暇でも仕事なんだから。ばれない程度に真面目につてな」

残りの兵士たちが、馬鹿にしたように笑う。兵士は気のせいかな?と恐る恐る鏡に近づいた時だった。

「グオオオオオオ!」

グシヤツ!

「はっ?」

獣の雄叫びが廊下に響いたと思いきや目の前の鏡に近づいた兵の頭が消えた。

いや・・・消えてはいなかった。ただ消えた頭の所には、目の前の、自分の同僚だったものが喰われていた。

鈍く光る黒銀の化け物に

「うっ！うわあああああ!!化け物だああああああ！」

兵士の1人が錯乱し、武器を手放す。

逃げろ。ただその言葉が頭の中でサイレンのごとく鳴り響く。

しかし、逃げ出そうとした兵士が後ろに振り返った際に何か堅いものにぶつかる。

目の前に壁があるはずは無い、そもそも大理石の感触では無いと顔を上げる兵士が最後に見たものは

「は〜い、残念〜あんたはこれで、お・わ・り」

グシャツッ！グチャツッ！グチャツッ！

後ろの化け物と同様に黒銀の鎧を纏った人の形をした化け物だった。

「状況終〜了〜。相川〜次のステージは？」

男はまるでゲームを楽しむような声色で奥の暗闇に言葉をかけ、声の方向、暗闇に包まれた奥から3人は現れた。

「次は北東へ2 m行つたとところに3名ステージ2だ。その後は、まっすぐ3 m向うに2名、ステージ3だ。行け」

現れた男の内の一人、相川蓮は目の前で起こつた惨劇に目もくれず、それを起こしたそれにはき捨てるようにただ淡々と命令を下す。

「了解。久々に楽しいゲームになりそうだ。」

それはこの惨劇をゲームと口にする、楽しげに次の獲物の元へと向かつていく。

「なあ・・・蓮」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「蓮・・・気持ちは解る・・・解るがこれは」

余りにもやり過ぎだと。剣は言うが蓮にとってこんなことはやりすぎには入らないし関係ない

この兵士たちが俺の邪魔をするというのなら、容赦なく排除する。例え誰がなんと言おうと関係ない

「蓮……僕は殺して来た側だから剣のように罪悪感を感じることはない。だけど君は」

「レオ……関係ないんだよ。俺は俺の目的のために全てを破壊する。俺の障害になるものはすべて排除する。言っただ俺が邪魔だと思ったものは全て奪う。その命さえもだ」

「……すまない。考えが甘かった。俺も覚悟を決めよう。」

剣は納得できないと言った表情を切り捨てる。そうだそれでいいんだ。

余計な感情を持てば隙が生まれる。隙が生まれれば奪われる。命も、大切なものも全  
て

だからこそ奪われる前に奪うんだ。

そして、あの子の無念を晴らさなくてはならない。

あれは・・・そう。今から1日前・・・今日、この日を迎える前日

蓮を含めた4人は、ミラーモンスター犠牲者の中で、唯一の生き残りであり、佐野  
によって保護され、アジユカ・ベルゼブブのライダー研究所に収容されている小さな子



供の様子を見に行った。

---

1日前

蓮、剣、レオ、手塚の4人は冥界にアジュカが納める土地、そこにそびえたつ研究所の中の一つに来ていた。

ここで保護されている、ミラーモンスターの犠牲者、失踪事件の被害者の子供の様子を見に来たのだ。

「旦那……お待ちしました」

「よう……大分……やつれたか？お前」

数日前、冥界に送り込んだ佐野だったが、目の下には隈ができており、誰が見ても疲れが目に見える。

オーデインもいるとは言え、流石に2人のライダーにこの広大な冥界の土地を任せるのは酷だったか。

「主」

ふと重苦しい声が蓮の横、研究所内に取り付けてある鏡から発せられる。

鏡には神々しい黄金の羽が舞い散っている。その中心にいる高圧的なオーラを放つ仮面ライダー、最強のライダーにして忠実なる僕、オーデイン

「佐野 満が疲れている理由は、フェニックス領付近でナンパにいそしんでたからだ」

「ちよっ!?!あんた何でそんな事! 違うんですよ。これには深い、山よりも高く、谷よりも深い」

ほう……ここまで来ていい訳か。シエーラ……やれ

『あらあら〜いけない子には〜キツイお仕置きよ♡』

「ぜえ．．ぜえ．．ぜえ．．ぜえ．．すつすみませんでした。ちよつとした出来心か。」

「シエーラ．．やれ」

『うふふふふ』

「ストップ！ストップ！！ちゃんと仕事はしておきましたし。最近はこの研究所から出ていませんって」

実は、と佐野は浮かない表情で話し始める。

話を聞く限り、佐野は自らあの子供の世話を買つて出ていたらしい。というより、佐野以外が近づくと脅えてしまい、仕舞には泣き出してしまふとか。

だからこそ佐野が子供に付きっ切りになる羽目になり、結果

「こんなに疲れてしまったと。フェニックス家の探りはオーデインに任せればよかっただろう」

「いや、まあそんなんですけどね。俺があと少し間に合つていればと思うと・・・遣り切れないですよ」

その言葉に俺は一瞬目を見開いてしまう。かつての佐野では絶対に聴ける言葉では無かった。だからこそ、うれしかった。

そんな他愛の無い会話から、現在の状況まで、詳しい状況を聞いているうちに、俺たちは薄いガラスで隔たれたある部屋の前で立ち止まる。ガラスの向こうでは一人の子

供がただ扉をボーッと見つめ続け誰かを待っているように見える。そして、子供の側にはメイドが一人そばに寄り添っている。

「この部屋です。申し訳ないけど旦那以外の方は」

「わかっている。俺たちはこの部屋の前で待っていればいいのだろ。蓮」

「頼む。手塚、剣、レオ。お前らにはここで待っていてくれ」

佐野が部屋の鍵を解除した音が聞こえ、自動ドアが開く

「サノのおじちゃん！」

「こらくおじちゃんじゃ無いだろ。お兄ちゃんって呼べって言っているだろ」

苦笑いを浮かべながらも、よしよしと子供を抱きとめてその頭を撫でる。まるで父親のようにも見えるその光景に、自然と笑みを浮かべてしまう

「あの……佐野様。そちらのお方は」

「ええ……紹介しますよ。この人が俺の上司である。旦那もとい相川蓮。旦那、こちらミラーモンスターの被害に遭い。戦極博士に助けられた」

「レビイー・アナスタシアと申します。この度は私とこの子を助けてくださり、ありがとうございます。うございしました。」

「相川蓮です。そんなに畏まらないでください。あなたを助けたのは戦極凌馬です。それに、助けられない命もたくさんありました。お礼を言われる価値はありませんよ」

レビイーはから視線を外すと次に俺は佐野にぎゅつと抱きついて恐る恐るこちらの様子を伺っている子供に視線を移す。

子供は脅えていた。無理も無い。あんな目に合わされては見知らぬ人を恐れても仕

方が無い。そう考え、俺は満面の笑みをあえて浮かべると佐野の背中越しに、その小さな頭を優しく撫でる。

「こんにちはわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

佐野も見かねたのか抱きついていた子供を地面におろす。俺も子供の視線に合わせて合わせるようにして姿勢を低くし、何度も何度も挨拶を繰り返す。

「こんにちはわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・こんにちはわ」

「うん、偉いね。ちゃんと挨拶できて、偉いよ。お名前は何て言うのかな？」

「・・・・・・・・ルビー・カーバンクル。5歳」



「そっか。ルビー君て言うんだ。お兄ちゃんはね、君の後ろにいる佐野のおじちゃんのお友達で相川蓮つて言うんだ」

「おじちゃん……っつて」

うるさい。おじちゃんだろうがなんだろうが黙っているのと一瞬強い視線で黙らせる

「サノのおじちゃんのお友達？」

「そうだよ。だから心配しなくても大丈夫。ほら、ルビー君にお土産があるんだ」

俺は懐から冥界に来る前に買ってきた仮面ライダーナイトのぬいぐるみを手渡す。  
なぜそんな物があるのかは聞かないでくれ

「わっかつこいいい!!」

むぎゆくとぬいぐるみを抱きしめる愛らしい姿によかったと安堵する。総司に感謝しないと

「旦那……なんで自身のぬいぐるみ？……いえすみません黙っていますハイ！」

うん黙ってしよう。余計なことを言うとうどうなるかやつと判ってもらえたようだ。

「あいがとう。えーつとレンおにいちゃん」

「うんうん。偉いね。ちゃんとお礼を言えて。」

それから俺とルビー君は佐野とメイドのレヴィーを交えて数時間ほど他愛も無い話をした。特にルビー君は家族のことについて本当に楽しそうに話してくれた。

お父さんは小さい頃に亡くなり、顔も覚えていないと。母親と2人、それも5歳の子供だ。母親に甘えたがる年頃なのにその母親が犠牲になってしまった。

悔やんでも・・・悔やみきれない

『蓮』・・・悔しい気持ちはわかるけど、子供が心配するわよ』

・・・そうだな。今本当に辛いのはこの子だろうな。この子が我慢して絶えているのに俺がこんな顔をするわけにもいかないな

「ねえお兄ちゃん」

「ん？どうしたのかな？」

再び無理にでも笑みを浮かべる俺に、ルビー君は“こてん”と首をかしげる。何か聞きたい事でもあるのだろうか？・・・そう思っていた俺は次のこの子のこの言葉に言葉も出なかった。

「ママ・・・いつ帰ってくるのかな？」

「「「ツツ!!?」」」

何・・・だって。

「ママは今、お仕事で遠くに行ってるんだ。おじちゃん、おばちゃんも居なくなつて。早く遭いたいよ」

それから俺と佐野はレビィーにルビーを預けると部屋を移した。ちようど話を聞かなければいけない人物も居たからな

移動した部屋は一流企業の大会議室のように広く50人は余裕で収納できるような場所

そこで俺はある男と対面していた。

この研究所の主でもあるこの男、アジユカ・ベルゼブブに

「記憶を弄ったのか」

「そうだ。それがあの子のためと思ってやったことだ。だが母親に対する意思が強すぎて敢然には改ざんすることができなかつた」

バキイツ！

「アジユカ様！」

「旦那！」

俺は自分でもわからない内に目の前で“そんなことか”と淡々と語るアジユカを殴りつけた。

興味がなさそうにしているその態度が気に食わなかった。

何時もなら気にしない態度だが今回は別だ。他人の、それもあんな小さい子供の記憶を

「何故だ……何故記憶を……答える。アジユカ」

俺は抑えようとしても抑えられない殺気をぶつける

アジユカはしばらく考えたようにゆっくりと立ち上がるとその瞳で蓮を確りと見据え語る。

「全ての子供が君のように耐えられる訳ではない。君は今の、5歳の子供に母親、そして叔父夫婦の死を受け止められると？」

「っ!？」

何も言い返すことができなかつた。確かにあの年の子供、しかも唯一の肉親である母親が殺され、遠縁の叔父夫婦さえも殺された。

精神的に幼い子供がそんな事実を受け止められるか？

いや・・・受け止められるわけが無い。俺のような特殊な例が無いわけでもないがそんなことは稀だ。

仮に記憶を消さなければ・・・あの子は

「すまない。感情的になりすぎた」

「いや気にしなくても良い。解ってもらえて何よりだよ」



ところで

「所で、君は今回どうするのかな？」

「決まっている。あの子の母親を襲ったミラーモンスター、その裏に暗躍する存在、ライザー・フェニックス。それら全ての命を刈り取る。」

「ふくん。だけどフェニックス家、いやこの悪魔社会全てを敵に回すことになるよ？それでもかい？」

「それでもだ。だがそうはならない……そうじゃないのか？アジュカ」

「ふっ……なるほど。君も中々読みが深いね。僕が動くことまで考えているとは」

「簡単なことだ。お前にとって俺たちの持つ技術は手放したくないものだろう？それに今回のことが予想できなければそもそも調査依頼など出しはしないだろう。違うか？」

俺の問いに業とらしく驚いた表情を浮かべ、笑うアジユカ。

「なるほど……ならば時間も無いことだし、単刀直入に言おうか」

一呼吸入れるアジユカ。次の瞬間、纏っていたオーラが違うものへと変わる。何か他人の反応を面白がっている研究者の顔から、頂点に立つ4人の魔王の一人の顔へと

「魔王アジユカ・ベルゼブブとして依頼する。この冥界に仇なす全ての障害を排除しろ。

私の名の元に全てを任せる。」

こうして現在に至る。

アジユカの宣言によつて俺たちの動きを制限していた鎖は砕け散つた。

もう俺たちを縛るものは存在しない。何も考えずに、思う存分動ける。これ以上……  
奴等の思い通りにさせないしさせるつもりも無い。邪魔するものはすべて排除する。

## 会場

一方、グレモリー家、フェニックス家の婚約パーティー会場でも自体は動いていた。

リアスのことを思い、単身会場に乗り込んでいった一誠。他のグレモリー眷属の協力、そして何故かリアスの兄である魔王サーゼクス・ルシファアの一言もありライザールとの一騎打ちに持ち込めようとした時だった。

「お待ちください。ライザー様が戦うまでもありません。この下級悪魔の処理は私がしましょう」

何処からか現れた執事服を着飾った男。

魔王であるサーゼクスの言葉を否定するかのように割り込んできた男に周囲のざわ

めきが広がる。

「誰かな？ 私はライザー君と彼の勝負を求めたはずだが？」

「これは失礼いたしました。私、ライザーフェニックス様の執事をしております。香川英行と申すものです。先ほどの魔王様の発言大変よろしいかと思われます。しかし、一度負けた下級悪魔をわが主が相手にもう一度と相対するならばまずはこの私が、その実力が十分に相対するものである事を確認するのがよろしいかと。ここにお集まり頂いた方々も納得できるかと？ どうですか？ わが主」

「俺のほうは構わない。どうでしょうサーゼクス様。この香川、執事としても有能なれば、腕の方もかなりの物。私は別にこのまま相手にしても構いませんが、こちらの方が余興としては面白いかと思われます。」

ふむ……と考え込むサーゼクスだが周りの悪魔が「フェニックス家の執事ですか」「そ

の程度有能なのかしら」などと、ざわめき始める。

「確かに、ならばドラゴン使いくん、悪いが一度そのフェニックス家の執事と戦い、この場でふさわしい力を見せてくれるかな？」

一誠は予想だにしなかった展開に戸惑ってしまいが、このままではリアスの事を助けられない。そう考えた一誠はこの申し出を受け入れる。

「わかりました。そこにあんた！あんたに恨みは無いが、部長を取り戻すためだ・・・悪いが本気で生かせてもらう」

「ではお互いに合意を得た事で、グレイファイア、ステージを「必要ありません」何だつて？」

「必要ありません。ただ少し離れていたただければそれで宜しいかと。それに申し訳ありませんが勝負は一瞬で尽きます」

「なっ！あんた！なめるのもいい加減に！」

ストンツ

(ツ!?何時の間に!!)

一瞬で距離が詰められたことに気づけなかった。目の前の男は、挨拶代わりにと言うかのように一誠の頭を軽く叩いたのだ。

勝負の合図が無いとは言え、まったく反応することができなかった。

「これで解るでしょう。私と君では実力差があります。大人しく身を引いたほうが身のためですよ。」

「うるさい……俺はこんな所で引くわけには行かないんだ。部長のためにも、ブーステツド・ギア!!!」



『Boost!!』

赤龍帝の籠手を発動させ、一回目の倍化を行う。こうなってしまった以上もう後に引くわけにも行かないんだよ

「仕方ありません。死んでも文句は言えないでしょうし。死んだら死んだであなたのその腕は価値がありそうですし、今後の研究のひとつとして回収させて頂きましょう」

香川もぶつぶつと小言を呟き不気味な笑みを浮かべ。左から半分ほど体をずらし構える。

『では・・・開始してください!』

グレイファイアから場という開始が告げられる。だが勝負は開始早々一方的なものとなっていた。

一誠は香川が繰り出す徒手空拳を腕を使って急所を必死に守り耐える。今は力をためることを優先して

「ハッ！セイツ！どうしました？守ってばかりでは戦いになりませんよ！」

「うるさい！『Boost!!』これで3回目、いける！うおおおお!!！」

クロスしていた腕を崩し大きく振りかぶって香川の顔面を捕らえようとするが

「無駄です。兵士程度が倒せる力なんて高が知れていますよ。そんな力で私が倒せますか？」

ドゴオオン

「ゴハアツ！」

口から血があふれ出す。あまりの衝撃に意識が持つて行かれそうに

（なんだこのけりの鋭さは……本当に執事か！てかこの間、戦ったイザベラっていう女戦車の比じゃない）

だげど捕まえたぜ！

「むっ！足が……これが狙いですか」

「ああそうさ！……捕らえた！悪いがこれで決めさせて貰うぜ。爆発しろ！  
神セイクリッド・ギア器  
！」

『explosion!!』

左手に全てのエネルギーを集中させた『ドラゴンショット』だ。しかもこの至近距離なら避ける事はできないだろう。さらに

「『プロモーション』！『女王』！」

最強の駒の力が加わった今までで最高の一撃、先ほどまでの3回に加えて先程溜まった1回合計4回分の倍化の魔力の塊

「喰らえええええええええええ!!!」

今出しつくせる最高の攻撃が香川の至近距離で放たれる。これで決まった。そう一誠は勝利を確信した。

だが目の前の男は最高の一撃を間近で感じて、ただため息をついた。

「この程度ですか。存外に期待はずれですね」

バシユウウウウウウ

男が取った行動それはこの会場の誰もが予想すらできなかつた。勝利を確信した自分さえも

「ありえない……掴んだというのか。あのエネルギーの塊を!？」

ギャラリーから戦いを観戦していた敵の『戦車』イザベラすら驚きの声を吐く。

香川が取った行動、それは魔力を圧縮して打ち出した、『ドラゴンショット』を掴んだのだ。右手で、確りとあの高密度の塊を。その上で香川は高密度の魔力を、まるでりんごのように簡単に握りつぶしたのだ。

『女王』に昇格した最高の一撃が破られたことに動揺を隠せない。しかし敵も素直に動揺している隙を見逃すはずも無かつた。

「隙だらけですよ。」

「っしまっ!?」

まずいと感じて右手を離し、一旦距離をとろうとするが遅かった。殴る、蹴るのオンパレードが一瞬の間を突いて、豪雨の様に叩き込まれる。

ドガッ!バキッ!ドゴッ!ゴキッ!

「ガハッ!ガアアアアアア!」

痛い次元ではない。打撃一つ一つが確実にこちらの骨を砕くほどの威力を持っている。倍化の能力で力も上がり、更には『女王』で身体能力も上がっているはずなのに「いやあああああ!イツセー!辞めて!もういい・・・もういいわ!」

部長の叫び声が聞こえる．．．俺は．．．俺はまた負けるのか

くっそ．．．せつかく力を手に入れたのに．．．こんな所で俺は死ぬのか

部長を．．．部長を守れないで

「ま．．．だ．．．だ．．．だ．．．お．．．れは、まだ．．．戦え」

「いいえ．．．あなたはここで退場です。」

ガシツ！

（ガハッ！いつ息が．．．できない）

目の前の男の右腕がこちらの首を握り締める。『ドラゴンショット』すらも握りつぶ



す手に徐々に力が籠められる。やばい・息が、意識が遠のいて

「残念ですがここまでです。しかしあなたの神セイクリッド・ギア器だけは確りとこちらの組織で管理させて有効に使わせていただきますよ。ご安心ください。」

俺は……こんな、こんな何も関係ないやつに負けるのか。俺はまた泣かしてしまうのか

俺はまた部長を目の前で泣かすためにこんな所に

嫌だ……そんなの嫌だ。誰か……誰でも良い。あの人を、あの人を助けてくれ

誰か

「では……さようなら。」

「イツセー！いやああああ!!」

リアスの無力な絶叫に併せて、香川の無常な一撃が一誠の心臓を貫こうと放たれた……。

筈だった。

だが香川の一撃は一誠の胸先数センチの所で止められていた。漆黒のコートに包まれた腕に

「何っ！あなたは・・まさかっ!？」

「散れっ!!」

重く冷たい殺意と共に放たれる強力な一撃が自分の『ドラゴンシヨット』すら容易に砕いた香川を呆気なく蹴り飛ばす。

「ゲホッ！ゲホッ！．．．悪い、誰だか知らないけど助かつ！?お前．．．どうして!?!」

自分を助けてくれた人物にお礼をとその表情を目に映した瞬間、お礼は驚愕へと変わる。

「どうして……あなたが」

「先……輩……!? どうして」

「どうして……何故君がここに!?!」

「来て……くれた。来て……」

「貴様アアア!! どうしてここにっ! その前にどうやって冥界に入ってきたアアア!! 人間風情が!」

ライザーは続くに続く乱入者にパーティーが台無しにされたことに苛立ち怒号を上げる。

だがそんなライザーの怒気を鼻で笑い。ただ真っ直ぐにライザーを冷徹な瞳で睨み付ける。

会場の主だった人物がこぞつて注目する人物・・・

「吼えるな屑が、お前の駆除は後だ。まずは面倒な障害を片付ける。」

一誠の窮地を救った男、漆黒のコートに身を包み相川蓮、参戦。



## 第12話 ナイトの怒り

前回のお話

1：パーティー会場に乗り込んで言った一誠

2：その一誠を返り討ちにするなぞの執事、香川

3：一誠の命が奪われるその時、その命の灯火を救ったのは、彼らの仲間でもある相川蓮だった。

会場は来賓客の動揺と遺憾の感情でざわめいている。

その原因であるのは一誠を庇う形でその前に立ち尽くしている漆黒のコートを纏った相川 蓮その人

その存在が悪魔でも、墮天使無い。ただの人間ならなおさらに

ほとんどの悪魔がそう感じているだろう。

だがそんな悪魔の中でも一部だけ、その存在に気づいていた。

「グレイファイア……悪いけど」

「解っています。ただいまアジュカ様に……」

目の前の男が人間ではないと言うことに

蓮は自分に注がれる奇怪な視線を気にも留めず、ただ目の前、蹴りつけた香川の動きを監視する

先程の蹴り、不意を突いた一撃は確かに香川の腹部を捉えた。通常なら内臓破裂と肋骨損傷は確実のはず……だが

「ちっ……やはり人では無くなったか」

盛大な舌打ちに蓮の表情が歪む。

一方、蹴り付けられた香川は何とも無い様子で立ち上がる。

「まさか君自身が来るとは・・・お久しぶりですね。相川君。」

「！！！！！！！！」

香川の言葉にグレモリー眷属とフェニックス眷属は驚く。フェニックス家の執事とオカルト研究部に在籍しているにも人間である蓮が顔見知り

一瞬何かの聞き間違えとも思うだろう。だが

「ああ・・・2度と会うことは無いと思っていたがな」

「そうですね。ですが私はまた会えて良かったと思いますよ。なんせ」

キイイイイイイイン！キイイイイイイイン！

「君を殺すことが出来るのですからね」

金属音のような鈍い音がパーティー会場にいた全員の耳に響き渡ると同時にやつ等は蓮の背後、現れた。

『ブブブブブブブブ』

『ブブブブブブブブ』

「キヤアアツアアアアア!!」

「なっ!?何なんだこの化け物は! 一体どこから!」

周囲の悪魔が現れた化け物に驚き泣き叫ぶ。一瞬でパーティー会場が阿鼻叫喚で包まれるが、蓮は内心やはりと確信した。

香川の命令で現れたミラーモンスター……奴が操っていることは確実だな

現れた2体の『レイドラグーン』は3体ともただまっすぐに、ただ1人のターゲットの命を抉り取ろうと、その手に生える鋭い鉤爪を突きつけようとまっすぐに向かってくる。

まあ……狙いは俺だよな

「レンツ！逃げなさい！逃げて！」

「蓮君！」

「先輩！」

だが蓮は動かない。動こうともしない、ただ自分を3方向から襲い掛かろうとする『レイドラグーン』を静かに見つめる。

まるで殺してくれと言わんがように動かない。

「グツ！蓮・・・俺のことは良いから・・・逃げろ！」

香川にやられた傷から立つ力さえ残っていない一誠が最後の力で逃げろと呟く

一誠はどうやら自分が蓮の足枷になっていると思っっているようだが

「大丈夫だ」

「何が・・・大丈夫なんだよ！」

余裕の表情を浮かべる蓮。だが『レイドラグーン』の3方向からの鉤爪の脅威は直ぐそこまで迫る。

あと3秒・・・2秒・・・1秒・・・『レイドラグーン』の脅威が蓮の心臓を首を抉ろう迫る

「レン!!」

「蓮君!!」



「先輩!!」

「蓮!!」

「これで………終わりです。さよなら、相川君」

ああ．．．．そうだな。とつとと終わりにしようぜ

「この茶番をよ」

そうだろう．．．．

『『ブブ!!?』』

「『『えっ!』』」

一体何が起こったのかりアスたちは理解できない。だが蓮は口角を吊り上げる。思わず笑みが零れ落ちる。

「なるほど……やはり、一筋縄では……いきませんか」

香川の顔から余裕の表情が消える。どうやら奴等も悟った。というより……本気になったか。

ということはもう伏兵からの奇襲は成功しないと考えたほうが良いな。

「神代君……それに花園君まで……どうして、あなたたちが」

2体のミラーモンスターを蹴り飛ばした男、それはいつも相川蓮とよく行動をともにしていた人物

## 神代剣とレオ花園

「すべての説明は後でしてやる。だから今は聞くな。」

一々驚かれる度に質問されたらこつちとしては堪らない。寧ろ、邪魔だ。それよりも

「『レイドラグーン』2体で殺せるとは思いませんでした。まさかお友達と一緒にとはね」

『ブ・ブ・ブ・ブ』

『ブブブブ・ブ』

蹴り飛ばした『レイドラグーン』も体制を立て直すように立ち上がり、香川を守るように左右に展開する。

「蓮……こいつか？ 今回のターゲットは」

香川を睨み付ける剣。

「そうだ……香川英行。2年前に俺が殺した。」

殺したはずだったんだがな。正直言つて何で生きているのか疑問に思わないのか……  
そう言われれば気にならなくも無い。だがこの世界には死んだ人間を別の種族として  
蘇らせる手段なんて腐るほど存在する。俺の神セイクリッド・ギア器だつてそうだ。

「……彼人間では無いよ。悪魔でも墮天使でも無い。……どちらかというと僕らに近い。  
どうやら……奴等に関係がありそうだね」

人間でもない。悪魔でもない。ましてや天使や墮天使でもない。俺が出会った中で

やつの発する気配は3勢力のどれとも違う

「なにやら盛り上がっているようですが……私の手駒は『レイドラグーン』だけでは  
ありませんよ?」

キイイイイイイン!キイイイイイイン!キイイイイイイン!

『ブブブブブブ』

『ウフツウフフフウフフ』

『グギャツ』

香川の呼びかけに應えるように香川の周辺に新たなモンスターが現れる。

先程、蓮に襲いかかった『レイドラグーン』がもう1体

更に不気味な笑い声でこちらを馬鹿にしているようにふらふらと動く『サル型ミラーモンスター』

そして、腕の触手をぶらつかせる『イカ型ミラーモンスター』

「デッドリマーにバクラークン……決まりだな、今回の首謀者は……奴だ」

奴が今回の、ライザーフェニックスに取り入り、その影で多くの、罪も無い、力も無い一般の悪魔をミラーモンスターに喰わせ、幼い子供の生命を

人生を奪った。激しい怒りに、自分でもどうにも出来ないほどに怒りがこみ上げてくる。

「答えろ．．．．．香川。何故．．．．．子供を狙った」

「子供．．．．．ああ．．．やはりあなたでしたか。道理で始末に向かわせた『レイドラグーン』からの反応が無いわけだ。」

「良いから．．．．．答えろ。香川」

有無を言わせない睨みと憤怒の籠った声がざわついた会場に木霊する。

そして、香川はつまらなそうに口にする。

「決まっているでしょう？我々の正体を隠すためですよ。まあどの道、今日は片付ける予定でしたがね」

まるで、それがどうかしましたか？と言った平然とした態度に蓮の中で何かははじけた。



「もういい……もう十分だ。」

「そうですか……ならば最後に、どうです？この数の差では勝ち目は無いでしょう。我々と……手を組みませんか？」

手を組む？手を組むだつて

「クククハハハハアツハハハ!!」

思わず高笑いが自分の口から漏れてしまう。まさかここまで愚かだったとは思わなかった。あいつは、目の前の存在は俺や剣、レオにたったこれだけの数で勝とうというのだ。これが笑えずにいられるか

「蓮」

「レン」

ああ解っているよ剣・・・レオ・・・俺はもとより手を組むつもりも無い

まして奴を生かしておくつもりも無い。こちらの戦力は現状、俺、剣、レオ。対してあちらは香川に加えて『レイドラグーン』が3体、『デッドリマー』に『バクラーケン』の6体と数だけ見ればこちらが不利に見える。

だがそれはあくまで数の差だけを鑑みればの話、質では圧倒的にこちらが勝る。

だがこの城の周囲に感じられるミラーモンスターの気配はこの場にはないものでも数十は超える。それらを全て一度に排除するとなると実に面倒だ。それに被害も大きいだろう。

い  
だが、それでも俺は・・・目の前のこいつをこのまま生かしておくつもりは一切無

「香川……忘れたか？俺は一度的と認めたものは誰であろうと殺す。そういう男だということ。」

「……そうですか。ならば……望み通り、殺してあげますよ！」

奴は懐から取り出したカードデッキを俺たちに見せ付けるように翳す。香川の腰に浮き上がるベルトに一誠やリアスはまさかという驚きの表情を浮かべる。そのベルトは一誠が1度、墮天使に殺された時、そしてはぐれ悪魔バイザーの討伐の折に『デイスパイダー』に捕食されかかった時など自分たちの危機を3度も救った存在

『変身』

香川は空中に放り投げたカードデッキを腰のVバックルに装填する。

香川の体に鏡のように合わさる数枚の残像がその姿を変える。

「仮面ライダー……なの!？」

「ほう……仮面ライダーを知っている。まあどの仮面ライダーを言っているのかは予想がつきそうですが……そうですね……相川君」

言葉をこちらに投げる香川に俺は思わず嘲笑をもらす。確かにそうだ。奴の言うとおりだ

何時か正体がばれることになる。それは予感していた。朱乃に正体がばれた時、もうこれはみんなに伝わったと確信したさ

だがな

「例え正体が割れたとしても、例えそれで俺たちが蔑まれたとしても」

『Start UP』

「例え過去に大きな罪を背負っていたとしても」

『 315 Standing by! 』

「俺たちは大切な者を、大切な仲間を守るために、弱者を守るために戦う」

剣は左手に逆手持ちする紫色の日本刀、『サソードヤイバー』を、右手には小型の変身ツールである『サソードゼクター』を

レオは携帯電話型トランスツールである『サイガフォン』に変身コードを打ち込み蓮は左手に添えてある蝙蝠の刻印が刻まれたカードデッキを前方に構える。

ただ大切な者を、仲間を、友人のために、戦う。

「例え孤独に、1人になろうとも戦う。自らの信念のために戦い続ける。それが・

仮面ライダーだ!!! 変身!

「変身!!!」

『HEN—SHIN』

『COMPLETE!』

蓮が、剣が、レオが、それぞれの思いを胸に変身の一言とともに姿を変える。

剣は全身にオレンジ色のチューブ『ブラッドベセル』を全身に巻きつけた重装甲の姿に

レオはギリシャ文字の『Ψ』が描かれた頭部、そして強力な力の源であるエネルギー、『フォトンブラッド』が『フォトンストリーム』によって白いライダースーツを駆け巡る。そして蓮は漆黒のマントを靡かせた西洋騎士に、その左のホルスターには蝙蝠を模したナツクルガードが特徴の細い長刀が使い手に使われるのを待つように蝙蝠の目が赤く輝く。

「貴方達……一体何者なんですか!!」

「駒王学園2年、相川蓮。またの名を『仮面ライダーナイト』」

「同じく駒王学園2年、神代剣。またの名を『仮面ライダーサソード』」

「同様に駒王学園2年、レオ花園。またの名を『仮面ライダーサイガ』」

これから貴様たちを、断罪する者の名前だ。覚えておけ。

今戦いの鐘は鳴り響く。